增補
改正
俳諧歳時記栞草
二

増補 俳諧歳時記草

江戸 曲亭主人纂輔
藍亭青藍増補

夏

漢書律曆志 太陽者南方、南任也、陽氣任養物於時為夏。夏假也、物假大乃宣平。

炎帝 淮南子 南方火也、其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏。

祝融 神 禮月令 夏月其帝、炎帝、其神祝融。祝融顓頊氏之子、曰黎、為火官正者。

昊天 纂要 天曰昊。昊天言氣浩汗。

朱明 爾雅 夏為朱明。一曰長嬴。註 氣赤而光明、故曰朱明。

蒸炒 韓文 自從五月困暑湿如坐深甑遭蒸炒。說苑 湯之時大旱七年、雒拆川竭煎沙爛石。

四月

仲呂 律月令 律、仲呂、高誘註曰、陽散在外、陰実在中、所謂破陽成功。

立夏 孝経緯 穀雨後十五日斗指巽為立夏。

蹢躅 通俗志作蹢躅 廣義

騈蹟、四月名也、**小満** 月令廣義 立夏後十五日斗指巳為小満、四月中、小満者物長于此少得盈満也、

余月 爾雅疏釈 四月為余、

乾月 月令廣義 四月卦乾、五陽決退一陰陰復而為純陽乾天也、

正陽月 西京雑記 陽德用事和氣皆陽為正、

己月 晉書樂志 夏正建寅為正月故四月為巳、

首夏、初夏、孟夏 元帝纂要

卯花月 卯月釈名 波流花

故この花月と云、又畧して、卯月とも、

花残月 蔵玉 ふぢの花夏おくれて山の花のこり月 有家

得鳥羽月 後鳥羽院 下ゑやまんえもんの月

五月

蕤賓 律 律暦志 蕤繼也、賓導也、言陽始導陰氣使繼養物也、位于午在五月、

芒種 月令廣義 孝經緯云、小満後十五日、斗指酉為芒種、五月節、言有芒之穀可播種也、

夏至 中同上 芒種後十五日、斗指午為夏至、言万物于此假大而極至也、

仲夏 仲同中、五月夏中也、

茂林、蔚林 纂要木曰蔚林茂林、

皐月 爾雅疏釈 五月為皐月、五月得戌曰厲皐、厲皐之氣也、五月建焉而辰有鶉首、鶉首者星名、鶉首月之暑乎、

鶉月 周礼注 鶉首午、

橘月 蔵玉 たぢの代

月見ぬ月 蔵玉 ささぐれの晴

昔のもひ出らん家隆

早苗月 五月八農人方苗を捕む故ゑ早月云、

早苗月と云、今畧して早月云、

頭昭

六月

林鍾 律 律暦志 林君也、言陰氣受任助蕤賓君主種物使長樹盛也、位於未在六月、

鐘聚也、白虎通 言万物成熟種類多也、

小暑 節 月令廣義 孝經緯云、夏至後十五日、斗指丁為小暑、六月節、

大

暑[同上]小暑後十五日、斗、猶未為大暑、六月中、

季夏 [礼記]季夏之月、日在柳[字彙]九、未月ニ曰季月、

瓜期 [左傳]齊侯使連称管至父戍葵丘、瓜時而往、及瓜代

且月 [尓雅]六月為且、疏云、六月得已則曰、則且、且子余切、

遯月 [易]本[義]遯退避也、為卦二陰浸長、陽當退避、故為遯、六月之卦也、

朔月 [年浪草]云、季吟[増山井]ニ六月の異名とす、[礼記]曰、朔月少牢五俎四簋、云、此月朔の義之未詳其義、仍て[illegible]闕く、

陽氷 [年浪草]ニ出、[増山井]ニ出、疑らくハ誤ニ、按ニ、陽ハ賜ニ作る、[月令廣義]賜氷ハ石季竜于氷臺蔵氷ニ伏之日、以賜大臣ニ、又林滋賜氷の賦あり、

風待月 [蔵玉]松のけふ床居とりてふく八もや風待月の夜のことさよ　顕昭

鳴神月 [同上]夕立ハあゆみもやらぬ鳴神の月ふとありぬ夏やくるらん　定家

常夏月 [同上]ちりハらひ妹かたらむとこなつの月まちてそる花のさかりを　後鳥羽院

みな月 [奥儀抄]農事もことなきさかりなれハみなしつきといふ云〻○一説ニハ此月暑熱烈しく、水泉涸て尽くるゆゑニ、水無月といふ、さまざまの説あれども信じがたし、又荷田東丸ハ、雷鳴る月の上下を略してなる月といへり、此説ぞ妨くなるべくや、

い

四月

虎杖競 朔日 [夏繦論]貴布祢の御神事ニ、此日加茂の氏人騎馬ニて詣づ、帰る時市原野の連理の芝と云所ニ於て、虎杖を争ひとる、其大小多少を論て、例のごとくみて甚興じ、

稲荷祭 中卯日○山城国紀伊郡ニあり、[紀事]四月卯日二ッあれバ初の卯日を用ふ、新御供、社家松本氏調進ス、神輿五基ニ供すること巳の刻ばかりに神輿五基御旅所の西ニ出て東寺の南門の内ニ入る、此所ニ於て床をまうく、五社の神輿おのおの南にむかひて其上ニ安置ス、寺僧おのおの御供所ニ侍りて而して東寺の役人甲冑を着し、左手ニ長刀を携へ、右手ニ御供餅をさゝげ、東寺地人の妻四人寺中頭屋院より雑品供物を唐櫃ニ盛り、頭上ニいたゞき来て、神輿毎ニこれを供す、寺僧一人壇上ニ進み出て幣を奉り、又護法を修ス、一座終りて後、社家并ニ氏子供

奉り、北の方大宮通りと経て、五条松原より、五条の橋を過ぎ、大和大路を本山へ入、○

龍頭太

譜 桓武天皇御宇の人荷田氏の祖、山城国稲荷祭の時、神輿のさきへ行くる面と龍頭太とを、その外の祭の假面八王の鼻と称す、龍頭太ハ田中の社の神職、この面則ち龍頭太ハ作ると以て、もと名づけ[illegible]

伊勢神衣祭

十四日 公事根源 神衣祭ハ神祇令の[illegible]、神服部潔齋して、三河の赤引の神調の糸と以て、神衣と為る、又麻績連と氏人、麻とうみて和妙荒妙と織て、神明に奉る、神衣の祭と為す、延喜式おなし

忌さす

祭の条

和漢三才画会 江易三井寺の山中に生、苗の高サ二三寸、葉の大サ瓢樹の葉の如く尖て、地に揺て生ず、二月小白花と為て、虎耳草花に似て、三月実と結ぶ、青大豆の如く而て、数顆攢り生ず、揚梅の揉て、葉の交ひに裹る、外色青く内紫黒色、小児皮と剥て食ふ、味微酸く甘、

覆盆子

本草 蔓に鉤刺あり、一枝五葉、葉小して面背皆青く光、薄くもて毛あり、白花と為て、四五月実の子と成て蓬蘽よりも小く稀疎に生ず、熟すれバ黄に、熟すれバ烏赤に似て、故に名之、○蓬蘽 覆盆子、蕪樹莓、蛇莓

石藤

和漢三才図会 莞花 俗云以波不知 花葉並に藤に似て小し、三月花と為て、紫色、或ハ白花、又草藤上の説のごとし、紫花白花の二種あり、三月より四月に至て花と為て、又一種夏藤あり、黄白色、蔓葉花ともに紫藤に似て小し、

馬蓼

天和本艸 山州山科の近道に往て有り、四月花と発く、本草凡物の大なるを馬と以て名づく、日本にハ相似て[illegible]ことのごとし、大蓼、犬山椒、犬黄楊、[illegible]

芋植る

芋の法、秋部に見るべし、

紫羅傘

本草 嘉経 いぬ蓼ハ葉に黒点あり、紫羅傘、鳶尾と名く、葉射干に似て、花の色紫碧、抽でず、其根と鳶頭と共に茶に入る、○鳶尾ハ燕子花の類なり、花早く発て、白花もあり、

石蘚花

或ハ石蘚に作る、本草 石上に叢生て、其根糾結して甚だ繁し、茎葉生じて皆青色、乾て黄色、紅花と為て、蔕の上に自ら根鬚と生じ、水折下して、砂石と以て栽て、或ハ物と

坎く盛り屋下に掛頻りに洗ふ水と坎く寸、年と徑く死す、俗に称して

蘭花

本草 虎鬚草、一名燈心草、千年潤石蘚とす 即ち竜の鬚のごとし、但し竜の鬚は堅小にして蘚実す、此草は稍粗にして蘚虚き者く白し、呉人栽之時、蘚を取て燈炷とす、艸を以て席及び蓑と織る、

和名抄 蘭、和名為、年色立成云、路島尻刺、

五月

卯地打

世諺問答 今日、童の小弓と持て、いんちの馬場に、馬に騎て弓射ること、何の故ぞや、答むじ左右なしとや是ぞ始とすべし、

紀事 児童、柳の木と以て、大小の刀と作て、こきを菖蒲刀と云、男児これを腰に横ふ、頭巾と着て山伏の体をなす、晩に及て、鴨河の辺に出て、左右に列て、礫と擲て相戦ふ、是を卯地打と云、

守宮を搗

武帝記 端午の日、守宮を取て飼ひ丹砂を以て体を赤く画き、次の歳此日搗之、人の臂に塗る、犯すことあれば滅ぶ、故に守宮と云ふ、

生玉の流鏑馬

五日 神社啓蒙 生玉神社は摂津国東生郡、天王寺の辺にあり、祭る処の神一座、天生玉神なり、

社家註進 明応年中、本願寺の僧、この所に来りて寺院とす、神地を掠めて境内に接入す、神の不潔と悪み、彼の僧を罰す、僧ども、神主藤原吉勝に訴て、神殿造替の宿禱といざき、願辞を告く、数日の僧の病愈ぬ、遂に神殿を今の旅店の廻りに迁し奉る、其後信長の兵火に焼て、灰燼となる、

焼に神鉾を別所に迁す、慶長年中秀吉、城郭を築くの刻、今の地に迁す、

紀事追加 今日午の刻、流鏑馬、門外より鳥居の方へ馳す、其装束腹帯陳羽織と着て、只一さんにして止む、

今宮祭

九日之今 十五日ヲ用 ○山城国愛宕郡紫野に祭る所牛頭天皇

諸神記 正暦五年六月廿七日、疫神と船罡山に安置せ、長保三年五月九日、疫神と紫野に迁座す、霊夢の告にて、京師の衆庶御霊会と行ふ、

紀事 午時神輿二基、祖殿の宮各旅所に出で相殿の宮、一説愛宕の宮、古へ愛宕権現鷹峯にあり、此社を今の愛宕山に移す、一条院御宇勧請す、愛宕平社地主神、故に掠社と寸、神幸の日、鉾十二本あり、凡

鉾を出す町々よりも別當供奉し、氏子相従ふ神幸小川通りより、元誓願寺大宮通りを過、松罡山の北の麓を過て、本山へ入る、

六月 忌火御飯

〔江次第〕忌火御飯 六月 十一月 十二月 一日早旦供之 以御臺盤一脚供之次供御飯 〔公事根源〕内膳司より奉まる御菜四種和布御汁一坏下器、是大床子の御座にて供ずるなり、景行天皇の御時よりはじまる、忌火とて火を忌むなり、神事などの時は不浄の火をまじへずきよまはる也、八月次神今食の御神事を今日より始めらるゝ

嚴島祭

十五日 藝州佐伯郡宮島にあり、祭る所の神三座、市杵島姫神、田心姫神、湍津姫神、○或書云推古天皇の御宇、播广国の住人、内舎人佐伯の鞍職、當国に在し、恩賀の島にありし時に紅帆の船来る、船の中に瓶あり、瓶の中に鉾と立赤幣を着けたり、三女あり、容粧端正にして曰、我皇祚守護の為来現せり、よろしく宝殿を恩賀の島に造るべし、と云時に推古天皇二十二年十一月叡聞に達し、社を営み、嚴島大明神と号す、始の名は恩賀の島、後に市杵島の神号を用ひてまたと唱ふ、或は地景の美を以て称す、當社後は深山、前は蒼海、左は原野、右は松原、その野に水あり、御洗井と名く、蓋し當社は山上にあり、廻廊は平地にありて、海潮みつる時は廻廊をひたす、乾のごとき八千潟五十町ばかりなり、無双の絶景也、今通して宮島と号す、池の御前は同国安藝郡にありて嚴島と同じく神体也、毎年六月十七日の夜いつくしまの神輿船舞楽を奏し、此に渡らせたまふを清會と云、平相国清盛、霊験をたふとみて建立す、其後弘治二年陶晴賢滅亡の時、兵火にかゝりて回禄す、ここに於て毛利大膳大夫元就再興す、廻廊周百十八間ありといふ、例祭六月十五日より十七日に至る、先づ神前御池にて管絃の船を組む、舸三艘を舫ひて座を張渡し、藩を結び、竹にて楼を作り、花と灯籠を釣りて前後挑灯数多ともし飾る、十七日御船濫申の刻件の舟を大鳥居の正面より乗出し、管絃を奏して外宮に押渡り、酉刻より管絃を供僧伽陀并舞楽畢て御船を嚴島へ漕戻し、長濱の沖にて奏楽をなし、亥刻頃大鳥居のうちに漕入る、六月上旬より諸方の商人あつまり、十五日より群集をなす、町々にくりくは〔嚴島道芝記に出〕

伊勢祭禮

十六日 十七日 〔延喜神祭式〕六月十六日度会宮を祭、十七日太神宮を祭る、其儀十五日黄昏以後、禰宜、諸内人物忌等を率

みぐ神の御雑物を陳列し読て、亥時夕膳を供し、辺時朝膳を供ず、祢宜内人ゟ歌舞を奏す。云〻十七日太神宮ゟ参る其儀一度会ゟ同じ云〻○外宮十六日内宮十七日ニ是を行ハる、京師より御奉納の神宝を神主神殿へ捧るゝとき、官殿の御戸を開く、是を拝せんとて諸人群参するゝ十人の祢宜其外、広前にて松明をとりて祝詞を捧ぐ、今日出家円頂の者を許さしむ参詣なさしむよらう

泉

[尓雅]水の本を源といひ源を泉と云[釈名]泉ハいづる水也、いづるのるといづのつを略せしなく

泉殿、瀧殿

○泉水の辺、滝の辺などに造る殿舎をいふ、嵯峨の大覚寺栖霞寺などにも滝殿あり、神泉苑にも滝殿あり、[源氏松風巻]たきどのゝこゝろばへなどおとらずおもしろき代

井戸替

さらし井、[漢書][礼儀][志]夏至井を浚へ水を改め冬至ゟ燧を鑽て火を改むるぞ、瘟疫を去べし○さらし井ハ六月井を浚ると云[夫木]松が根ゟ夕さむらし井とほりけるくおもふまぬ外の秋をしる乳　定家

藺苅

此草備後国ゟ多し、州に席とす、多くハ四月

白麻苅

[和漢三才圖会]莔麻藺苅の条に云ごとくべし、日向薩摩ゟ多くあり、九州の土の産其葉微し胡麻葉ニ似たり大く鋸歯あるもある○本草綱目ニ桐葉ニ似たりといへるハ不ず精くわらさり○三餘齋曰予遠州の種を得てこれを種るニ一年ハ其葉胡麻の葉、或ハ棣棠花の葉のごとし、花黄なり、其実茄ニ似たて、又翌年その子を種れバ則生じて葉桐の葉の如し、黄花を開く、状ち棉の花の如し、実ハ半磨形の如し、是雄雌ハあるべきへ本草及ひ和三の説、とも不詳とすべし

櫟の花

時珍云二種あり、一種ハ實を結むざ其名を栩といふ、一種ハ実を結ふ其名を栩といふ其実を橡といふ其葉櫧の葉の如くして文理あり、皆斜ニ匂る、四五月花を開く、栗の花の如し黄色[天][和本草]今按ずるに櫟の木ハ櫧ニ似て同類異物あり、其ハ木の高サ二三丈実を櫧ニ似たり、

ろ 六月

六月會

或ハ傳教会又講会ずる[公事根源]こハ傳教大師の忌日也、勅使登山の儀をなす六月四日これを行
○山家説云六月会ハ弘仁十四年始て行はる、建暦三年ニ勅して御斎会ニ准ぜらるとし宣命使あり○釈最澄、姓ハ三津氏近江滋賀郡の人なり、神護景雲元年ニ生ま、弘

仁十三年六月四日寂す、年五十六、貞観八年八月、勅して傳教大師と謚す、此会八、叡山の谷々に論義を、会場一院で年番あり、十月天台会も同事し、

四月

鼻高祭

毎年四月八日、

大和名所記

南都興福寺中門外に、仏生会とて、伶人舞楽あり、其舞の中陵王の舞と奏する外、其面の鼻高をとて、俗に此法会を呼ぶ、鼻高

花御堂

の部、佛生会の条に注す、

花摘

の部、戒壇堂開帳の条に注す、

花供

高野の花供の部を見べし、

梅天

杜甫詩 南京西浦道、四月熟黄梅湛々長江夫寒々細雨来、

嚴維詩 梅天一雨清、潜確

類書 唐人成都を以て南京とす、則蜀中に梅雨乃ち四月に在り、是四月の梅雨なり、又熟梅天黄梅天ともいへり、

葉抑

本草 春初果実と生じ、即ち黄蕊花と開く、春晩に至り葉長成す、

葉櫻

支子一汲に葉櫻と春とす、蕉門諸流に四月とせり、首夏の新緑を賞する歟、

夏見草

如花の異名、蔵玉 つつみぐさともいふ時鳥立田の山の里に鳴けども、

花柚

大和本草 一種花柚にして多くなる、酒にすべし、美味加る故に各づ、味大柚に劣れども又賞すべし、

白丁花

和漢三才図会 花白く微に丁香の氣あり、故に俗に名づ、小樹、高さ二三尺、枝莖勁く、葉は狗黄楊に似て、四月小白花を開く、大廿三分、一種千葉のものあり、枝莖を折すべし、挿之活し、叢生す、墻籬際限の為に、人家擔滴の下に植ゑ、

花王

牡丹と云ふ、白氏文集 牡丹芳花開花落二十日、一城之人皆如狂、詞花集 咲しより散つくまで、

名

錢魯公嘗て曰、人牡丹と謂て花王とす、今姚黄は真に其王なり、魏紫は其后也、

花宰相

芍薬と云ふ、本草 群花品中、牡丹と次ぐ者一、芍薬と云ふ、故に牡丹と謂て花王とす、芍薬と花相とす、

蓮の蕊

同上 蕊、藕芽泥を穿て白鶴を成す、即ち蕊、嫩弱、竹の行鞭の如し、長さその丈余に至る、五六月嫩を時水に没して取之、蔬とす、

茹あづ〜俗に萬緑菜と呼ぶ

和名抄 蓮 和名波知須之波比、

蓮の浮葉 荷葉、清明の後初て水に貼す、是を浮葉と

飛蟻 和漢三才畫会 蟻は羽ある蟻と人家の古き松の柱の間に産生び其蛾細小白く罌粟子の如し、黒点ある処頭と尋て黄赤小蔓下翼と生下再び黒く変して群飛す、奈何しも することあること古ゞ相傳ふ呪いの奇と書て其柱小粘とき八蟹こぐく除去るもの試み験る其奇誰人の詠あることを聞ども八山本住べきことのあるゝ里へ初松魚 東医宝鑑 松魚性平 味甘く毒小出ることもの多あやまり、肉肥色赤くして鮮明あること松の郎のごゝ故小松魚と東北江海の中小生ず、天和本草 相州鎌倉或八小田原の辺小多こと鈎て江府小送るこの早く生ることの早く初鰹と称し賞味す、○烏帽子魚 鯽を云、又部おく みるゞ、

兼三夏物 麥少 和漢三才畫会 麥と炒磨て細末小し飛羅て冷水小浸し一夜を喫る砂糖小和して愈佳し、○

早鮎 長又一夜鮎と云ちゐく八此製俗に麥こがしと云、 奥貝の数種と細く截て醞醸す故小柿鮨とも云其熟すること

もゝ〜、依て早鮨、一夜鮨と小

もろく鮎 毛吹草 羽州秋田のもろく鮎是

鱒小似る魚也、 蝿 本草 夏出る冬蟄す暖と喜び寒と悪む其蛆と胎く蛆と生ず灰中小入く蛆化して蝿とある蚕蝎の蛾小化すゝく如し、水小溺て死し、灰を得て活く、

蝿虎 同上 小蟻蛛く事ら蝿と捕へく蝿之是と蝿虎と小、

方目鳥 和漢三才畫会 鶺鴒、正字、接、大さ鳩の外し黒色短き尾、尖まる嘴本紅小ま黄く、脚長く〜て正青し、常に田沢小鳴、夏月鶺と以く上餌と子味美く、又大鶺八形ち鶺小似く大く、形色少し異く、尓雅集註 鳩八即ち護田鳥小り、人とゝる時八鳴く、主の官と守る小似くゝゝあり、故小名之

苕草 蘊頭曰、根蓋生と作す、葉毎三十莖を、莖小赤ゝを黄ゝるを、七月黄花と如く〇陶弘景曰、莖苗と取く掃帚と小、

水馬 競渡部、五月雨の条小注す、

梅雨 部、五月雨の条小注す、

半夏生 本草 半夏、一名守田、礼、月令曰、五月半夏生、蓋當夏之半故名守田、月令廣

義半夏ハ藥草ニ夏の半ニ居て生ず、

○五月中ゝり十日ゝ半夏生と云、

反舌無声 月令

礼記疏ニ反舌を蝦蟇と云、

博多百合 和漢三才圖会 花黄白色にして、背に赤き斑の文理あり、云々

花菖蒲 白菖の屬ゝ其葉水菖蒲に似ゝ、色淡青、水陸宜し、共に叢生す、五月一莖と抽でゝ端に花を生ず、形狀燕子花の如し、紫淡紅白の數色あり、最も愛觀すべし、水菖蒲に似ゝ花と むらゝ故に花菖蒲と云

紫羅襴花 本草 白菖二種あり、一種は池沢に生じ、根大にゝく肥白く節疎なるを白菖と云、俗に是を泥菖蒲と云、一種は溪間に生ず、根瘦赤節稍密なるを溪孫と云、俗是を水菖蒲と云、和漢三才圖会 白菖は葉花皆燕子花に似ゝ、瘦小ゝ、其花紫色、又白花あるあり、淡紅あるあり、

花がつゝ 此ことの古来淺論多し、但し八雲御抄童蒙抄其外頭注密勘の諸説に、菰の事と思ふ姑くしばらく、又田字草のことゝも云、物の絵様に出の花とゝ云ゝ、初蟬 せみ部蟬の条に可見

と云、是は田字草のことゝ云ゝ、

羽抜鳥、羽抜鴨 凡諸鳥、五月羽毛脱落あるも老頭のごとくなるを羽抜鳥と云、

新式 夏草の野沢ゝ孔の羽ぬけ鳥あり、しかるあるゝ鳥多家

六月 **博多祭** 十五日

○博田撕田の神社は筑前國那珂郡にあり、祭る所の神、中殿は撕稻田姫命、或説に大若子命、勸請は天平宝字元年、右殿は祇園牛頭天皇、勸請は天慶五年、左殿は天照皇太神宮、勸請年月詳ならず、件の三神相殿ゝ、正月八日正大般若を修す、六月十五日祇園会、十一月二ノ卯日新嘗会、今六月十五日祭礼を行ふ、日十七日、永享四年六月十五日始て祭之、作り山六基、大は京師祇園会の山に四倍と云、右山次第に上張りに組上げて、階上凡百人と居らゝ、一基と引るの凡千人ゝ、木偶人に鎧を着せて、階上に立て、其甲冑に皆姓名と書あるは故に、領主の家臣、我おゝ〻と美と尽して着用の鎧と出すと、此祭礼のもてなす、

橋立祭 神輿三基、供奉の行装又嚴重にて、

九五日 風土記 丹後国与佐郡艮の方に遠石里あり、里中に長き大崎あり、長サ二十二百二十九丈、廣サ九丈二尺、是と天

橋立と名づく、又八久志之渡と名づく、拾芥抄智恩寺八是切戸文殊安置の道場なり、天竜六奈灯明を供ス、紀事追加六月廿五日、丹後切戸の文殊会、同橋立祭三、文殊会、橋立祭同事、○天橋山智恩寺八延喜四年甲子勅願、山号寺号を賜ふ、荘田を賜ふ、四百余年を経て、嘉暦年中、嵩山禅師住持ス、是禅刹の始し、夫より三百余年、住侶詳ならず、寛永年中、国主京極高廣、別源禅師を請じて住持ス、是より洛の妙心寺に属ス、寺領五十石余、文殊堂八巽向に明暦年中改造、堂内に延喜の勅額あり、○橋立明神八、本社豊受太神と祭る、左八大河大明神、右八大竜王と祭 ○伊祢浦名所、伊祢八惣名なり、九日出より亀島まで、入江の裏向に、丹後鄙と称八此所なり、○天橋立八与佐の海中にある長洲、長サ三十六町、土人浮島と称八誤なり、松樹亜木のやうに連なり、碧海中央六里松と作りて、詩人六里松と称ス、社の近処樹の茂りたる所を濃松といひ、その所を淡松と称ス、俗に三保八梢なり、橋立八一枝なり、

あり、二町ばかりの舟渡あり、是と九世渡と世に切渡の文殊とも是なり、内外濱、子日の時、萬代の濱あるも、此橋立の別名なり、○竜灯松八洞の磯の辺にあり、松樹蓋のごとく、苗を生ず、一茎、その端に三ツ葉を、浅緑色、頗る竹の葉に似たり、○此もの和産と相同じ、花八夏のまゝ秋に及ぶ、○蓮花 余雅 荷八芙蕖、其蕚八茄、その花八菡萏、其実八蓮、其根八藕、其中八菂、その中八薏、注曰、芙渠八總名、別名芙蓉、菡萏八蓮花、○愛蓮説 蓮花之君子者也、○池見抄、露堪草、水堪草、その異名なり、蓮実 貞徳曰、蓮八花に実と具してある故に蓮の実も夏、蓮の実飛も秋なり、

半夏章

蘇頌曰 半夏、二月

あ部麻の葉の条に生ず、

菖蒲章

○十六日例幣使、野州日光山へ参向、拝礼の儀あり、中の社神輿三基、御宮と正一奉る、新宮の拝殿に遷幸ありて、宵宮三仏堂の前に於て、例年の舞を奏ス、翌十七日巳刻に榊と御旅所に渡し奉る、次に御祭礼供奉の行装あり、新

四月 日光祭 十七日

書より御旅所へ至るの間、九十五町ばかり、兵士鳥兜鉾を持職士赤面の大鉾八、猿田彦命と表す、獅子頭田楽法師、神子男八人女三人、鋼馬上素襖裳袴、社家馬上束帯、御神馬、御弓、御鉄炮、甲冑童子、御翳、大鼓、鉦、皷、猿公、宮仕、神人、伶人、奏樂、水有之、鳥匹、御祭礼奉行諸武家、駕輿丁素襖、御本社神輿、白張百人、素襖九人、山王（一説日光権現）の神輿、白張百人、社祢九人、麻多羅神神輿、白張百人、社祢九人、行者山伏、群行、御旅所に於て献供の間、東遊奏示あり、終て神輿還幸、御本社に奉る、日光三社と八、新宮大己貴尊、滝尾田心姫命、宗宮味耜高彦根命、外に寂光権現、これ下照姫命、主社のふざけ祭礼八三月三日あり、

煮酒

東医宝鑑 煮酒八、味い辛に佳し、夏月のむに宜しき、是本邦の煮酒に似たる名目と称し、本邦にハ夏日酒の氣味と失もとする為に、煮酒の法と用ふ、京師にハ是と酒煮と称し、此日酒肆、親を跡をとゝぶす、價とゝ〻ば、恣に酒とのゝしむ、是と酒煮の祝といふなり、

兼三夏物

煮冷

い部、冷汁の条に注す

煮取

和漢三才図会 鰹節を造る時、其液の滞るものと取て、こゝとく収む、黒紫色、味甘美、○煮取ゝ麦でとお僧愚ゝ 嵐雪

五月

入梅

さ部、五月雨の条に注す、

恐冬花

金銀花 ○弘景曰、此草藤生ス、冬ヲ凌ク、凋まず、故に恐冬と名ク、○時珍曰、木に附て蔓延す、莖微し紫色、節に對て葉と生ず、葉蔕、茘に似て青く、濃毛を、三四月花を開く、長サ寸、一蒂に両花、二瓣、一ハ大、一ハ小、半辺の状の如し、長蕊、花初て白く、その瓣も白色、二三日を経れば色黄に変じ、新旧相半て、相映ず、故に金銀花と呼ぶ、気甚だ芳香、

和名抄 恐冬 和名須比比豆良

鳩の浮巣

大和本草 鵓、字彙云、好食似鳧、小鴨、鶴也

水食似鳧、小鴨、鶴也、俗に鳩の字と用ふ、万葉以下の古哥に、鳩鳥とゝ〻ある是ゝ、水上に浮巣と掛く、風に隨て たゞゝふ、

毎名抄 祐盛法師、曰、鳩の浮巣ゝ、ゆゝゝ海の潮にゝゝ、海の潮にゝゝ、ゆゝゝ鳩の巣とゝ、ゝゝ、芦のくきゝ中にこめく、俤も拈穂とゝ、くゝゝげてめぐるふくいゝれば、潮ゝゝ上ゝゝゝ、汐ゝゝゝゝ、鳩の浮巣のあゝれとゝゝゝ、芦のゝもと の波ゝゝゝゝ

幻住庵記 今年湖水

の蔭さのもとに、貞享式 鴨とらひ鷺とらひて八月ハ夏と決すべし鳴の浮巣と水鳥の用ゐる巣ハ巣とむすびこハ夏と決すべし鳴の浮巣といつぐ古式に雖もあせることなく水中の芦の巣と搦ぶ水の増減に浮こと沈こと四季ともに其ことく捨おく故に道理とつゞく雖とハあれど鳥の吉巣ハ夏ハ決して夏と定むべきものゆゑ、とかくの時ハ夏あるべし、浮巣ハ決して夏と定むべきものゆゑ、巣を用ゐるとハ

六月

白作ゐるとハ

蒜根

本草 蒜、蒜、夏月根と食ハ冬風癰腫加ゐることおそれなし、○和俗土用に入る日、蒜及小豆と食すハ瘟疫と辟んが為なり

四月

佛の産湯

ふ部、仏生会の条に出

厚朴花

本草 厚朴、其木質朴ゐるゆゑ、皮厚し、故に名づく、和漢三才蒔会 按ゐ、厚朴、葉大きゆゑの八尺に近し、瓣の葉に似て刻歯あり、色淺緑にして冬凋て春嫩葉を生ず、夏花を開く、形牡丹花に似て白色淺紫、大サ一尺七寸、隨て実と結ぶ冬青子に似て大ク熟すれとハ殼自ら裂て裏赤く中の子黑し、老木の皮ゐて鱗の皺を剥て薬用ゐ、

牡丹

事物紀原 隋、煬帝の世に始て牡丹と傳ふ、唐人も亦木芍薬と開元の時、宮中及び民間競て曲を今品極て多し、貞享式 牡丹、杜若、この二名ハ和漢の遠ひなく、詩に牡丹を春とし、哥に杜若を春とす、中古ゐ俳諧の加減より、二名を夏ゐ用ゐるゆゑ、初夏ゐハ花の出る故なり、○木芍薬、花の王、ふくと草、夫日草、富貴艸、ようひ草、夜白艸、名取草、以上牡丹の異名なり、ゐの〳〵頭字の部ゐ、ちゝ出せるところなり、○年浪草ゐ、八雲御抄に引く、山橘と牡丹の異名とせる八八雲の誤と傳へ、ゐのもの、万葉ゐ、ある山橘ハ、数枝子のすく、又先代旧事紀に引く、豊橘と牡丹のことなり、此先代旧事紀ハ偽書ゐ、専ら取用ひがたし、此二の名、牡丹ゐ用ゐるべし、

蜀鐸花

本艸 鬼臼の一種ゐ、葉数層を為ゐ子、蒐麻ゐて、面青く背紫ゐ、細毛ゐ、葉下ゐ莖を付く、一花と為く、状鈴鐸のごとく、倒ゐ垂て青白色ゐて黄蕊中空し、黄ゐる実と結ぶ、風吹けば動ぐ、風ゐハ自ら揺く、和産のこの、形状相似て異へ、つくぶせこの草、園史艸史ゐ載ゐ俗に狐の挑灯とゐもの是なり、莖の高さ一尺ばかり、葉ハ野車に似て、細く白花ゐ、内に青さ

彩照を三條ばうおう花萼咲くこゝもとの

宝鏡に似たり、江東原野に多し、

杜鵑 和漢三才 画会 杜

鵑の形ハ雀鷂に似るゆへ、色灰黑腹白し、鷹の愍あり、翅も黑て白き斑あり、口中赤く、頸に小冠毛あり、脛掌蒼色、其前の指二ツ連膜あ、後の趾二ツ諸鳥に異なり、季春鳴声ほんかけとくとくとゑがごとし、夏至に、最多し、初秋に至て声絶む、冬月ハ深山に蟄入す、○杜鵑の一名、和漢ともに多し、杜宇、子規、蜀魂、郭公、霍公鳥、姉帰、蜀魂、不如帰、冥途鳥、四手の田長、沓手鳥、俱伎羅、謝豹、樛鳥、時の鳥、憲し鳥、三月逝鳥、細鳥、童子鳥、賤鳥、勧農鳥、以上各頭字の部に出て注す、○杜鵑ハ鶯の巣の中に生育らるゝと、古へ云へり、

万葉 鶯之生卵乃中尓霍公鳥独所生而已父尓似而者不鳴已母尓似而者不鳴 下略、又 續世継物語 ことのこゝろ、其時頼政哥、

ぎすなきの音ゝあらんとゝもんとゝ今もたゝ

あ〳〵鶯の巣ゝに生じゝると

見ゝるゝあゝるゝ

兼三夏物 子子 和漢

蛍 和漢三才 画会

三才会 俗に棒ありなし、溝泥の中、温熱相感じて小蟲を生ず、長さ二三分、灰黑色微し、科斗の形に似て、常に一曲一直し、棒と振る状のごとし、

月令 腐草化為蛍

蛍大抵大小三四分、黑色にして、両額に赤点あ、臭気あり、其尻銀色の夜、夜光と出て、紙に裹めば赤光り外に徹る、麦稍を用て採碎けば銀砂のごとし、○蛍の蛍、

蒙求 晉の車胤家貧くして常に油を得ず、夏月は練の嚢に数十の蛍火を盛て書を照す、夜を以て日に継ぐ、

○近世、寄学家の説に、俗に忘の蛍とハ云へ、

漢字に蛍火と書りゝ、その本邪古へ

俗言ゝ、但し和泉式部家集に、

無ゝ、今漢語俗言とも、その用ある俳諸の上に、

孫裴集 蛍火を吹て鳴の中

五月

蒲人 金門記 午日、菖蒲を刻て人或ハ葫蘆諸物をつくり、笄に戴く、以て邪を辟く、

火串 和部、駆疫の条に注す、

六月

乾瓜 和漢三才 画会 新瓜と用て縦に八の小切瓣

飯と去り、塩を撒き、暑熱の石上に晒乾し、六七日にして能く乾くを磁器に収め、用ふるときは鹹淡を洗ひ去り、切片酒に浸し、

乾飯 引飯 同上 糒は乾飯なり、糯を用て飯に煮て晒乾し、粗く磨り、頭末を去り、中等のものと取る、夏月冷水に浸し、饌之、奥州仙臺道明寺に作る処最も佳し、○常に道明寺と

兼 多識

三夏物

蛇 蛇の種類最多し、委しくは本草に詳

菖蒲 金蛇 古加祢、銀蛇 志ロ加祢、水蛇 倍美、最豆、蝮蛇 波美、○此外書つくしがたし、

五月

蛇衣脱 本草 蛇皮、蛇殼、竜子衣、蛇の名あり 別録云五月十五日ごとに取てうす、

藕頭論経 南中木石の上、及び人家墻屋に多くこれあり、蛇蛻時あり、但し不淨と看るべし即ち蛻く、或は大節

紅藍花 未摘花 同上 紅藍、其花紅色、葉は藍に似たり故に藍と亦脱す、

の名あり、家の場圃に種る処、冬月熟地に子を布く、春に至て苗を生ず、夏花あり、花の下に球蘂ありて刺多し、花球中に出て圃人これを采る、采りやむときは復出て尽る事なし、球中に実を結ぶ、白顆小豆の大サの如し、その花を曝し乾して真紅を染、又胭脂を作す、和訓義解 紅花、初の采り間次第に本に咲く、咲に随て摘とる故に未摘花と云ふ、

六月

土塔會 十五日○摂州東生郡四天王寺南大門の下土塔塚の前、土塔の官を、号る神牛頭天王と古へは毎年四月十五日大条礼と行ふ、今他領となりしより、大祭礼絶たり、もし其今に於て、大王寺の僧堂司示人催ホ土仕神事を行ふ、次十四日法用、仁王経法則、舞示を是を土塔会と云ふ、

糸瓜の花 秋部 注ハ 四月

常盤木の落葉 四時 潤ぎ 諸木の新葉生じて後古葉の落るを云、年浪草、多くは松のことを常盤木と呼ぶ、松の落葉は秋とす、夏には松の外の冬木ともに落葉は泥めりとて松杉其外四時不凋の木をとりてなす、○

清滝や波もちり込む青松葉 芭蕉

常夏 部撫子の条に注す、

時の鳥 杜鵑と云、時鳥と云ど字のうへに訓るべし 埤雅 家語 名ホ 時の鳥とやいふらん卯月なれば初音鳴らん 後成

兼三夏物

通鴨 大和本草 日光山中禅寺の湖に真鴨あり、甚小、種を沙黒と常に居て北へ帰らず、○凡水鳥秋冬に渡るものは春月にうすぎて古巣に帰る、その中に鴨の池中に常居するものあり、芦葦の間に巣を営みて雛を生あり

こきと逼
鴨と、

五月

桃印符

[続漢書] 桃印ハ本漢の制、以て悪氣を止む、今の世端午の日、僧篆符を以て相問遺、もつて屋帳の間に置く、[本草] 風俗通に、東陽度朔山に大桃あり、十里に蟠屈、其北に鬼門あり、二神是を守り、以て凶鬼を禦く、

蟷蜋生

[月令] 小暑至螳蜋生

虎

雨

[紀事] 毎年五月九日、多く雨あり、俗に大磯の虎、娘子、曽我祐成に相別る涙変じて雨となる、故に今の雨ハ虎御前の涙なり、○虎ハ祐成討死の後尼となり、所の翁を案内として、井手の屋形の辺り、祐成の最後の跡とて、いづくにか、

露

[露] 清水の跡と来てみまくに尾花がすゑに秋ぞきにける、此哥曽我物語に見ゆ、

照射

[孫部、鞠狩の条に出ス、]

六月

土用

[月令] 中央土其日戊己、注、土ハ四時に寄旺すること各十八日、共二十二日、此を除くときハ木火金水もまた各七十二日、土四時に旺してあらざるなり、故に之を位置し、専気致中、辰戌丑未の末に寄旺ス、未の月火金の間にあり、又一歳の中に居故中央土一令を此に掲く、以て五行の序を成す、

土用干

[孫部、虫干の条に出ス、]

虎尾草

[大和本草] 虎尾艸ハ葉の如くして長く尖り、又徐長卿に似て、茎の長さ二尺余、夏秋白花を開く、穂を孝、形ら獸の尾の如し、花紅白の二種あり、此もの中華に所説なし、

時計草

かつらに似て細き蔓出、竹木にからつきてのぼる、葉切込あり、そもそも葉のごとく、花形てつせん風車に似たり、朝四ツもぎに花開き暮六時萎む、その次の答又明日ひらく、花八日あれども相続て盛なり、花ひらくときの様子傀儡と操るが如く、回ること、この尉大葉にて、上下へ廻る葉をかけり、其ゑ時計の機のごとく、○享保年長崎に初て来る、

東陵瓜

[結蒙求] 邵平ハ故秦の東陵侯、秦亡びて布衣となり、家貧くして瓜を長安城の東に種、瓜五色あり甚美なり、世人是を東陵瓜と名、○又支那の瓜に東門青門あり、この名あり、[邵平の故事]

黐突

[和漢三才図会] 黐膠ハ鳥と黐所以のものなり、其樹数種あり、深山に多あり、無大小、子を結ぶ、その黐を子と結ぶ、その黐を以て少あり、其色もろもろ、木葉女貞に似て薄く光沢あり、四時凋ず、

とらんでも、尺二三分落葉す、四五月淵き白花と開き、子を結ぶ正円つゝ熟すれば紅色、攢り生る、其木の皮を剥て水に浸し爛らし、是と流水に濾し皮渣を去れば麪筋の如し、甚稠粘にして用ひ鳥雀を粘にす是を黐と云、

心太

和名抄 大凝菜 和名古留毛波、俗ニ用心太二字云古古ろてい止○本草 瑞枝 本朝式 凝海藻 聞書

石花菜、海石上に生ず、性寒、夏月ことゝ煮て凍とす、

四月 地主祭

九日 庚富記 文安四年四月九日庚午、清水地主権現祭、神輿午刻還向を、其後獅子舞十三、田楽ホの舞了る、○雍州府志 地主、古八旅所白山通五条の北にあり、今石地蔵の存る所、祭日暫〻神輿を社書堂の前に居、是旅所の義を表すなり、清水縁起 祭る神田村将軍の霊、ちさの弘仁三年四月延鎮奏して、清水寺の鎮守とす、

苔

田園家園に多く栽、三四月薹を起し、莖肥中空して脆し、こゝを折れば白汁あり、葉毎に莖を抱へ相重りて又互に多つ、四五月黄花を開く、初て綻る野菊の如し、一花子をむすぶ、鶺鴒の子の如し、

茶挽草

和漢三才図会 雀麥 茶挽草田野に多く生ず、苗葉小麥に似て弱小、穗細小、小児穂粒を爪の上に載せば旋回す、

五月 重五

月令廣義 五月五日故ニ、

粽

菰粽、角黍、雄粽、九子粽、芦粽、笹粽、鎚粽、錦粽、字彙 粽粽同一名、角黍、風土記 端午ニ重五、飾粽、かさの粽、鶩と烹筒粽を進る、一名角黍、菰の葉を以て粘米栗棗と裹み、灰と以て煮て熟せば蓋し陰陽包裹して未だ散ぜざるの象なり、月令廣義 九子粽八角黍、唐の時、歳節端午に粽の名甚多し、形制も一ならず、角粽、錦粽、茭粽、筒粽、秤錘粽、或ハ秤錘粽ニ或ハ百索粽、九子粽あり、続斉諧記 屈原、五月五日汨羅に投ず、楚人これを哀み、此日に至ること何の筒と以て米を貯へ、水に投じて祭る、漢の建武中、長沙の歌回白昼に一人とり、自ら三閭大夫と称し、回に謂て曰、祭ること甚し、但蛟竜に竊て其上を塞ぎ、五綵の糸を以て之を縛れ、今聞惠あらば、楝の葉を以て其上を塞ぎ、五綵の糸を以て之を縛れ、この二物、蛟

竜の長るゝ所なり、今の人粽とつくり、綵糸及び棟の葉を帯ぶ、蓋その遺風なり、本草 古人菰芦の葉もて以て黍米をつゝみ、煮て尖角なるを、掖捆の葉の心の形の如し、故に掖とも角黍とも、近世多く糯米を用ふ、今俗五月五日節物とす、相ともに或云、屈原と祭るなり、為に之を作りて江に投ずと、或云、朝食鑑 飴粽は糯米を用ひ、蒸熟して搗て餅とし、稲艸の中に蒸熟して、艸の中より出して、稲艸と剥さるゝ時は黄白の色あり、飴の色の如し、故に名づく、味美し、微に香あり、もちぐさ粽の類、市人道喜粽と云、今京師の喜ぶる者、巧みに手を造る、故に道喜粽と云、○飾粽、かざりの市上、専ら此粽を以て、贈送の物とす、○飾粽 注に、五月五日、粽を粽は天福本伊勢物語 かざりの粽と云、拾遺集十八の詞書 ちまきの糸をもて結ひ、かざりの粽とぞ、今も大内は五色の糸もて飾る粽とぞ、○今按、伊勢物語、かざりの粽の写誤とす、此段は大和物語にも出て、かざりの粽とぞ、又伊勢物語 大なるの本、かざりの粽とあるべし、此ぞ、かざりの粽と名目は削り去べきなり、塩農抄 粽の形は蛇に似たり、巻

と殺すことを表す、長命縷 續命縷、辟兵繒 五綵絲 朱索

條達 風俗通 五月五日、綵絲を以て臂に繫ぐ、是を以て毒虫辟け、人をして瘟と病ざらしむ、一名長命縷、一名辟兵繒、一名五色縷、一名朱索、初学記 北人端午に雜絲を以て、合歓索と結ひ子の臂に纏ふ、一名條達、又條脫と云、雜物を織組て相贈遺る、及び日月星辰鳥獸の形、文繡金縷帖画を以て尊ぶ、○是本邦の茅玉に同じく、部茅玉の条通ずべし、

竹醉日 九月、竹植る日の条に出す、

六月

竹生島祭 十五日 神社啟蒙 竹生島の神社は、宇賀御魂神、聖武天皇天平三年辛未、竹生島の神現形す、神社考 竹生島は、江州の湖中にあり、其巌石水精空珠多し、本朝五奇異の其一なり、傳に、孝霊天皇四年、江州の地漸て湖水始て湛ふ、駿州富士山忽に出、景行天皇十年、湖中に竹生島初て涌出る、昔行基菩薩、此島に来る時、神女現形す、行基ために寺を建て、辯才天の像を置、紀事 例祭六月十四日十五日、是を法華会と云、湖上に舟を浮べ音楽を奏す、神輿の松湖上に浮ぶ、毎年正月十日、社僧の中より頭人を撰む、

○社僧説曰、此祭八、江州淺井郡の中ゆく、豪富の人と撰て、頭人を定む、旧記ニも、神亀三丙寅年、天照皇太神宮、祭主廣見ゆ神勅ありしく、岩倉山太神宮寺と云額と送りふ、札所観音と宝厳寺と云、同年六月十五日、聖武天皇、橘諸兄、房前大臣、両勅使と以て、蓮花会と修せしめ給ふ、ことうとうと今ゆ至ゆく祭祠絶ず、毎歳頭人両人と定め、神事と司らむ、淺井郡捻式神ある故、四民共ゆ差定ス、往古八、近江国中へ差定ス、むき、按ずるこの島、殿山ゆ属ス、山門由緒あるの霊場なるを、近江一国ゆ預ることと疑へらく、此祭八、毎ゆ六月朝日ニ尊天と、頭人の家ゆ神幸し奉る、天女の新像是と、假屋ニ安置し、十四日迄と御旅と称ス、此日島ゆ於て、舞楽あり、児四人舞を、十五日新造の天女の尊像と、神輿ニ遷し、還幸と催し、頭人供奉ちて、神輿と、早崎の一の華表へ立、供物と奉詣の人ゆ施し与ふ、夫うち島へ渡御、神輿船と鳥船と云、金翅鳥と称ふ故ゆ名く、留太鼓ふく囃し、大船二艘と舫ひて、大竹ゆ五色の幣として、幕と張、神輿船と飾り、頭人夫婦供奉ス、管絃船、警固船ホ、大船十艘潜列ゆく島渡りス、是と法華会と云、神事の法会、多く蓮花と用ふ故ニ名づと云、又三月三日、心經会と修ス、俗ニ是と島繋と云、別ニ記ス、

竹生島妙覚院登翁記

ちの

芽輪

菅毋貫 神社考 素盞烏尊児章 峠、

牛頭天王と号ス、又武答天神と云、或時、南海の女子と通じ、日の暮ゆ会ぬ、宿と路の傍ゆ借る、二人あり、兄と蘇民、弟と巨旦、将来と云、兄ハ貧しく、弟ハ富り、神宿と巨旦ゆ乞ふ、聴ず、宿と蘇民ゆ借る、蘇民、将来と許す、粟糞と坐として、粟飯と献ず、其後八年ゆく、神其八子と伴さ、蘇民が家ゆ来りて、その徳と報ぜんと欲し、蘇民ゆ教ゆく、茅の輪と作らむ、其夜天下疫病大ゆ行り、人民死ることの其数と尽く、唯蘇民が家の免るること得たり、是ゆ於て、武答天神告て曰、我ハ是速須佐雄能神ゆ、今ゆ已後、疫ゆ起らば、必蘇民将来が子孫ゆ、其災と脱れ、

御湯殿記

晦日、夜ゆ入て、輪ゆ入へ、チガヤ、調る、輪ゆ入へ、持て、丸の足ようの麻の葉と長サ一尺計ゆ二三本、紙ゆ入て、持て、丸の足ようの入、右の足ゆ出る、以上三度ゆ、此時の哥、和泉式部

神ゆ麻の葉とさうゆ、輪ゆ入て、持て、輪一つとゆ二つゆ、今ハ中と、上と杉原ゆ包、七月朝日の朝、荒神河原

挂川へまつる、蔵人所、小舎人山科家紀氏調進す○菅貫を茅輪も同物也、加茂神事次第に曰、次ニ入菅貫之輪云々、菅茅なを以て製したるもの也、○名越祓の条にくわしく出し、

竹夫人 竹奴 青奴 抱籠 [和漢三才圖會] 抱籠、俗ニ竹几といふ、夏月の夜これを抱て涼を取 [刘熙釈名] 竹几、又竹夫人といふ、[山谷詩] 趙子充示竹夫人詩、蓋涼寢竹器、憩臂休膝、似非夫人之職、予為名曰青奴 [雑談抄] 和俗竹を以て籠を作る、二間みて、長サ五六尺、短きもの三四尺、圓く又小さきものあり、昼夜臥寝の時、身ニ抱て涼をとる名づけて抱籠と称す、

り [四月] **龍頭太** い部、稲荷祭の条に出、

龍華会 ふ部、仏生會の条に出、

[五月] **両社祭** 廿三日○江州下坂本ニ社あり、下坂本より唐崎ニ至るの路傍に両社あり、南ハ若宮権現、北ハ酒井大明神、例祭五月廿三日、神輿二基遊行す、ハ土人産土神とす、山門悦蔵坊代々両社の事に預る、両社修造のことハ因縁あるを以て、藝州の国主より営せらるとぞ、

[六月] **林檎** 其実淫濡也、[和漢三才圖会] 緑の痕の如し、徐く熟しく半青半紅、味ひ淡く甘し微酸く脆く美なるもの也、俗に云、頻婆果なり、

[兼三夏物] **蓴** ぬなハ 志部、蓴菜の条に出ス、

ぬ [五月] **鵼鵺の古と去** [零陵記] 鸜鵒ハ人多く養之、五月五日其舌の尖りを去さバ語をよくす、色青くして清越也、鸜鵒とのひとり過ることあたはず、○時珍曰、其舌人の舌の如し、剪剔すれバよく人言を作ス、

る を [四月] **大神祭** 上卯 [神社啓蒙] 大神社、大和国城上郡に在、祭る所一座、大己貴命 [公事根源] 先丑日に使をつかハし、大原野の如し、此祭ハ冬ハ寅日使をつかハし其故ハ夏ハ卯日の暁、冬ハ夕に祭る故也、大神とハ大三輪の神也、大物主神の御事也、三輪と申本縁ハ、この大物主神活玉依姫と云女のもとへよな〳〵かよひ給ひけるを、ある人とふによりて、その女懐妊に及びて、父母あやしみて問ひければ、女もかたりて、神人の来りける時、糸のまろかせを針に付て、衣の裾に付けれバ、その糸三わげのこりぬバ、ゆゑ三輪山と名づける、

大津祭 上亥○四宮神社ハ江州大津の四の宮にあるし、

神社啓蒙 小日枝、大日枝、氣比、小禅師、右四座同社にあらず、故に四宮と云、○社説云祭る所五座、中ハ彦火々出見尊 小禅師 左ハ地主神、大国主神 大日枝 右ハ塩土老翁 日吉神 国常立尊 小日枝 気比神 仲哀 とす。されハ五社の中、彦火々出見尊を以て本社とす、故に四の宮と云、○此祭も日吉祭之日吉祭の榊伐とてありて、三月中の午に近江一国の中より、何方なりとも切出して其榊を、飯室道の廣芝と云所の、相生の松に立掛て置き、四月朔日の頃日吉大宮の拝殿に移す、同三日大津四宮より濱成磯成とて

この二人、是ハ大宮鎮座の時、粟津に居たる人にて、大宮の神をやどして宿りし所にて、今の山王の社地播殿のことを告奉りし人也、粟津の神と崇む、故に今に其名を伝ふ、榊近の兇首となりて大宮へ粟の飯を供しける人なり、舟にて唐崎迄大宮の供奉す、

今日も衣冠にて、笠鉾をさゝせ、日吉の大宮へ来り、拝殿の榊を取りて帰りて、其体石の鳥居まで、ハ無言なりしものを、やうやうる体にて、鳥居を越れハ、取得たる形勢にて、大鼓を打、囃子をはやして、八柳に至る、俗に七本柳といふ所 此所より舟にて大津へ着岸し、四宮の拝殿に移す、此日を坂本山王祭にて、此処の神事にて申日山王祭ふすさ、坂本へ榊を帰し渡して、其次の申山王祭の条にしるす

老鶯 おいうぐひす

枕草紙 憂秋のまへまで老ぎる鳴くと云て、十論為辨 以支寺 音 ある、故翁のとのがたりに、此など白氏文集とみえて、老鶯といひ病蚕といへる、此詞のおもしろくきこえハ、鶯や竹の子藪に老をなく、さるぶれや蚕いづる桑の畑かく、此二句とつくりて侍りしが、鶯を笥藪といひて、老若の余情もいとくくへりて侍らん 貞享式 老鶯この名ハ全く新撰にあらねども、老鶯といへることハ漢家の詩に出て、或ハ狂鶯とも乱鶯ともなべて暮春の物なれバ、例に今式の加減より、残鶯ハ勿論なく、老鶯も夏の名とすさバ鶯に老の感情ありて、風雅ハ例のさびしみをいへん、此名ハ衆議にまる

大矢数 おほやかず や、部、矢数の条にとるべし、

躍草 をどりぐさ 和漢三才図会 高さ、一二尺、天なんぐさ、莖微赤色 葉小葵に似て、両々對生ス、三四月葉のまたに小花を開く、白色にして微赤こを帯、人の笠を着て躍るに似たり、故に俗人躍花とす、又續断を以て躍草とす、

五月 大

大原志 ばうさい 廿谷

神社啓蒙 大原神社、丹後国桑田郡に在、祭る神一座 伊弉並尊、社家記 春秋両度の祭奠には遠近の国郡群をなすに、其祭儀饗を事とせず、禮姿糧を以て札として、謙道を天下に示すものか、紀事追加 世俗、参詣の地向に山をもまべてサスと云ならはせり、是ハ丹後国大原の社へ詣づると、昔のおもむき?と云、蚕飼を守護しなかへて、蚕飼するもの別して

崇敬すと云、三月廿三日ハ春さしとて参詣し、此時社内の小石を申請て持帰て、飼蚕の棚におくときハ鼠の害なしとて、この石を猫と称す、九月廿三日ハ秋さしとのひて参詣の時、右の石をかへし納むと云〇此祭ハ醴を醸して神に供じ、客に饗ふと、又茶店家の商物とする故世俗甘酒祭と云とぞ、

鬼百合

時珍曰巻丹、その莖葉山丹に似て稍長大く、紅花黄を帯て、六瓣刀に毎上ニ黒斑の点ありて、その子先結て、枝葉の間にあること、是巻丹也、［多識篇］巻丹、今按ニ於尓由里

六月

大祓

［公事根源］大祓と云ハ百官こぞりて朱雀門にあつまりて祓をし侍る、六月十二月二さびる天武天皇の御時かとぞ申ける、解除ハ觶穢などの時もなく神事など行ふときハ臨時ならず常ならずなりてなし、その大祓ハ百官一同にあつまりて祓をするなり、又なふハ家ごとに輪をこゆることあり、〇是六月晦日、朱雀門の前耳敏川にてなさるる、ことハ百官の祓也、節折荒和の祓ハ天子御身の御祓也、いづれも六月十二月両度晦日におこなはる、

大山祭

六月廿八日　か江戸及近國の僧俗相州大山石尊大権現へ参詣する事を初山と云、又七月盆中に登山するを盆山と云、志願あるものハ大小の木太刀を携行て奉納む、その木太刀に必大願成就の四字を書てもつて納太刀と云、

温風

［月令］季夏之月、温風始至［文選］朱夏振炎氣、溽暑扇温風、〇朱氏曰、温風ハ温厚の極り、涼風ハ厳凝の始也、〇小暑温風至六月節、

鶩鴨涼し

水鳥の羹をぐ冬多し、故に和哥及び連俳とも冬季とす、されど鶩鳥の羹、涼しと云ときハ夏季とす、

慈姑

［和漢三才図会］その苗を俗におもだかと云、其根を白くわゐと名づく、単葉の小白花をひらく、〇時珍曰、慈姑一名燕尾草と云、葉燕の尾の如く、前尖りて、後に岐あるをもて、

沖膾

［貞享式］此名ハ俗習之、或ハ海辺の別荘、或ハ船遊の時ニ魚のあつまりきたるを称すれバ決して極暑の名目にて、ことさらと例の賞玩と云べきもの、〇青藍曰、沖にて漁りたる魚を直に膾に和して食ふを沖膾と云、〇セゴシとハ鯵などの大きなるを骨のまゝにて切るを、南海にてセゴシなますとよべり是なるべし、

わ

四月

綿抜

更衣に布子の綿を抜去て袷とするをいふ、

和哥祭

十七日〇紀州和哥山にて東照宮の御祭也、一名雑賀祭と云、

元和七年紀伊頼宣卿の勸請しゝ所なり、山鉾其外相撲流鏑馬おのゝ又城下の士人太刀と佩さらと摺て躍躍とおすゝきと雑賀踊りゝ今日神事必用の食ゝ蒟蒻と剥刀の如く切あり、一方八常の如く味噌と用ひ、一方八大豆の粉を付ゝく、

家ゝ

和清天 白氏文集 四月天氣和且清綠柳拂陰合沙堤平又同詩ニ、孟夏和清月、東都同散官、○和清清和ゝ

若葉の花 貞享式 古式ふ木の若葉八夏清和月、東都同散官、○

ゝ草の若葉八春ゝ、青葉八夏ゝ、若葉八ゝ雑ゝ和せゝ花ゝ、ゝ或ゝ抜ゝ八花と若葉の二所ゝ、若葉ゝ花を結ひて八春ゝ八ゝ夏ゝ結ひて、何故ゝ決せぬゝ、今按ずふ、月花八風雅二巻の飾ゝ、跨ゝるものハ加減ゝ四季と自由ゝ配べゝ若葉ゝ花と結て八決して夏と定むべし、

若葉 新樹 和哥題林抄 新樹八四方の梢青ゝ、ゝて、木ゝの色もゝ薄ゝ、ふゝ、ゝ、ゝ山本ゝ、ゝ、ゝ、月も漏ゝず、村雨も音ばかりして、露も落ゝ、ゝ

若葉の楓 徒然草 卯月ばかりの頃、和名抄 雑説木 加倍乃木

其葉岐ありて蝦の手に似る故かくと略まるあり、

ら葉 病葉とも、夏山ニ、紅葉の如く赤くなるあり、又ハ黄白色あるふ朽くるとも、ゝ、

綿時 和漢三才圖会 相傳ふ、往昔蠶綿の外八穀木と以て衣服とす、是と木綿ゝ、中古ニ草綿始ゝて、李朝桓武の朝ニ、即ち類聚国史ゝ、ゝ、中葉八宋の末中葉ゝ光ふゝ、九二百年ばかり、此ゝの種と下すゝ、早晩ゝ、早ゝ、ゝの八八十八夜以後、麥苗の際ニ、ゝ、ゝ、ゝと撒ゝ、晩ゝ、ゝの八四月麥と苅ゝ株の傍と攪ゝ、ゝ、ゝ、大底、枝葉花、黄蜀葵ゝ似ゝ、花八六月の部

五月

早瓜供 延喜内膳式 五月五日、山科の園、早瓜一捧と進ゝ、若実のゝ、ゝを八花根と献ず、

若苗 左部田植の条ニ、

若竹 左部、今年竹の条ニ、

忘草 萱草 ゝと云ゝ部ニて、

和布苅 和漢三才圖会 石専海藻、和名迩布米、俗ニ和布の字と用、今云和加米、鹿布ゝ對ゝ、ゝ、弱布ゝ、本草 南海ゝ生ず、石ゝ附ゝ生ず、紫苔ふ似ゝ、色青ゝ、抜ふゝ今云和布ゝ、○海人鎌ニ汲

六月

綿花 漢三方畫金 四月種と下す、莖弱く蔓の如し、高さ二四五尺葉に三尖あり、楓の葉の如し、秋に入て花を開く、蕣の花の如くして小し、紅紫のものあり、花と結ぶ、○此もの種と下す、早晩あり、花も又同じ、夏のまゝ花開くものを大底黄芎葵に似て、浅黄色に、四月綿ありてくの条見合

か 四

月堅田祭 上巳日○或説に祭の日上の巳祭る神詳ならず、陰海志に、堅田村に柳田の庄下云、又開ヶ濱も云、北と今堅田と云、出来島に、この地伊豆の三島の風景に似たる故、伊豆權現と勸請すと、されば伊豆權現の祭あるべし、今土人もまことにあるべし、今土人本居神と云、又八、天文六酉年九月廿五日、江州観音山の城に、衣川に勸請せし天神の社是に、四月子の日祭ると、今上巳日に祭る所も、神田明神に、堅田の城主一代江戸にて誕生し、故に神田明神を此所に勸請すと、

戒壇堂開帳 花摘○江州比叡山にて、十三年六月、参議左大弁藤家業、戒壇堂を建てらるゝの宣旨を帯て登山す、傳教喜悦ふ〻ず、聞六月十一日殊に勅詔を下して創て戒壇を築、十四年四月十四日、修禪和尚義真、始て受戒と行ふ云〻 紀事 四月八日諸人桑詣、女人も常に叡山に登ることをえず、もろ〻今日許り、東坂本の花摘の社に詣て、こゝと花摘、花堂と作りそこに釈迦の銅像を安置す、○此社、傳教大師の御母堂、妙徳婦人と祭るとて、婦人存生の時、大師御對面の為此処にて、登山す、今日女人の参詣とゆるす、

葵祭 御形日、 参事根源

此遺意なり、

賀茂祭 葵桂、諸鬘、中酉日又酉日アレバ下り酉日 未日、先ず上卿陣に着く、六府とめ〻く警固のとりと仰す、當日、使は近衛の中将つとむ、昔夢のつげあるしとて、人〻葵桂の鬘とかゝる、賀茂松尾の社司、前の日ちるごと所〻さてゆるす、欽明天皇の御宇より、此祭はじまる、下鴨の御祖、上賀茂の別雷二の神祭、この御祖とは玉依姫と申す、賀茂の建角身命の女、ある時、せゝの小川のほとりに、川上より丹塗の矢一流れ下る、玉依姫この矢をとりて、我家の屋根にさしおく、程なくして懐妊して、男子をうむ、もろ〻の人も父とやれもしらざりき、或ときに酒をすゝめて、今の児に盃をとらせ、汝が父にあたへ、児その盃

とゞ虚空にあがりて、家の屋根とふみやぶりて、我は天神の御子なりとて、天上とゝろきてのぼりぬ、則別雷の命是こいまの丹塗の矢は松尾明神と、後にあらはれたまふなり、[紀事]上賀茂中酉日、葵祭、貴船もまつり修す、酉の前午日、西賀茂黄衣のもの、御輿と伐り、松に並べ、御生所の假宮、糸齋宮の幄の屋、及び大宮假宮と描ふ、黄衣五十人〻〻〻〻〻〻結番とあり、未の日假宮迁宮、申日吉は関白詣あり、當日音楽あり、翌日社司葵鬘葵桂枝と、禁裡仙洞、及び高貴の家に献ず、則御簾に懸く賀茂地人悉く門戸に掛く、去るとしは夏天霹靂の災あり、祭の日、官家の人おの〻〻葵桂と衣領にかゝらく、賀茂の地〻、各〻と頭髪に挿む、今日葵鬘桂枝、これと諸鬘と称す、葵は鬱原より取来り、桂は松尾より伐来る、凡葵は當社の神神なり、桂は日吉神木なり、[上]御生とは王依姫の別雷命と産まれ給ふ日とも伐く、実は申の日生まれ給ひ、酉の日は神の生を祝奉る儀なり、また御形祭御影祭と、同祭なる人あり、別の祭と御影祭は三日以前、午の日にあり、御影社は洛北高野川の東、御蔭山に社あり、即ち下鴨の末社なり、[康富記]嘉吉三年四月廿一日丙午、鴨御蔭山祭、[云〻]酉の日なり、[河海抄]賀茂祭の前日、斎院の石上に於て神事を、御形と号す、今糸宮の北一町ばかりに在り、御旅所なり、道の西に面す、是と御生所の館なり、

神祭

忌さす、榊取、榊さす

祭の日仮殿の所に建べし、是加茂祭とも、○或説に曰、加茂祭のことなり、加茂にのみ多名の祭と夏とあり、故に祭加茂連、奇に付りと嫌あり、[貞享式]春夏秋冬四季あるものは祭と雅の類なり、其季の名目とすべし、祭の一字にも御祭とも秋とあり、御祭とつゞく冬にあり、諸社の臨時の如き名目あるべし、祭の用は冬、貴賤ともに寒暑あり、礼あり、和あり、遊び、節供節日の式あり、俳諧には多用あり、是らは一世の表説なり及ぶべし、其時其分の季を定めて、決して四季に用ゆべし、中巻目録に今式とても其通り、○忌さす[義枝抄]卯月の忌こさこは、賀茂の神事なり、竹をもて、春の帰りとて、花ゝ心ゝ心ゝ、神事なる人事とて、松竹をもふこゝろ、○神取[後拾遺]神とる卯

月ゆゑ名ニハ神山のゆゑの葉がくれ　神山ハ賀茂の神山

花の容姿約ゆる故ゆゑ

貞好草　和漢三才畜会　均葉の一名ニ

俗貞好草と名づく

垣見草　卯花の異名　蔵玉　時鳥

要の花　和漢三才畜会　扇骨木、高サ二三丈、葉ハ海石榴の葉の似て狹く

ゆゑ山里の宿、

小し、細かに鋸歯あり、面滑らかなり、四月小白花を開く、細子を結び簇をなす、八九月赤く熟す、其木最も堅し、扇骨とす、ふ堪へたり、故一名ニ

柳の花　注、秋の加部　洗濯や衣ゆゑ迄　抹の花　薄之

杜若の花　和漢三才畜会　燕子花、其葉白菖に似て

大小色淡く、其花実ともに白菖に似て肥大

なり、紫色ニ正し、近ごろ紅なるもの白色なるものを生ず、ゆゑ

変種ニ五月ニ盛ニ咲、又四時に花ニ咲くものあり、参加ハッ橋の

産名ニ得たり、○貞花　蔵玉　多くの多きを中りも

花ハ初めは紫なる、○貞花　仙覚万葉抄　花ハ杜若ニ、

貞鳥の啼きし咲バ、花ニ　万葉ニ貞花とあるハ誤なり

ゆゑ定めがたけれど、姑く仙覚の説に載之○かきつばた

杜若の字を用ゆ、実ハ誤なり、杜若ハヤブミヤウガ、燕子花

と書ゆゑ、又和名抄ニハ劇草とあり、と訓ず、

風車の花　花彙　纏枝牡丹、蔓艸葉莖鉄線の類ニ花ハ

瓣ゆゑ単葉著碧色、其形風車に似たり、又白

色あり、三四月

花とむらく　**かんこ鳥**　和漢三才畜会　加豆古宇鳥、正字未詳、疑らくハ是郭公

ゆゑん、状ハ杜鵑及び虫食鳥に似て、微赤色ニ帯び、腹白

くして黒斑あり、脚の指も亦二ツ前ニ二ツ後ニ、偽て杜鵑と

ゆゑ、賣之、仲夏の後声あり、秋後色とゝぶ、其色大小

円亮、加豆古宇と云ふ、毎ニ山林ニ鳴て人家ニ近

づく、○真渕翁ハ俗ニかんこ鳥ハ喚子鳥　天蚕　虫甫　月令　孟夏

の字音ニ唱へ誤なるべし、

月、蠶事畢ル后妃献繭　和漢三才畜会　繭と作らんと

するに、こまぶ放つゆゑ、素と食ずし

て、蔑簾を用ゆ、掛とす、こまぶ放つゆゑ、素と食ずし

く、身白色ニ透明なるのを擇取く、櫓の中に投ず、先づ

稍ある内ハ拈菁草と用ゆ、縱ゆゑ内ゆく蚕の寓居とす、

数千の蚕ゆゑ千色と作て蠶ゆゑ○原蚕　周礼註ニ、

原ハ再也○一名晩蚕、二番蚕ニ、春部ゆゑ

○蚕簿〻え 蟳子 蘊頌畫笙 蟹の類之、今人以て食品と号す、食味之ありと云 和漢三才圖会

部に注せり、擁劔蟹ハ江海ニ生ず、大なるものの味美之、塩水を以て煮熟する時ハ純赤色に変ず、甲を脱して白肉を取り食ふ其黄なるもの最甘美之、山谿和谿溪澗に有之、十月丑日毎に必群出ス、土人其日を候ひ多く捕ふ亦一異之、大和本草 蝦蛄 山領表録云、前両脚大にして人の指の如し、長尺余、上に芒刺あり、銛くして手を砍、鰕のごとし、和名抄 擁劔、和名加散米 多識篇 蟳 蛑、加佐美

巻三 夏物

翡翠

時珍曰、大さ燕の如く、喙尖りて長く足紅にして短し、背の色翠色碧を帯ぶ、翅毛黒色青と揚まり、女人の首物と飾るべし、和漢三才圖会 鴗 俗云川世比 形小く、池川に在て魚を捕る 翡翠、俗云山世比 形大く山溪に在て魚を捕、世比と八少微の假名相通ずるなり、其穴に巣つくるや、横に入こと一尺ばかり、其中ニ雛すハ 庵厨本 艸 鴗、和名曽比○此鳥、魚を害する故ニ、鴗天狗、水狗、魚虎、魚師の名あるべし、

蟹鰕

多識篇 蝤蟹 加仁比志古 和漢三才圖会 蝤ハ塩蔵のものなり 三代実録 元慶五年正月三日癸酉、摂津国蟹胥、陸奥国鹿腊以て贄として御膳ニ奉ることをとゞめらる

蚊

蚊註 事文類聚 後集 秦ニハ之を蚋といひ、楚ニハ之を蚊と云、或云、蚊ハ文也、人の肌膚に文をなすの義也○時珍曰、木の葉及び爛灰の中ニ生じ、子を水中に産て、子孑虫となる、仍て変じて蚊となる、五元集 蚊柱に夢の浮橋かゝる也 其角

蚊遣火

又蚊火と云 月令廣義 蚊、鼈の骨を烟に焼けバ蚊をすなはち死す、次に鰻鱺の骨、次ニ水中諸魚の骨を烟に焼けバ蚊を祛くべし、又浮萍羌活と同く焼て、○蚊を追ひはらふを遣といふ、鬼やらひも同じ、やらひやらふ事にて、蚊をやると活用しける詞也、されバ蚊やりともいふべし、

蝸牛

紀事 此月より五月ニ至て、霖雨あるときハ、蝸牛多く出て、或ハ床に登りて、又壁に黏て、高く登ることハ其涎随て盡れバ、随て落ぬ、其貝にありて、人を見るときハ蝸縮ス、児童聚りて出出虫ヽヽと云、出ざるときハ釜を打破らむといふ、此虫の貝を、俗ニ釜と称ス、夫木 牛の子にふまるゝなるべの蝸牛角あればとて身をなたのみそ 寂蓮 五元集 文七にふまるゝ庭のかつむり 其角、○文七ハ髻結師なり、

蝙蝠 時珍曰、蝙蝠、肩人呼て仙鼠と号、形鼠に似て、灰黑色、薄き肉翅あり、四足及び尾に連合す、一のごとく、夏生じ冬蟄す、日に伏し夜に飛ぶ、蚊蚋を食ひ自生育す、○又紙扇とかはぐりとも云、

蚊帳 蚊帳 說文 幬 帳也

荊葱 本朝食鑑 久葱 春葱の二種也、春葱は初生の時、針の如し、俗に羹にせず生にて食ふ、醋味噌に和すること、ハいとよし、

五月

賀茂の足揃 朔日 紀事 五月朔日、例に依て、京兆尹、馬一疋を出す、其外武家、願ひあるの人も亦假て之をのらむ、其騎者上賀茂の氏人なること、其人と擇ぶ、各禄を与ふ、端午に騎とこころのとの、壮年の人、とえらびて、各禄をとのふ、凡馬負北疋、騎者ハ烏帽子浄衣を着す、社司各埒の外に坐す、先一人毎に馬に乗り、馳駈して、その遅速を考ふ、執筆をして是を記さしむ、後馬の遅速同じきハ則二人をして乗らしむる故に、足揃と云、いそゆる荒手結、馬場に本来樹あり、この内に於て勝負を決せしむ、検見のとの鐘を撞て、執筆これを記、この樹を勝負の木と云、馬場の本勝負の木の南に櫻あり、是を出馬の木と云、又其次に一株の柳と三鞭木と称す、騎人互に声を揚げ鞭を挙ぐ、見物の良賤群集す、埒の外に並居る、

艾虎、艾人 蒲人 天師を畫 荆楚歲時記 艾を以て虎の形とす、或ハ絲を剪て小虎を作て、以て艾の葉に帖て、内人爭て是を相戴く、○内上 五月五日、人多く百草を蹋て艾を採り人を作て、戸上に懸て以て毒気を攘ふ、○蒲人 金門記 午日菖蒲を刻て人或ハ葫蘆諸物をつくり、并に戴て以て邪を辟く、○画天師 歲時雜記 端午に都人、天師を画て以て賣る、又泥塑天師を作る、艾を以て髪に蒜を以て拳とし、門上に置て邪を辟く、

幟 和漢三才圖会 五月五日、家毎に幟及び甲冑の兵器を立、俗呼て曹人形と云、其刀菖蒲を以て是を飾る、仍て菖蒲刀と号もるく、荆楚歲時記に艾を以て人をつくり、門上にかけて毒気を攘ふと、是曹人形と趣相似たり、相傳ふ、光仁天皇天應元年、蒙古の賊来る、早良親王、藤社の社に禱て出陣したまふ時に五月五日、忽ちに神風吹く、敵船を覆して、一艘どもを悉く敗走ス、戦ひ勝て、此因縁を以て今に至る

五月五日の祭にお兵器を用ふ、民家も又もろ〳〵、藤森社八山州
祀伊郡に舎人親王の祠を弓矢政所と称す、是く蓋其ころ蒙
古の襲来ありしと、国史ふるえび、

○藤森社祭の条見合すべし、

搗餅

歳事拾遺 五月五日米の粉をこね、搗の編笠の形の如し、搗の餅と云ふ、蒸しあげ、搗餅と云ふ、鐵内これを用ひ

賀茂競馬

五日 詞林采葉 或記云、祭初の日ふ馬ふ乗る八志貴島の宮、欽明天皇の御字、天下世挙つて風吹雨零時に卜部伊吉若日子命に勅しまくトハしむ、乃チトハして奏すまく、賀茂の神の祟なと、仍て四月吉日をえらび、馬ふ鈴とつけ、人猪影と蒙りて駈馳て以て祭祀をなす、能禱祀せば、因て五穀成就天下豊年ならふ始まる、注進略記 五月五日の競馬八七十二代堀川院、寛治七年、五穀成就天下恭平のため、ならびに十番九疋の馬料を寄らる、例年是と行はる、

紀事 この日、音楽あり、午の時競馬あり、近衛院康治年中始て行はる、もつぱら其始八臨時の執行なり、後世五月五日式日と為しかや、古八諸社毎に多く競馬を、今漸〳〵絶く存する

処のため称し、當社競馬の料ある故ふ、今ふ至て断絶せず、今日乗る処の舎人九人、各冠の纓と巻く、縷と付け、九の方八赤袍と着し、右の方八黒袍と着く、各南の一の鳥居の外ふ於て馬ふ乗り、馬場の末ニ至て、先ツ第一番をえらび、左右一疋毎ニ馳す、是を空走と云、その後各ふらべ馳て、遅速と争ひ、勝負を決す、古へ所謂真手結多ハ、

文昌雅録

軍中、端午と云ふ、馬を走すを踏抑と云ふ、

帷子

和漢三才図会 通俗、夏月必用の衣を帷子と名づく、端午ふ至て着ふ、浅黄色を用ふ、七夕八閑ふ八白帷子と用ふ、近代士庶人の通例ふ、拙、和名抄、帷和名加太比良、

鹿子百合

花律 白花紫点あり、其花横ニ向て開く、紫点あるゆゑふ鹿子百合と名づく、

河原撫子、唐撫子

倭部、瞿麥の条ふ注す、

萍蓬

本草 葉八芋ニ似て厚く光あり、茎つよく水上ニたちの〳〵葉も花も水面ニうかぶ、根天ニ、夏月黄花を開き、秋の末迄ふ、一茎一花ふ賞す、

酢漿草花

蘇頌晶経 酸醬草、嬢ニ時小児喜て食ふ、○時珍曰、名

酸母此三素酸こ其味ハ醋のごとし、苗高さ一二寸、叢生して地ふ布く、極く繁衍すと、一枝三葉両尺、晩ハ至て白ら合帖、整こと[illegible]一の如し、四月ハ黄花を開くこと小角と結ふ長一二分内ニ細子あり、

蚊幬釣草 和漢三才図会 葉穂 ともに續根草ハ異冬も亦凋まず、

[illegible]ハ根細き髭のごとく子おし引ハ抜やすし、其莖二稜ある小児中間と裂て引擴げ、以て蚊帳を釣ハ比しく戯すべし、蓋し香附子科の雄、**輕息**

子、鴨の子

本朝食鑑 車鴨、輕鴨、芦鴨、この三ハ四五月ハ至てまで多ハ、或ハ夏秋ニ至り冬ニ来もあり、或ハ孕ミ或ハ孕ざるもあり、○凡鴨の子、初生其毛黄白色、卵と出て水上ニ浮ぶ、**藻塩草** かりの子ハ鴨のかひごと、御伞 古哥ハかりの子ハ雁子ハあゝぶと、鴨の子のことなり、

鹿の子

紀事 毎年五月の時節、南都春日山ニ鹿の子漸く成長す、志ることハ力弱く足ハ不康、子市ハ多く狂犬ある時ハ、噛て[illegible]ハ死ハ至ることの故ふこの節、興福寺の下僧又町奉行の小吏相随ひ、市中と徑廻り若頭犬あるハ[illegible]ることとく、その脚の筋と断ち、其犬を[illegible]て、横行せしめず、

六月

掛鯛おろす

朝日○春部の掛鯛の条ニ注ス

嘉定銭、かつう、

世諺問答 六月十六日嘉祥ハ、仁[illegible]十六日 明天皇二年六月十六日、豊後国[illegible]白亀を献ず、以て吉兆ニ[illegible]祝之、是かこのこと嘉祥の儀ハ、このこと更ニ本説あり、只彼銭の銘ハ嘉定通宝ともこれハ、勝と云名詮を賞翫すべし、○長明四季物語 仁明帝兼和のころ、御代の果ることを祈らせ給ハ、賀茂の上の社ニ奉て、御祓を[illegible]ハ、六月十日ハ[illegible]六日あん吉日ニ、御ハの人ハ考申上ることハ、其日行ハ年号と嘉祥と改元ありと、社司の日記ニハ、○一説ニ嘉定喰と云ハ、室町殿の大樹のとき、六月納涼の遊びハ揚弓と射ること、賭とハ[illegible]ハ食物を買ハ[illegible]ハ、此銭ハ宋の寧宗の年号ニて、十七年ハ其年と号セ[illegible]、故ニ嘉定銭毎ニ鋳させる銭、元年より十六年迄の印あると謂て、其年

日のことに新しきを代に定めらるゝ、御湯殿記に女房詞にて
かつうらの[illegible]、嘉定通宝と中略して
のことなり、祀事今日公家武家同じく嘉定の祝義を呼謂
嘉定通宝十六枚を以て食物をうひてをと服されば其家に
福あり、故に今に至て其例ありふ、又嘉通と勝の和語相通
し、故に武家吉兆銭とす、此日五色の饅頭、其に諸品と土器
二枚に盛て、各白紙を以て裹之、水引を以て結之、群臣に
たまふ、其の銭を、是十六銭と以て求潜るの遺意、諸家に之
此銭を、或は孔方兄十六枚、或は米一升六合、家臣にあたふ、
と以て雑品諸物をとの、ことを献ず、又土器は杉の葉を敷
き、其上に大饅頭三つを盛り、杉原紙を以て是を包み、凡物
毎に十六の数を用ふ、今夜諸家の中、十六歳の人、振袖を切
て諸神に是を月見に供、その数は土器にもる処の大饅
頭の真中に穴をうがち、其穴に周先をとる、是今宵袖
をとるの式也、

上難波御祓

珍易東生郡、高津の宮に、此社は生玉の北にあり、祭
神比賣古曽の神、亦名は下照姫命、大国主命女、大雅彦命妻、始て天の磐
船にのりて、地に降る、高津は其船初て、磐船大明神と号す、
仁徳帝都をこゝに近し、高津宮と号す、当社神博物
失ず、当社を仁徳天皇の宮と云ふは非なり、社司木津川左衛門
祓を修す、

賀茂六月能

晦日 祀事 六月晦日の夜上賀茂
の神事、言未あり、後に修す、地に
各茅の輪を脱出て、又枯麻の條を以て、木偶人を作り是を
川水に撒す、今日六月の能、丹波矢田太夫、[illegible]
御手代会と云、社司真家武十郎酒 鯛一双、楽屋にて
[illegible]、始る是旧例、この能一座役者七人、[illegible]、其道と
[illegible]、故世七人猿[illegible]、神事次第 六月廿九日小月は日
御手代会、悪日仮幅を儲、夜遊神前おかめ乱舞、中古
猿ホ女田ホの風流を、○今青名越の神事をそなへ、
社司神人おの〳〵[illegible]を祓除し、菅畳の輪を入る、
[illegible]

唐崎祭

晦日 淡海唐崎大明神、女別当山[illegible]
願の地、祀事 相傳ふ此神日吉の[illegible]社
社家樹下生源寺の祖神と一説に、是住吉明神[illegible]天[illegible]
皇の御宇六月祓を修し、処に今日祭諸平日の千度にあ
る、故に千日祭と称す、祈願ある人、木を以て小鳥居を作り、社に供ず、

形代

撫物

釈日本紀 人形ハ所謂素盞烏尊の蠼手足の爪を抜き其罪を贖ふ身の代の義 神祇式 大祓御贖物鐵人形二枚 ○形代ハ人形に撫物なれハ人形を撫へ吾身をなでて其罪の災殃を移して流すものなり贖物ハ罪を贖ふものなり 則人形 川社 ふ部、夏神 雷鳴陣 西宮抄 六月雷鳴陣、大声三度以上 大将以下帯弓箭候御前孫庇類間、左右兵衛立南庭、敷雷鳴御座、鳴盛時分陣遣右殿、外衛督佐候殿上者 風薫 唐太宗詩薫風自南来殿閣生 帯弓箭簾中候解陣

微涼 呂氏春秋 東南之風曰薫風

掛香 薫衣香 礼記内則衿纓皆佩容臭 註 容臭ハ香物也、形容の飾と助為 故容臭と云、纓と云ふこと佩ぶ、後世の香嚢即ち其遺制 源氏梅枝 くのえうの ○薫衣香、名黒方、又薫衣香も、たきものの方なり 出ふ ふ、俗に匂ひ袋と云其方数種あり 紀事 五月禁裏

匂袋と諸家みのふ、是夏日汗穢の臭気を除んが為 維州府志 懸香ハ香剤各兼味りく調合 各軽重多少の謂 紀事 此月賀茂川、高野川ハ瀬川、嵯峨、大井川、梅津、桂川、吉祥院村、鳥羽、淀川、宇治川、所々良賤川狩 川狩 掛網、或ハ扇網を以て 或ハ鵜と放て 或ハ鵜と放て 時称曰射干、其葉差生 射干 及び扇の形の如し 射干春生ず苗の高さ二三尺、葉、蚕蚕みに似て狭く長し 横ふ張て翅羽の形のごとし、葉中茎と抽ぐ、萱艸に似て強く硬し、六月花を開く、黄紅色、瓣上に細文あり、秋実を結び房をなす、中子黒色、根髭多し 干瓢剥 新干瓢 和漢三才図会 乾瓢、土用の中に採て横に切て皮を去り白肉を用ひ薄く剥ぎ、及び瓢を去り、白肉を用ひ薄く剥ぎ、架に掛て晒乾す 眼皮 連なること一二丈、紙紐のごとし、両端に連なる色と変じて佳なり

同上 眼皮と剪羅と一類異種、春苗を生ず、葉ある豆音縁の葉、剪羅より厚くして、円く尖る、六七月花を開く、剪羅花に似たり、刻歯浅く、其色肉赤色、俗説云、達磨大師九年面壁の時、眠らざらんことを欲して、自ら上下の眶を剪りこれを棄し地より此草を生ず、其花肉赤色、以為らく眶に似たりと、因て眼皮と名く、

楮花 紙漉草

時珍曰、楮を柠に作る、其皮績ぎて紵とすべきの故なり、按に許慎説文曰、楮穀、乃ち一種にして雌雄を異にするのみ、雄は皮班なり、葉に揉あり、三月花を開く、柳花のごとし、実を結ばず、雌は皮白くして葉揉又なし、碎花を開く、実を結ぶ、揚梅のごとし、南人皮を剥ぎ搗き煮て紙を作る、又緝練して布とす、堅韌朽ちず、和漢三才画会 楮皮今多く紙に造る、○楮は時珍が説の如く三月花あり、六月の説は誤り、故に雑談抄に花を詠じて楮とバ云ふと季とすと、紙は常に濡れて季とす、殊に夏濡は紙臭気あり、下品なり、楮も種類あり、大和本艸に山楮を一名ガンヒ、又山カヅと云、其木も皮も櫻に似たり、葉は桑に似て小し、四月に葉と生じ、枝長さ高数尺に過ぎず、深山に

花は楮の花に似て黄なり、夏の末に咲く、その皮を剥て楮の如く煮て紙を漉く、故に夏とす、

蒲の穂

和漢三才画会 香蒲の花の状、頗る鉾に似たり、故に蒲鉾と云、又蝋燭に似たり、是香蒲の穂なり、

芋

和名抄 芋、和名加良毎之、○ち、部麻の条に委し、

韓瓜

味甚だ、通俗志に、熟瓜と訓ず、

浴佛

部、仏生会の条に出づ、

吉田祭

中子 延元年十一月廿五日中の申、今年始まる祭礼、誓願寺にて公家の御沙汰とあり、江次第 四月中の子、十一月中の申、裏書に吉田祭永延元年始之、山蔭中納言一家これを祭る、○吉田乃春日に中納言山蔭卿の建立、祭日、幣帛使、内侍の使に立つ、

倭舞

江次第に委し、

餘花

題林抄 余花は春の終りまで咲こと、山深きまで独夏の来るこれを惜むべし、書巣の中に咲るべし、

よろひ草

牡丹の一名、名義未詳、

夜白

夜白艸の異言なり、

四月

社詣式

或人曰、六十六代一條院永

草 開元遺事 明皇沈香亭の前の牡丹一枝二久、朝ハ深碧、暮ニハ深黄、夜ハ粉白なり、香艶各異なり、帝曰これ花木の妖なりと、楊国忠かの亭に百宝をもつて欄とす。○天津人今やくぶらて詠むもんよもつの草花なるべし 開元天大日

芦原雀、葭剖 き部にもあるべし 五月 蓬萓 の条にてみるべし、

歳時記 端午に菖艾を刻て小人子或ハ葫蘆のくくりとつくりて、これを帯れバ邪を辟く、荊楚歳時記 五月五日雑いまだ鳴ざる時、艾の人の形に似たるものを采て攬てこれを取収て病に灸すに甚験あり。○是らの説より屋檐にふき萓ふくるべし、

六月 吉野の蛙飛

九日 當山の蓮花会とて 吉野郡の内、蓮池より云処より毎年蓮花を蔵王権現へ奉る、その花を管に植て轅をうけ九日の早旦に神輿と帰のごとくして山中を持ありくづくそて在家のその子供に母衣と負する褥て物を渡す、夜に入て、當山の僧徒、蔵王堂の前にて行法あり、其刻下づりのそのに蛙の形を作らせ堂の後に入おく、その形点ハ二蝦蟇のごとし、行法をそうて何の僧四人檢斷にて先の蛙とより銘けバ堂後より飛出て四人の僧の膝ごとくをめぐり飛ぶ是を強く祈て責る、次第に廿めしまして、堂内を逆まりてと、終に祈も殺す、其ハ後に板木にのせて堂外へ舁出し、湯水をかくれそて蘇生スと云、

節折

晦日 公事根源 卜部竹の節を庭中席の上におく節折の余婦竹をとりて参りて、御たけをはかりて、吹この寸法をとり、果て官主まきりあてがそせて御杖とつくむるとあうたくあざぐるへとて二度まで、二度まで禄をのせよ、こ度は六主上の御たけの寸法をとりて、其程にをりあてがへだよをつぐるは節折の節ハ竹のよ也、和名抄両節間 俗に云世 ○是即荒和祓の御贖物なるべし

た

四月 多賀祭

二ノ午 社説 江州犬上郡、多賀の大社ハ伊弉諾尊、本地ハ無量寿仏、鎮座年歴詳ならず、例祭四月二ノ午日、祭祀當日、神輿ハ本宮より艮の方一里ばかりに栗栖村の大官旅所へ渡御、供奉行装餅二本、神馬三疋、御旦四ハ神子二人、随身六人、神主三人馬上、其外氏子村々にて紙の造花を出す、凡六十本ばかり、遷物ハ舞して思ふ所にあらそひて定らず、神輿三基渡御、坤の方、賓臺の社まで、大社の御使と

て殿一人健児一人参向行列先逸押十二人いつもく六人黄の直垂三十人調度懸六人神事の警固ハ彦根の城主より入物頭二人これを出さる〔雑談抄〕此ここの頭人と定ハ正月三日より氏子の中豪富のものを撰み夜こもりて神慮をうかゞひて定む其頭にあたる家は神官榊を立る其頭人神供来栽許ことを捧ぐ祭の日四位に準じて衣冠を着し社久へ参詣一族一門風流と尽してまつるぞかし

當麻祭

上申○大和国葛下郡當麻都比古社二座麿子王子命比賣命

龍田祭

廣瀬

〔公事根源〕大和国ニ侍る社也年日使ハ川祭の条に見るべし

鷹の塒入

〔和漢三才図会〕四月羽毛を易んとするときに革緒を解去て鳥屋の内に放つ餌食意に任す日を逐て脱落すいまた新毛と生じて七月中旬旧のごとし○片鳥屋 和年 両片鴘歳

〔鷹百首抄〕四月八日鷹を鳥屋へ入て毛をかへさするなり此時羽虫の葉を飼て又餌をも飼ふ是をとれ飼といふ或ハ鳥屋踏鳥屋でより鳥屋鷹毛をとる鷹なども夏ハ又ひむろ山とろ板など皆此時のうへなり夏あるべし〔同三百首抄〕鳥屋へ入るとて動気の葉と羽虫の葉に飼ふ此葉ハ榎木の朕にたまる水とさうけの葉に用るなり其水取て置べきやうあり紙にひたして置て後に用の時おとむしてつかふ竹のとくいに溜る水も同じそれと小壺の水と云○ひむろ山とハ同抄に云むし鳥屋とて土にて塗まはしたるを氷室山と云其中へ樋をかけて水を入るゝを下行水と云○とろ板 同抄に鳥屋の内に水を流して古き飼を洗ひながさんためなり

盧橘

〔日本紀〕垂仁帝九十年の春田道間守に命じて常世の国へつかはし非時の香菓を求しむ今橘と云是也同九十九年の春非時の香果八竿八縵を得て還来る〔本草〕樹の高さ丈余其葉両頭に尖り緑色光而四月小花をひらく色白く甚香ばし〔古今〕五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする○古へ賞せられたるところの橘其種詳ならず源氏物語枕草子なとにも花も実もむつまじく具しあるをもつて去年の実の今年花さくまで落ずして黄熟したるなり漢土にもあるへし橘の種類につきて説々多よく見るべし○なかにもなれてをしえのまつり只橘との字

いかくも、勾められあり、つまく夏多ごと、

猶春の左部、橘の条、俤せこそ、

玉巻葛

奥儀

抽玉かく葛と八、葛ぞくの良、玉のやうに巻まもれバ、

萩枝折 葛の手と表ゝと、玉かく葛とよれ、

玉巻芭蕉

時珍曰、蕉葉と落すず、一葉舒ゝ、

一葉枯る、故ふゝと蕉と云、○初夏中心、

新葉と生ゝ、いまだ冠らざる、是と巻葉

と云、玉かく芭蕉と称すゝの八是なり、

筍

時珍曰、筍、俗ニ筆ニ作る八非ゝ、竹筍と筆と同性滑利、多食

ハ人を泻せ、九竹筍八泻竹と上ゝ、苦竹泻之 紀事

九筆八赤猪甚好ゝ食ふ、故ニ夜ゝ人とゝ

追りむ 和名抄 筆 和名抄 加毛奈 源氏横笛

橘鳥

杜鵑と云 万葉 橘の林とゝ

すゝ ゝ 古今 やゝ せ 花ちるもかゝ

あど ゝ ゝ 声

とえめ ん 大江千里

蕪三夏物

蓼

和漢三才画会 小青蓼 三月ハ

苗と生ゝ、四五月繁茂す、秋ハ至ゝ穂とす、

播磨津田、毎ハ徳蓼と出ス、年中穂ハ、亦一異ゝ

蓼喰虫

孔叢 有蓼虫賦、言是虫幼長斯蓼、不以為辛。

世俗ニ蓼食虫ハ好ゝ、是より生ゝる諺ゝ。

五月

端午

五月五日端午の節、端八初ゝ、午八古ゝ

五字と通用す、もゝ、ゝ八五月初の

五日の謂ゝ、珊瑚鈎詩話 端五の号、重九ハ同ゝ、後世五

字と以ゝ午とす、ゝ八誤ゝ、 風土記 仲夏の五日と端午ハ云

竹植日

竹醉日 晋書 五月十三日と竹醉日、寺、亦竹迷

日と云、是日竹と栽ゝ、必活、 竹譜

竹と種ゝ、ゝ八雌と以ゝ、根ゝ、上、一節発ゝ、ゝのを

雌ゝ子、 笈日記 降ゝ子ゝと竹植ゝ日八簑と笠 名 五元集

五月十三日 雨雲や竹ゝ

醉日の人ゝ、其角

田植、田植歌

早少女

早苗取

若苗、 犯事 九五月の尾ゝ、六月の首ニ至ゝ、苗種生長ゝ

玉苗、民間ゝ、苗代と云ゝ、苗を植んとゝて、先ゝ、と抜ゝ

早苗取と云、農夫男女混雑ゝ、再び苗と挿む、是と田

植と云、女子苗と種ゝ、ゝのと、ゝと、ゝめと云、各音と揚ゝ、

是と田奇と云、或八児童太鼓とゝ、ゝと勧む、九苗と

種ゝ、半夏生の前ゝ、○若苗八、ゝ長ゝ、ゝ、○

玉苗八、玉八稀義同、小山田ヲ玉苗植

てゝ[illegible]ことめがこそすゝ[illegible]

秋百合 和漢三才

畫会 花正白葩厚く大く上向ふ或ハ横向き最愛すべし、

かと深山渓谷の間ニ出こと得がたし、繩ニ縋り下りてこゝ

ふ一株秋ニ入ること能ハ上る故

六月

雉鳥習と

ふ秋百合と名づけ、こゝと珍重す、

学ふ 月令 李夏鷹乃学習注学習ハ

雛の[illegible]ハ飛ぶことを習ふなり、

滝殿 泉殿

の条

竹皮脱 本艸集解 時珍曰、上中苞筆各時を以て

出、旬日籜を落し、竹と為ス、 和名抄

二出、

籜 和名筆乃宇波加波、

田草取 本朝食鑑 種ゑ後二十日

前後、田の雜草を除き

篠 和名竹乃加波

去て其根と固くす、蟹く田草と除くことを再び除く

の旁ニ[illegible]、○夏ハ秋ニ至迄三度田間の萎を取、是を一番艸、

二番艸三番艸と[illegible]、 説文 簟ハ竹席、竹と以て席とす、

簟 和漢三才畫会 簟ハ竹筵、暑ニ用ふ

鋪

抱篭 ち部、竹夫人の条ニ出、

紈の納涼 み部、御手洗の条ニ出、

丸

四月

鷹鳥八 和漢三才畫会 列珠の樹高さ丈余、稍

十細氣條と出ス、緑色畧扁炎の豆ニ

似て、其葉細く小し、四月黄花を開く、狀微録豆の花ニ

似く繁く莢と結ぶ、録豆ニ似て

云、一種木の属、是を鷹鳥八と云、一種草の属と云

酉昏 花浅黄色末鋭く鷹の爪ニ似たり、云

そ

五月

蠶豆 引 時珍曰、豆莢の狀老蚕の如

—故ニ名づく、王禎ハ農昏ニ

謂ふ、其蚕時始く熟ス故ニ名づく、八月種と下す、苗葉と生ス

食ふべし、方ある豆中空ハ[illegible]、葉の狀匙の頭の如し、二月花

と[illegible]く蛾の形のごとし、紫白色、角を結ぶ、連綴く大豆の

如し、頗る蚕の形ニ似たり、 和漢三才畫会 其莢上ニ向ふ故ニ空

豆ハ嫩ニ莢豆と取り、食ふ、五月熟ス、○俗ニこの類、熟ー

くこれを取

扱ちと引ふ、

六月

相国寺懺法 十七日 紀事六

月十七

日、洛の相国寺閣ニ[illegible]て懺法を修す、世ニ閣と懺法

所と云、松風の鈸、小狐の鐃、當寺の珍宝ニ、是古へ佐々木氏

寄附する所ニ、○寺中ニ定家卿の墓あり、但禅宗也、

初午日云、神社啓蒙　祭所御食津神、文徳実録曰、仁寿二年三月甲戌、近江国筑摩神に従五位下を授く、按に、筑摩の庄八大膳職の御厨の地に、故に當職祭所の神と云へり、此地に初さ、蓋この神八稲食と掌るに依て、里女婚と為すときハ、祭礼に必釜鍋を戴て神に奉ず、不幸にして少壮の間に孀となるときハ、やむことを得ずして、改て嫁し、再び嫁する者八、二度と用ひ、三たび嫁するものハ三度と用ひず、神幸の後に候すると、中世、業平の花詞に、里婦笑靨と驚きて、数度と重ね艶態の故の為に、固に芦胡まぐさ、

雑和集　俊頼曰、近江国つまの明神と神ちまの神、其神の御誓おなじ、その男ちまの数に、鍋とつくりてその祭の日奉る、男おなじ、ちまの人ハそれをかぶりて、共に奉るに、どちらにまぶ、拙のおとこやとおもひてあり、れば、粮のごとくしていまだあらずとする、

委くハ春部、燕の条に見へたり、

王孫花　名医別録　王孫八海西、川谷及び、汝南の城郭の垣下生

○毎膳曰、王孫和名ハ、ちまの、八、独昔本朝にあるる明らけ、今識ることの多し、惜哉、特に毒の艸なり、療病の功最大なり、○今本邦の里俗王孫花と称するものハ誤なり、

蕪　三夏物　津波須　和漢三才図会　鯽の小なるもの、五六寸のものを津波須と名づく、西国にハ和加奈と号、九月に入て、許なるものを眼白と名く、十月二尺に近きものを鰒と名く、江東にハ伊奈太と称す、仲冬に長三四尺ばかりなるものを鯽と名く、

鈎瓶鮒　毛吹草　和歌吉野のつゝ、鮒ハ曲物に入て蒸す、手を付る、其形鈎瓶の如し、故に呼ん、一説此鮒ハ、鮎を取る鮒、この曲物に入て、吉埜川の水中へ沈め置く、熟する期、遠く出す、

月夜　雍州府志　飯ずしの一名と月夜と云、六条家に製する、異名を月夜と云ハ、其飯の精白なること、

五月　鸞雨、墜栗花穴　さ部、五月雨の余に注す、

辻　良徳曰、つゝじ花と云ふ、赤き惟子のごとくなるハ、

花　犬追物秘傳抄　後土御門院寛正六年八月、将軍慈照

院殿犬追物見物、し射手、皆衣裏日記云、紅へざる
辻が花の白帷子、ゝ、もろ〳〵拘〳〵ざるら、

六月

月次祭 十一日

公事根源 こゝに八六月十二月、年に二度諸社へ御幣を奉らせ給ふこゝ、弘仁年中に始まる、

津島祭 十四日 十五日 午久天王の祭、尾張国海部郡、門間の庄、藤波の里まで、

社家傳習記 欽明天皇元年、こゝに崇め祭る、天王、始め西海の對馬に降る、後に尾張の海部に移る、仍て其旧地の名と表して津島と号す、嵯峨天皇の御宇、其祠と立つ、始の祠八、柏森にあり、後居森の地に移り、更に祠と今の地に移す、

神祭記 当社夏祭八、この神島に鎮座の後、神民の夏日に堪ざると暗に知りて、避暑の為として、宵祭より翌一二諭〳〵、ちら〳〵、船の上の楽〳〵八、殊に重楽一成の舞曲、妙音の笛声、別調を神制表〳〵、この楽の一成と車楽舞、津島笛と唱初り、世に車楽の説、臺尾大隅とりまとめ、十一黨の武士、計策を以て討取られ、起るべしいまだ、社説こゝを否〳〵、前説を用ふ、六月二日試あり、八日に町毎の車屋あり、調ふ、十三日江口に

おいて暗の試楽、十四日の宵祭、十五日の朝祭、こゝを里俗打囃〳〵、車楽船上の挑灯、こゝ〳〵三百六十箇八、一歳の日数に象り、真柱の挑灯十二箇八、月の数、高擡四方の灯篭三十箇八、二月の数、宵祭を在寄観られて、又翌日昧爽の祭もあり、この時市腋車と先〳〵、津島の車楽山車、その前後搏論〳〵、五村前後と論ず、五村八来座、塘下筏場今市場、下捕是、社地前に大河あり、岐岨川の末あり、其中数町に及ぶ大河に大船とゝ、数千の挑灯と釣る、其影水に映〳〵恰も星の如し、○芦の神輿、

社家注進記 毎年御葦の神事、こゝ〳〵、国中の疫疾変異ありと、こゝ〳〵、津島社記、神祭式に、芦の御輿のこゝ〳〵、社説に御芦の神事あり、毎年六月十五日の夜、神主こゝ〳〵行ふ、極〳〵深秘、こゝ〳〵、その為に処こゝ〳〵、六月後の余風、こゝ〳〵、牛頭天王の修法、こゝ〳〵、旧記に、神翁一人、葦の葉一葉にて浮来こゝ〳〵、その名こゝ〳〵名の、後に馬津の居森の窟に插こゝ〳〵、こゝ〳〵の神縁こゝ〳〵、芦の神輿と称こゝ〳〵、

露涼 露八秋花多〳〵故に連俳通〳〵

秋とすれども、夏も又あり、故

[illegible]

下ゝ[illegible]て鐘と釣[illegible]ゝ、又白花

法華のこのあたり、葉も牡丹のごとし、

鈎鐘草

[こくぶそう]

花紫色、

四月

練供養

[紀事] 十三日ゝ十四日ゝ至りて、大和国當麻寺にて

法会と修す、十四日練供養を、僕射拱佩の女、

中将姫の忌日なり、中将姫、尼となりて、善心尼法如と云、[練供養縁起] この来迎引接の法事は、惠心僧都あり、[illegible]この

僧都は、和州の人、福寿村の人、雍渠の後、永觀中、叡山にて

この法会を[illegible]、其後當寺護念院、本は紫雲菴

と云、法如尼の庵の旧跡、寛弘元年の比、僧都、并に寛印と

[illegible]此処に来り、尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二

年四月十四日、法如の往生の日と以て、迎接会と修す、

是則横川の花臺院をうつす処なり、○一説に、四月十四日は

惠心僧都の[illegible]日なりと云、法会

と修す[illegible]

兼三夏物

根芋

[和漢三才]

[図会] 蔵、和名伊毛加良、一云、伊毛之、俗云、

須伊木、○俗に根芋と称する八十[illegible]

五月

合歓

[神農経] 合歓、蠅、忿、萱草、忘憂、○蔵器曰、其葉

暮に至て即ち合ふ故に合昏と云、[和漢三才図会] 五月

花[illegible]、其花、上半は白、下半は肉紅、散蕚[illegible]、糸の如

し、云々、[和名抄] 祢布里乃木、[万葉] あぢさゐ、

又、[新六帖] [illegible]

の花[illegible]

慰狩

[illegible]射、火串、[こくぶそう]

獣狩、夏季に、[illegible]は鹿を射る、間ある夜、山の木

[illegible]げ[illegible]筒と燒、或は小炬を串につけて、是を火串と

[illegible]、妻、[illegible]鹿、火影[illegible]寄り来る、牝牡目を見合、

[illegible]、鹿の目のごとくなるを、的として射取

る、哥[illegible]合す鹿とよむ、又さつ男の[illegible]

[illegible]その待と云[illegible]

六月

練雲雀

[雲雀鷹]

○九六月毛[illegible]旧とあ[illegible]む、俗呼て練雲雀と称す、

毛[illegible]其飛こと速[illegible]ず、故鷹に[illegible]

と捕ふ[illegible]と雲雀鷹と云、○定家の鷹三百首の内、

河内女が[illegible]の[illegible]雲雀一[illegible]鷹とあ[illegible]

○或説に、練雲雀とは、音入雲雀の畧語[illegible]

四月

夏羽織

夏草、あるいハ羅衣、あるいハ近来の俗服し、

中山祭

中酉日 神社啟蒙 京三条猪熊の辺ニ行ふ祭る神、皇石瞻、奇石瞻等、明徳記 今六角堂の南、猪熊の東ニ遷座あり、石上寺と云、兼邦百首抄 二条大宮岩神ニ付き云ふ、中山大明神とハ、是三井寺北の院ニ在り、新羅明神云々、素盞嗚尊 公事根源 永禄五年六月十六日、神社を建立し、同六年十月八日、従三位の神位を授けらる、後冷泉院天喜元年四月ようハじめて宮幣を奉らる云々、是四月の中の酉日ニ、三井寺ニおいて、五月五日新宮祭と修す、

夏木立、夏草

是新羅明神の祭なり、元帝纂要 夏草、曰茂草、木曰蔚林、茂林○いづれも、新緑ものびけるさまを言ふなり、

名取草

牡丹の一名と、藻塩抄 昔、ある女この花を愛し、多くうゑおきて、昼ハ終日あゞめ、夜ハとも寝ずして、風ふ撫ふべきことをなすとて、ようて、男、他の心ありとて、離別しぬ、とぞあきよ

生節

常陸国誌 人塩水と用ひ、茎乾し脯とす、味生よりも美し、俗ふ鰹節と云、毒助し、○鰹節の、つよくあまくしくして枯るるを、○江戸ハ、ものうゝ、ものうゝ、

茄子花

時珍曰、夏ハ秋ハ至て紫花を開く、五瓣相連り五稜縒の如し、黄蕊緑蒂其茄を包む、

兼三夏物

蚰蜒

説文 附蠡ハ蛤殼を負ふ蝸牛、殼あるを蛞蝓云、

余情ふ

夏の霜

朝詠 月照平砂夏夜霜云々、この詩ふ夏の月影を霜ふ云ふ、

夏月

明々たる夏月、涼しきさまあり、

夏雨

五月雨も夕立も、ものうゝ、各一種の景物なれども、夏の雨ハ其ものうゝ、常の雨の趣ふ、夏季のあはれ、

夏夜

夏野

百草の茂るさまを専要し、○刈人とぞうの夏野 翁

夏山

郭熈書譜 夏山、蒼翠如滴

夏虫 身をこがすとも云、即火蛾のことなり、蛍とも、古哥に夏むし
とつて

夏野の鹿 宗祇抄 夏野の鹿ハ角生初て、短くして一束ばかりなるをいふ、あづさ

万葉 夏野去小牡鹿之角乃束間毛
妹之心手忘而念哉 柿本人麿

五月

永

根 和哥に、あやめ草ねなどよみたるハ、あやめのねなし、根の永き
そのかく、永禄六年五月五日に、あやめの根合といふを
なされ、其式哥合の儀のごとし、左の根、一丈一尺、右の根、一丈
二尺のよし、古今著聞集にミえたり、是ハ後冷泉院の御時に
又郁芳門院の根合などあり
ことさら八雲御抄にもミえたり

苗 右、部、田植の条に出す

南天花 時珍曰五月小白花をひらく、和漢三才図会 画譜に蘭天
竹と名く、其葉儼にして竹に似たり、子を生じ穂をなす、紅なることと丹砂の如し、久しく経るとも落ず脱ず
されど庭中に植れバ火災を避べし、甚験あり、近頃白子の
南天燭を出す、以て珍しとす、凡此樹、長じがたしといへども、
山陽の地に大木あり、作品土品の山に、長さ二丈余、周り一尺
二三寸なるものあり、箸に作る俗に耶鄲の枕と云、
本艸綱目 南燭、またハ文燭と名づく

瞿麦 常夏

和名抄 瞿麦 和名奈天之古 一名止古奈豆 草花譜 瞿麦、草午なるものと石竹
と名で千葉なるものを洛陽花と名づく、蘊頌 苗高サ一尺八
九寸、葉尖り小く青く、根ハ紫黒色、形ち細蔓菁の如し、花紅
紫赤色、五月に至て開き、七月に実を結ぶ、○大和撫子、唐撫
子、川原撫子、鷺鳥撫子、藤撫子、木の種あり 栄雅抄 花の姿
ちひさやかにうつくしく色よく咲けバ、むつまじき名子になづく
撫子とも云、又盛久しくあれバ常夏ともいへり、唐撫子ハ、色こきの品
あり、大和撫子ハ紅梅色なるを云、鷺鳥撫子ハ花の形によりて名
づくし、藤撫子ハ色によりての名なるべし、○石竹 和漢三才図
会 瞿麦 即ち石竹なり、今以て二種とす、共に葩の周囲に刻歯あ
りて切又あり、剪紅紗に似たるものを瞿麦とし、切又なきもの
を石竹とす、○かられしにあるそこハいざなぎすあつき
のおもふおもる
いとたけ 後頼

夏菊 本草 菊に夏菊、秋菊、冬菊の
分ちあり、菊譜 引花史曰四月に
咲くものあり、張孝祥嘗て詩あり、五月に咲くものあり、陳
子高嘗て詩あり、六月に咲く者、符離王常詞あり、秋冬二

冠くるものと坐て貴くとゝ子ゞ、

夏

くるものを次とす、

生胡桃

博物志 張騫西域に使し

本草 此果外に青皮肉あり、

むくさゝ、胡桃の種を得て、

こゝを包む、其形ち桃の如し、胡桃は十分にして其核く樹の

高サ文許、春初て葉を生ず、長四五寸両く

相對す、三月花を発く、栗の花の如し、実を結、

茄子

釈氏切韻

茄、一名紫瓜子、

杜宝拾遺録 隋煬帝、茄を改て崑崙紫瓜

一云、

多識篇 水茄 今捜奈如奈寸地 ○谷茄、黄山谷曰、茄の老るもの

の子堅し、谷の如し、穀子茄と名く、谷と穀と音通ず

○白茄子、時珍曰、銀茄と名づく、云云

六月

物の部、形代

名越祓

神祇令 名越祓とは、名夏の

の条に出す、

撫

畧語あて、夏越の祓と言て

ろは不祥を解除、夏と越と、千秋を至らんとするの意あり、

八雲御抄 名越とゝは、あくまる邪神とあゞむる故に、此説

おもしろ、神と和す祓とも云へり、○荒和祓ごとも同じ

云云、

公事根源節折式 晦日の夜御贖物まゐる、あらよ

和節 みの御装束云云 此次第 江次第 部、節折

の条見合よし、○夏祓、名越祓とは惣名、荒和の祓

節折は天子の御祓なり、大祓は百官の祓なり、部大祓の

条かのつるかゞとし、○御祓大祓、形代、小嚏三神、茅の

輪、麻菜流祓草ホ、おの〳〵頭字の部に分ち入るべし、

古今六帖 こゝの月のあらしの祓するゝ人はキとゝの今のうと

りあり、

夏祓

夏祓、名祓と、其時節時刻

後人云云

もの名、夏祓とゝて季と定め、名祓も、夏の名方

涼風と得て修する体、和哥ごと読こゝ

夏神

樂

川社

興伐抄 川社のとゝ、是は夏神ホのこゝ、神ホは冬ゝこゝと、

おのづゝ俄ゝ、夏ゝ時ゝ川のゝ時は川のゝ

おてゝ河の瀬ホ榊一本と立ゝ、と拄ゝ篠竹と棚

ゝゝ神供と菊ホ是と川社とゝ○俊頼朝臣曰、河

社のゝ、知人ホ、ゝ人のゝは水の上ホ社と

祝ひて、夏は神ホ、ゝ、

川社

河社ホ、ゝ夏神ホのて、昔ゝ

此道の先達、ゝ、尺古ゝのと見て心得ゝ

貫之集ホ四、反ゝ、川社ホのみ、ゝ

ゝぬひゝ、又云天慶四年三月ゝの御屋風のゝ

夏ぐつ 行水の上ゆくる川やうかいるこゝろあるべし
の孔、初の哥、新古今集神祇の部に延喜の御時、屏風に夏ぐつの
こゝろをよゝ侍りけるとて合せる時代はぐひるまでおもに屏風の
言葉にて夏神事とゆるはぐ祭て是は夏でしへの絵神事
絵の小ふ川社とゝのこゝる是は三月六月祓の時のこゝ又右二首ともに
六帖冬の部、神事の哥に載るは四季の国月の哥ともこゝ冬に入れ
ゝる如く類ゝとゝ神事に入れも冬の哥としゝるはおぼずこの
六帖ことゝは河社夏祓へやて神事に忠見集に神屏風に六月
河辺に神事する処やゝる 三かのかのうぎまて行水ゆくべ
あぐしの神事ちもしろゝもあぐしのゝゝとゝ夏神事と
ゝめるゝ河社とは延喜式六月大祓祝詞にゆる天神地祇こゝ
ゝゝぐとゝゆひ河の瀬に坐す瀬織津媛ゝゝ神おゝゆるもの
と大海原に出す放ちゝゝ此この故に河原こゝ祓を
すゝは河とやぐ河社とゝゝ中むゝは川中ゝゝゝめゝ社の
ゝとゝ引結ひ神供ゝぐ備へゝ祝詞あぐゝて後別に神事とも
ゝゝゝ 匠房の六月冬のこゝ 川やゝゝ秋とゝゝ
ちしゝぐ千波のしゝゆゝ風の涼しゝ 武中将資成朝臣の家の
哥合、後成の孔、五月雨の雲ゝもゝゝと川社ゝゝ衣とゝ

のゝゝ孔、風雅集兵乙成実 川やゝゝ中の波ゝ五月雨
ゝ衣ゝゝゝゝひゝゝゝゝ

内八越瓜ハ皮ヲ剥テ煮食フモヨシ、糟及ビ糠ニ蔵ム、硬ク脆ク美ナル上品ニシテ八種、菜瓜ニ似テ小ク、蔓ノ卵ノ如ニシテ、小瓜ト名ヅク、糟ニツケテ食フ、

奈良漬製法

同上 糟漬の法六月上旬の中ニ越瓜の皮ヲ剥ク物ヲ採テ、ヘタヲ破リ、蛤貝ヲ以テ瓤子ヲ刮去リ、雛船の形ヲシ、灰ヲ盛ルヲ一時バカリ、水湿ヲ去リ、灰ヲ拭ヒ去リ、塩ヲ盛リ、凡十二舟ヲ酒糟三十斤ヲ用テ、瓜ヲ包ミ蔵ム、各相碑ニ敷キ、固ク封ジ、大低七十五日ニシテ成ル、

納豆造

同上 納豆数種アリ、大低鹹豉の法ヨリ出ヅ、以テ酒肴ニ、僧家ニ、

夏切茶

犯事 六月の始、宇治の茶人、新茶ヲ新壺ニ盛ク、常ニ茶ヲ賣ル所の良賤の家ニ贈ル、是ヲ夏切壺ト云、凡壺の蓋紙ニ糊シテ堅クシテ、ヒモヲ張リ、瓜湿ヲ去テ、壺の内ヘ入レ、茶用ルコトアルニハ、小刀ヲ以テ、壺の蓋合縫の糊帯ヲ截シ、茶ヲ出スヒモヲ壺の口ヲ切ト云、冬ニ至ルマデ、この壺、盛夏の間、處々の山林清涼の地ニ置ク故ニ、夏中用ル所の茶ハ、先ヅ是ヲ贈ル、故ニ夏切茶ト云、

夏ぶし

千柳ニ誤ル、鯉の生節ニ雑詰ル、髮沸瘡ニ、暑中ニ喪ナシ、小児の頭瘡ニ、江戸の俗訛テ夏ぼし ト云

夏深し、夏の別、夏の後

義ヲ、

五月

蘭湯を浴す

大戴礼 五月五日蓄蘭為沐浴

詞 浴蘭湯分 沐芳草 本草 蘭八乃沢 蘭の香草ニ今の勾蘭花ヲ、あやめ草ニ、

向日明神祭

神社啓蒙 向日の神社、山城国乙訓郡、西ニ辺ニ在、名勝志 當社の額、正一位向日大明神ト書ク、二行ニ書ク、道風の筆ニ、ト云ヘリ、西四の民家の側ニ花表アリ、

四月

志 一説ニ曰ク、向ヲ、ノ八月ニモ、ハ日向大明神ヲ、本朝人皇の祖神、神武天皇ニ、ハ月読命ヲ祭ル、ニシテ、ヲモ、ラズ、○當社祭礼の以前、社人先ヅ岩倉山三宝院ニ行ヒ、離ヲ、シ、又祭日必神馬ヲ此滝ニ引ク、是出現の地ニ、ヒバヘ出現のコトハ、西岩倉金剛寺縁起ニ、ヒバヘ出現ノ、今ヲ暑ニ

結葉（むすび）で

金葉集 応徳元年四月、三条内裏ふく、庭樹結葉と
よめるを せられ侍る 院御製、切なりてこず
恋こそ葉なるあるこ ぬきこハ松のまつりもこころ
○諸木の葉と葉と相交り結ぶ事 ことはあり

麥秋

礼月令 孟夏月麥秋至、註、秋八百穀成熟の期、此時
於こハ夏ことなれど、麥ゆえこハ秋、故麥秋と云、 蔡邕月令章
句 穀ハ其初生と以て春と、熟すと、麥の秋風 夫木 御園
秋とす、故ゆ孟夏と以て麥秋とす

麥苅

和漢三才画会 大小麥ともに九十月種と
山時鳥 麥のいきくく、 俊頼
下し、皆四月黄熟す、其苅を八立春が百二十日に至ると旬とす、
故諺に云、麥八百日の中に蒔べし、三日の中に苅べし、但し小麥
八苅取るとき、大麥より遅きこと十日ばかり、麥八五穀の貴と
す、○二年草、年越草、ともゆ麥の異名、麥八年と隔て種る
故に名づくるなり、

麥藁笛

同上 小麥稈厚く硬し、小児用て笛
と作りて吹くこと麥こしの笛と
云 夫木 うるわしがすきびるるゆ麥笛の
声ゆゑ夏の日ぐらし 西行

五月

六日菖蒲

京師座擔ゆ昔ゆ菖蒲と取て六日に菖蒲湯と
ゆす、是五日の夜の露を受る物と用る、彼金門記にのるゆ
神水の説 ゆゑなり、

室明神祭

十三日○掃部室の津ゆ大社あり祭る
神、上賀茂に同じ、例祭九月
十三日、是ゆ先、洛の上賀茂の氏人西人播州ゆ下向して神事を司
ること云、其次第、先、辰刻装束束帯すこの刻の鐘と撞て、神主以
下出仕す、即拝殿の座につく、御鑰と祝ゆこと、社家こと役す、
次神主祝の氏人賀茂御戸を開く、氏子素襖烏帽子ゆ、唐ゆ
の裏、神前の左右につく、次神饌神酒と供ず、此間事長神子神示と
奏す、次室津の童女揮の哥と奏す、次神主祝祝詞と申す、是
よりこと出、貴船、太田、若宮、の社の御饌と献拝す、神主祝内
陣入て、御饌と撤す、内陣の御帳帳を上すこと祝御ゆと閉ず、
神幸、先、神船着岸の後、神主祝頭宮の拝殿の座ゆつく、西社へ
御幣榊と捧て、大床に候ず、次に渡御す、遊女十二人三日潔斎し
て、神事に出、内五人ハ男子の姿にして髪と剃り、男髷ゆして、金
襴の社衣と着、笛二人鼓二人大鼓一人、残り七人、髪残一人天
冠と戴きて、萌黄の水干と着て、七人

六月

虫干

虫拂 土用干 炎月土用中、諸神社、諸仏寺、美宝の虫拂とす、和俗六月土用中、天日の晴るを俟て衣服・書画の類を曝す、是を涼と取るなり、土用干ここに、もろこ書画衣服の蚤虫を勢葉するなり、こゝ

う 四月

卯花衣

桃花御説 表白裡青、卯に同じ、○四月こゝに着す、

梅宮祭

上ノ申 神社啓蒙 梅の宮八山城国葛野郡、王城とさゝを二里ばかりあり、祭る神四座、相殿の神四座酒解の神大若子の神、小若子の神、酒解子の神○祭今絶ゆ、土人ふつゝと祭るのみ、祭の式、江次第に、橘氏の祖廟なり、世俗妊娠の婦女、当社の砂とこゝろ、帯襟に佩とゝ、足檀林皇后嘉智子の遺風、

卯花

和漢三才圖会 按ニ楊櫨類種あり、空木、管根卯木、唐空木、三葉卯木、ゝ山中に多し、人籬根に植ゝるの八山空木、ゝる中空なる形に空虚木と名く、高サ丈ばかり、皮白く、肌深青、空あり、其葉円く長く、四月小白花を開く、簇ゝ愛すべし、俗に卯花、○十姉妹、管根空木と訓む、花巣に十姉妹似て同じ、ゝ京畿に多し、是も卯花ゝゝ、○岩本空木、岩の傍に咲くるを、千載集俳諧哥、うの花よりでことぐしかけ島のあゝもさゝゝ草、垣見草、雪見草、卯の頭の假字の部に、うち入る注ス、

卯花くたし

八雲御抄 うの花くたし 四五月の雨、

茨花

和漢三才圖会 金櫻子、山林の間に叢生す、大に薔薇に類し、刺多く、四月白花を開く、夏秋実を結ぶ、黄赤色、ゝちに小さき拓描に似て長し、

夏枯草

時珍曰、原野に多し、苗の高さ一二尺ばかり、其葉微方にして、葉節に對して生ず、細薄にして、背白く、茎の端に穂を作す、長一三寸、穂の中に淡紫の小花を開く、二四月花を結ぶ、実を結ぶ、亦穂と作す、五月便ち枯、和漢三才圖会 夏枯草、穂の形矢筒の靫のごとし、

鸚実

和名抄 鸚故に俗字豆保草とゝ、和名字流木是ゝ、実 和名阿字之智、二字比須乃岐乃美、今案所出未詳

大和本草 吉利子樹和名子久比すゝの小木ゝ山林ゝあり、小木ゝ葉八山鄰蹟に似ゝ

両く相對ス臘月より諸木みさをなくして生ず三月ふ小花さく四月ふ実熟す両く相對して葉の茎より内ゆゑ葉の茎の本より実の茎生ず異物ゑ鶯の始て鳴くこゑふ此花さく故名せり京畿おく紅の木こゑこの実の形のごとく上ふ窪みあるゑ百菓の先がけゑ秋ハ紅葉して落ツ立花の下草あるゑ

童子鳥

ゑ〻ざんの異名

灌頂口傳 この鳥冬ハ深山の木のうつろふ住かゝらの毛を落く小童の髪のごとくゑ

兼三夏物

團扇 五雜組 大明以前摺扇なし 多く團扇と用ふ 和漢三才図会 方扇 俗云唐宇和波 翳ふ似く物と打べく故ふ宇和波と称 和漢文操 支考著 團賛の序ふうちはこゑ和訓ハいとゑる故とも ちうちうこゑと俳諧の書ふハ うちわ 團の一字ゑ用ひ来せり云 走と字治 たをいふ

宇治丸 「毛吹草」城及宇治の鱧鮎

鵜飼、鵜舟、鵜縄、鵜遣鵜

匠 和漢三才図会 鸕鷀、和名之乃 今云宇乃 豆止利 按和名抄云大なるを鸕鷀と 日本紀私記ふ云乃豆止利小なるを鵜鳩と

の鵜飼、六月避暑納涼の為ふ近国より来く異物ゑ所謂上川七艘、下川七艘、合て舟数十四艘、長良の渡ふ小瀬の度ふて三里の間と上川ゑ長良ふ川下三里と下川ゑ上川の點と上品ゑす、舟一艘ふ鵜十二羽、鵜遣一人、舳當一人ゑ、舟の舳先ふ鉄網を下し、篝火と焚、十二の鵜の縄を左の手の指の股ふとゝ持く鵜の魚と追ふゑ左ひゑその縄ゑ法ゑく次ふとゝけゑ〻その時、逆ふ縄とゑ引まくるとぬきゝく持ふ引べきを引まくる縄ふ解く帯ゑ結ふ結ハ結て鮎と十ふふ呑くる鵜ハ船ふふふ引ゑと引ゑゑふ右のゑふ魚と吐ふ、又水中へ追入ゑゑこの手先のゆゑ引ゑゑこゑ引ゑゑ次第と追ひく甚ゑ苦ゑ鵜縄長さ一丈二尺鵜の首ふ鈎と入く腹中ふ入らざるやうふ設く月の入ゑゑ船とゑゑ、月夜の間ハ篝と焚、腰装と著ちゑゑ

とゑ〻ゑ九三四月ゑゑ〻ゑ八月三十日と限とす、

五月

馬弓 弓部騎射の条ふ〻

宇治祭 八日○離宮乃

社八山城国宇治郡宇治の里にあり、祭る所三座 【宇治日記濱千鳥】 應神天皇、菟道稚郎子、仁徳天皇、當社八宇治の北にあり、関白頼通公、平等院建立の時、離宮と南に移し平等院に向ひ、此寺の鎮守とす。 【神社啓蒙】 離宮、祭る所の神一座、藤原忠文、按に忠文、宇治民部と号す、母八息長氏の女なり、天慶三年、秀郷・貞盛に、将門誅伐の功を以、恩賞を行ふ、その日、小野宮左府忠文と、ひとしく賞列に入れず、故に忠文ふたり小野宮左府と恨み、遂に宇治川に没せ、其霊ものゝ祟をなして、百姓と斃す、是と、ひとしく祭て宇治の離宮と号す、○両説互に異なり、この神事、そのかみ頼通公に勅して、天下太平の御祈として、五月八日、赤の刻から九日巳の刻に至りて、こもると平等院にて修す、太平の御神事、三月梅苔の両種と、必ず神饌に備ふ、 【雍州府志】 祭の日、金銀の幣と奉る、供奉の人、金銀の幣あると誤て、くるくるとふ。

鶯の巣 先板の諸抄に、夏変とす、

鶯音を入 【月令】 反舌無声 【藏器本艸拾遺】 百舌、一名反舌、今の鶯なり、○ 【礼記疏】 反舌と蝦蟇とは、未だ是非とし難し、

羅 細布なり、くめの細きを布、越後縮のごとし、○すべて薄織の絹布をもいふ、 【呉普本草】 水萍、一名廉、葉円く小にして、一豆一葉、根水底に入て、五月白花あり、○凡荇萍の類、其花水面に発、或は白、或は黄、瓜の花、花黄、胡瓜・越瓜の類、すべて五六月盛し、

梅 その跌字の部にこれを出す、

漬る、梅干、梅剥 梅剥は、皮肉ともに剥掛晒乾す、梅酸、子なるもの、

浮巣 み部、水鳥の巣の条に注す、

蠸 【介雅注】 蠸、一名宇武喜、瓜の蔕と喰ふ、 【和名抄】 宇武喜、宇利波閑、○和名抄に、形其蛍に似て、黄色ある虫なり、

うつ蝉 世部、蝉の条に出す、

鶯の附子 【貞享式】 此式は例の當用、今按るに、鶯の子なり、春巣立て、夏飼へば、六月の間にもて、暫て、冬至のころ、鳴習ふゆゑに、鶯の子に鳴の字と結びて、冬李とは、あるべきなれば、夏は用ひ難く、或は引鳥の親に附、或は笛と、以て引音を教、稚音を、夏の間あれば附子は、決して夏とのみ、笛を結びても、夏とも、

六月打水

もぬるゝわゞ　其角

い部ふ　俤出す

の　四月

残花

貞享式　此詞ハ古今の論ふ、ものの道理あゝ、花其季ゝ過ぬ時ハ残るとゝ、ゝ残ハ残るとゝ、ゝ春ふ来ゝ、ゝ残る八夏と定むゝ、ゝ

兼三夏物

和漢三才画会　赤色肥ゝ、ゝ小き蚕

五月

蚕六足ゝ、ゝ能跳る、夏日人家の温熱の気より生ず、

おのづゝ牝牡を、○さゝ、ゝる夢八ゝ、ゝ蚕の痕其角

幟

か部飾畫の条ニ出ス

六月　凌霄花

時珍曰紫葳、名凌霄、俗ニ赤艶ふ

るとのひゝ、紫葳と云、此花赤艶故名く、木ニ附て上り、高数丈故ふ凌霄と云、年久、ゝきゝの藤大ゝく林の如ゝ、春始く枝を生ず、一枝数葉、尖り長くゝ、歯ふり、深青色、夏ゝり秋ふ至ゝ、花を生ゝ、一枝十余朶、大サ牽牛花の如ゝ、頂ニ五瓣と、ゝらく、頼黄色、細点を、扨深く更ニ赤ゝ、

八月英と結ぶ豆の莢のごゝ、長サ三寸許、

く　四月

久由祭

中ノ巳　但シ巳ニ〇山城国乙訓郡久ゝしハ初巳　世の神社、久我の

氏屋二町ゝりふあるも、菱妻明神と号、三代実録貞観八年八月十四日丙戌山城国乗六位上奥我万代継神授従五位下、

関白賀茂詣

中ノ申

公事根源　初度ニハ日次とゝ、ゝく此事あり、四融院天禄二年九月廿六日、摂政右大臣謙徳公が賀茂詣のゝ、ゝ、是摂関の人の賀茂詣のもゝめあるゝ、ゝきふ、此事八心ゝ賀茂祭のゝ、の日ゝるゝ、主人八乗車ふく、地下殿上の前駈あゝ、白妙の御装神宝の唐櫃やうの物とゝ、ゝ、琴持、菅笠、深沓、ゝゝとのとめ、ゝ、上達部軒とつゝぬ社頭ふく、神拝ふ、葵挂と称宜ゝ、ゝ、ゝ、

くるハ中の酉の日也、灌佛 ふ部仏生会の条に出

字彙 茂ハ艸の豊盛の皃、草の王 大和本草 葉ハ菊ふ似く大あり、

元帝纂要 夏草と茂草と云、

くる内に岐木と、四月花 乳柑の花 和漢三才画会 葉

とゐ〳〵く、俗に草の王と云、

云し○花もまた 橙ふ似て長く、

橙ふ似くと、 沓手鳥 新撰万葉 郭公鳴立春之山辺庭沓直ふ鞠人

哉住濫○くそどりハ時鳥の異名し此鳥、前生沓と作て

賣々ふ百舌鳥こと、と買く、價ともらふ故に百舌鳥ハ此

鳥の来るときハ木の下竹の中にかくれ是を見ると、是古き諺あり、 勧農鳥 一名杜鵑の一名

此鳥農業を催さんとて、四五月来り田とつくるぞと

鳴くと、時すぎぬれぞこの〳〵ずと鳴と云、故ふ

名 俱伎羅 契沖の説に、くきらハ時鳥の梵語と云

く、○こゝの〳〵ふてゐる声あり

とあやめ〳〵しく 知の子 時珍曰、按に王安石字説に云、

鳴くきゝふ 遍照 一面の個と設け物觸る後

蠶蛸 絡新婦の数品ありて皆初夏ふ子と生ず恰も蜘蛛の子の如し 藁塩草 知の子ハ生ると出て風ふふるまてちりぐふ

るよしいへり、 新撰六帖 おゝ〳〵世ふうまるこのひてを蛸の子

のちりぐふこそまくこと

ちりぬれ、衣笠内大臣、

五月

延喜十三年五月五日丙午条所あり藥王を供奉せらること

常の如し去年の九月の菜莫を撒して藥王を以て懸替御

柱の前ふ書る例あり、 紙草紙 五月五日ふハ、縫殿より御

藥玉そいろくの糸と組さけてまわらもれば御几帳奉

るなり柱の左右ふ付くり云、 世諺問答 諸病ふ五月ふ

おこる故ふ〳〵藥玉と五色の糸をまて調へこれを一日

ハ悪氣とをらふと申本文侍るあや、 雲州消息 今朝或処

より藥玉一流を給ふ作るふ百草の花を以てし、貫くふ五

色の縷と以ても草虫の形を模して其花房ふ洒ぐむ芳艶

の美興あり感あり古人の云續命縷と懸る時ハ人命と益

云こちの部長命縷の

糸かよ〳〵し見るべし、 藥日 藥草摘 藥狩 世諺問答

競馬 五月五日

と藥日といひて、その日一切の藥草をとるなり、荆楚記是昔雜藥と競ひ採夏の小正云、藥と醫て以て毒氣を止除す、宗祇抄きそひうるとハ、くさくさ四五月ハ藥狩とそまる也

萱草花

忘草 時珍曰、萱草護

に作る、護ハ忘あり、詩ハ憂思不能自遣故欲樹此草玩味以忘憂也、呉人こまこと療愁といふ、其葉蒲蒜の葉の如ふして柔弱あり、新舊相代りて四時青翠あり、五月莖を抽んて花をひらく六出四垂朝ハ開暮ハ萎秋深ハ至てすなはち盡く、其花紅黄紫の三色あり、李九華が延壽書云、嫩苗を蔬として食へハ風を動し人をして旨然と醉るがごとくあらしむ因て忘憂と名く、此も又一説あり、

清韓奥義抄 忘草 萱草といふあり、兼名苑ハ忘憂艸とうけて、大和本草諸説を引て本邦の萱草にあらず、然ともこれ五月莖を抽んで六出四垂といふハ花の形相似るものあり、一種朝鮮萱草あり、葉冬も枯ず、其花紅黄色あり、時珍の説ハ收ず、

雲見草

揀の異名○吉吉

山遠き軒端ハうる雲見草、

栗の花

續領圖經栗の木高さ三三丈葉楕めて鋸ハ類ス、四月花を開く青黄色條長ふして胡桃の花ハ似たり、

山梔子の花

時珍曰、梔ハ酒器あり、卮子あるとふ象る故ハ名く、俗ハ拖ハ作る、佛書に其花を稱して薝蔔と也、薝蔔ハ雲間こもと林蘭といふ、葉兎の耳の如く厚くして深緑也、春栄秋瘁ハ、夏ハ入て花を開く、酒盃の如し、白き瓣黄の蕊

車百合

和漢三才図會葉畧濶く對生して車輪の如し故ハ車百合といふ、其花瓣卷轉横ハ垂る下野日光山、和州大峯の産谷異色あり、

黒百合

同上花ハ黒色のもの絶てなし、惟紺色愛もべし、本奥州より出、

桑實

同上桑ハ蠶と養ふの地多くこれを栽實のらざるものあり、俗に男桑といふ、其桑の椹ハ初青く白く漸く赤色黒く熟し味ひ甜く、其木堅實ふして黄白の色、

水雞

同上竜鳥和名久礼奈井、葉に似たるに大きく鳧の如くふして頭背翅皆蒼黒の斑あり、淡黄赤色を帯眼の上ハ白き條あり、觜蒼くして長く、頷頸の間白くして黒白の斑あり、尾短く脚長く淡黄あり、夜鳴て且ハ連声人の戸を敲くが如し、蓋水辺に在り、晨と吾く故ハ水雞と

名く、[本草]多く田沢の畔に居る。夏至の後ゝ夜鳴て秋後即やむ。

黒鴨

[仙覚万葉抄]黒鴨一名かるといふなり、鴨のたぐひなり、田舎の人は黒鴨といふ。[和漢三才図会]軽鴨全躰黒色頸の後に青色と帯光あり眼の上に炎白の條あり、嘴黑くして啄端淡赤く白色にして黒く、縦の紋一條あり、脚掌とも赤し、

黒さうえん白さうえん

梅雨中の空合といふべし譬ばかごとりて今を降るけしきを黒さうえんといひ、又小雨ふりあらんかと思ふけしきあるを白さうえんといふ暮うる空の一もきり晴てのくるを多くとんといふこゝろなるべし

六月

鞍馬寺竹切

廿日[親長卿記]文明三年六月廿日、今日鞍馬竹切也、夜に入て護法の儀あり、云々、今に至て今月今日之を修す、[紀事]紀事延鞍馬寺の主僧、夏五月護法を修す、日中大蛇北の峯より来る、峯延毘沙門の呪を誦す、蛇おのづから斬て段々となる、此寺の本願人藤原の伊勢人禁闕に奏して、役夫五十人を發し、大蛇を静原山に葬る、俗其地を呼んで大虫の峯といふ、今に至て毎年六月廿日、村民鞍馬寺堂に集り大竹を縛て立て、又別に竹三本を堂の中間に縛て横さへ法師廿人餘白き袴を着し、山刀を佩て庭上に出て、一本の竹を近江と称し、一本の竹を丹波と称し法師各十人左右に分て、同時に声を揚て走して山刀を以て斬ること、截るその遲速に依て、両國の豊凶を占ふ、速なるものは豊を得ること、遲くして後るゝものは凶なること、竹切の終て、其側の遺意あり、又夜に入て寺僧各毘沙門堂に集り、其側に僧達中間に一人を置、各肝膽を凝して、こゝに祈る、件の一人忽に倒れ即しに、ひらくして蘇生す、是疫鬼を掃ふ法なり、

[縁起]松尾寺鑑禎和尚、宝亀中に居とこゝに、トス、雌雄の大蛇あり、鑑禎持念して蛇忽ち死す、禎一蛇に謂て曰、此山水乏し、水を絶こゝろべしと、蛇誓ひて去、俄に清泉涌出る、今の閼伽井是也、[手説]竹切の事、具に蓮花會といふ、是中興開山峯延和尚、呪法を以て蛇を斬、その遺意を以て峯延の遠忌會あり、夜の護法は開山鑑禎和尚の一蛇と、殺ひ護法神となせし遺意なり云、

雲の峯

[杜詩]奇峯突兀

火雲峯 陶潛詩 夏雲多奇峯 夫木 六月ふるうめとく
えて大きらふあやすき峯の雲のいろう哉 衣笠内大臣
薫衣香 の部 掛香 夏月
の余るべし 葛水 天和本草 葛の粉 冷水に入るをたてゝ飲む
よく渴を解胃を
優らせ功尤多し 葛の花 藤領曰葛は春苗を生し
藤を引蔓一二丈 和漢三才
圖會 花豆の花に似て大きく、海月取 崔禹錫食經 海
實もまゝ黄色豆の莢の如し 月一名水母 貌ち
月の海中に在るに似たり故に名く云 滑稽雜談 泥海に
生ず故に備前苑前より多く此月取て瓣の葉と多く
割て海月の肉と色み鹽と用 霍亂 傷寒論集成正
ひぢ只葉と以て淹藏する也 珍云夫霍亂の病
は夏月暑時飲食過度の致す所胃中擾乱上吐し下
瀉する者是也霍と攉と古字通用 説文云攉肉羹
也犬氏人の食の爲に傷る所肉食居多故に特攉を
舉て應食物と統る也凡人其嗜欲する所皆これを
乱といふ○青藍云俳諧歳時記に先板の諸抄香需散霍
乱ホと六月の季に出るといへどもあらて風流に益あるも
なし今ここにのせざるといへども愚按るに先板の諸抄に
もとと出せる八皆附句去嫌ひの用ひんなるべし 炭俵集
附句息吹くも霍
乱の針 其角

四月

寺の南の境内往還路傍に水の辺にあるを祭る所 山科祭 上巳○仕ハ勧修
醐帝の外祖宮路氏夫婦の霊神にして勧修寺家の祖
なり寛平十年より祭はじまりて官幣ありしに今
絶て只神饌を供するのみ今土人宮路氏の社と八幡
の社と合せて本居神とし九月廿七日ごとに祭る是と
勧修寺祭といふに今の世に山科祭といふに北山科諸羽明
神祭あり九月九日祭礼あり神体に大己貴太玉の二神にして本朝補翼の神也 八瀬祭 上巳
○八王子天満宮両社の祭あり天満宮の宮に愛宕郡吏
脊の里にあり八王子の社に天満宮の異二町ばかりの山腹
にあり傳へいふ菅家少年の時比叡山法性坊の室に入て
學文をこの往来休息の處に後人社を建土人祭の日大
竹を切てその枝に五色の扇挑灯を鉤り退て離しに
ぐら持あり〳〵わらん人其唱哥俚語方言を以て異のみ

矢脊一村九百軒ばかり、父老或ひ上さる人をのいとふ又吾をさしてこげらとゐへ此俚語も亦他ふ出さるものゝ、

山崎日吉使

三日 名勝志八幡宮寺中讃岐ふ云日の使四月三日、是一郷万代の勤役なり、山崎より辨備を云く晩陰ふ及て日の使あり、相列て山寄の孤村より来る、儀式京洛の大臣ふ同じく主人冠う紫藤とうけ、舞男の巾子ふ櫻と挿し、根ふ馬ふ騎り、ゆ二度神庭を廻りて下馬せしめ一面ふ御殿ふ相對し、再拜して衣の神と刷ふ、神事記日の使ハ八幡宮寺の神事也、治暦三年まで猶勅使の義あり、同四年兵乱ふ及て退轉せ、荐畫瓦屋閑戸の院勅裁と申下し、在地の神人これと勤むべきなる間交野の土民、御先の役をゝ弥陀寺と号ス白杖を捧て鳥羽木津より出る者、年頭馬長あり、神巫舞人次第司職八月定行て色冥人笛を吹或を歩又細男とゐハ二ツの人形あり、ゐを武内高良の神ゝとゝ、此祭も今絶るゆゑ、○明月記ふ建仁二年四月三日、山寄の民家悉く経営を、毎年祭礼ありそのの道ふ橋と渡せ、橋歴大路より八幡ふ参ると見えたり、往昔此祭ふ山寄より八幡の山下まで大河ふ橋を渡せとゝ、今の橋本其遺跡なり、此使ど勤るとゝ日の頭と称し其人を日の長者と云、一郷の上首とも其裔と長者衆と云、

山寄祭

八日 摂州府志山城国離宮八幡の考ふあり、祭る所大山祇の命ゝ延喜式山城国酒解の神社一座、注ニ云ふ山寄の神と号、同書山城国と揚津国との境ふ疫神と祭るとゝ云、此社ゝ、山州名跡志天神八王神の社、大山寄北の山ふあるし、祭る所素盞烏の命の御子八王子、今土人本居神ともゝ、○俳諧歳時記今日此使ふ童使といふとあり、今式ふ日の使の所ふ記ハ誤也明月記ニ云建仁二年四月八日午剋、水無瀬殿ふ参上ス、未の剋出御、この辺の辻祭二社、天王社酒解社御前を渡さるその中一方顔る田楽ふの供奉副ふ土民ふ此事を営むゝ云ゝ、ふ土人山寄の神と、武塔天神牛頭天皇とと合して祭るわけゝ、

矢數

洛東三十三間堂蓮華王院といふいわゆる人の得長寿院の辺ゝ、同所の北の中社若と観世とも、凡此所の矢数毎年四五月永日のうち、晴天を候ひてゐすゝ、射人堂前ふ居て、今日の昏より翌日の暮ふ至て、通せ所の矢数他ふ超過し

ると天下一とす、

山苣花

和漢三才圖會 賣子木今知佐の木といふ處々山中ふかくして高きもの二三丈徑一二尺皮黛青白色老さるときハ淺褐色中心白く其葉梅嫌木の葉に似たり長く尖りて二寸ばかり面青く背淡し冬凋ず春生ず三四月花をひらく碎花にして小く、白く單瓣あり野梅の花ふ似たり朶稍長く垂る大朶と作さず但し毎二三攢生のごとく實を結ぶ狀小連子の如し初め青く後黑し堅くして肉白色 滑稽雜談 此葉菜類の苣ふ似れバ名くといふ今云く 新撰六帖 我こゝく人もまつ

らふおのゝ〳〵白雲ふかき山ちさのもとに

藪椿

女貞 山海經云泰山ふ貞木多しといふ是ふかゝ其葉拘骨及冬青ふ似て冬を凌きて凋まず五月細花を開く青白色九月實ふる 倭名抄 女貞和名太豆乃木又比加都波木 和漢三才會 女貞木の葉海石榴ふ似て鋸齒ふし故ふ姫海石榴と名くとも云ふ俗ふ是を藪椿といふ然るふ野椿の藪ふ咲ものとて初夏の頃花あるかれといふ〻んといふくるの説ハ

兼三夏物

魚簗

魚簗とゞりゝを夏ふ、上り簗と春と〻下り簗

と秋とゝゞ〻ゞもゞも連句ふて其季ふ連る時ハ上下の別りふ及ぶ三季ふ用ふと貞享式ふいへり、

五月

山田の御田扇

廿八日、是ハ伊勢山田太神宮の御田植なり、今式 太神宮の宝前ふて神事修行の扇あり是を御田扇といふ是を以て田を扇ぐ風情とゝもゝ虫を生もる患なしといふ産婦も又この扇を求て相向ふ所の柱ふ〻くるゝゞ極て産安しとゝゞ是虫の障ゝもゝいへるべし〻〻〇五月廿八日といへゞる日定られゝ下旬ふ日をえらゝて是を行ふ當日祢宜數輩御子羅子これを勤む神田ハ高倉山とて俗ふ天の岩戸といふ所の東の麓豊宮奇ふあり件の人々此所ふ至り、御子羅子早苗を植るまねびとゝゞて神人後を修ゝて太神宮の一の鳥居ふて神楽唄をうゝひ笛太鼓ふて舞ふ長官ハ乘輿、祢宜ハ騎馬御子羅子ハ薙樹ふて高倉山ともきて鳥居の所ふ至る素袍を着さる者長さ六尺ばかりの木を捧ゝ、

泰詣の諸人ふ戴らしむ又一説ふ凡山といふ所の土人六人女の形ゝまりハ伊達染の帷子と青赤き襷とゝけ烏帽子といくぐき黑釜の棒とゝり廻し扇ふてあゝぎまふ内宮外宮

そもふ同じ、もろもろども山田の名世ふ高し、其扇と模して泰
語の諸人ふ與ふ内宮八七本骨、外宮八六本骨あり、絹と貝さ
る馬の面、鯛と鈎る人形の面、或ハ鶴亀ホと画き、
あるものあり、是と長官宅ホて其日の朝典るし、

藥草

摘くの部藥日の条ふ出、**大和撫子**なの部撫子の条ふ註、**楊梅**時珍

日楊梅その形楊子の如くゆゑて、味もひ梅ふ似うり、故ふ
名く實と結ふ楷の實の如し、五月熟も、紅白紫あり、紅
ハ白に勝まり、紫ハ紅ふ勝る、**魚藥打**石と堰ホと障て魚の集と
顆大ふ〜く枝細ふ多ふし、
通るものをとり
藥の条ふ委し、

四月

松尾祭上酉 神社啓蒙

松尾の社ハ山城の国葛野郡ふあり、王都西南と去ること三里
余、祭る所の神大山咋神、廿二社註式市杵島姫也云〜公
事根源乱世以来上ノ酉ノ日云〜、祭式江次第ふ出さり、此
祭日吉の神事の如く葵らづらを掛、仁明帝美和四年
始て祭るとい、紀事神輿七基、其内一社、毎年白木と
以て新造もこと武御輿とい、祭日神幸畢て後桂川

の東ふ捨豆日児童再ひ此神輿と舁もりして後これと
砕き破ること、その木丁と取て則ふ挿ひ、これ疫とこれふ咒
ありとい、武御輿民間ふ子ボレし宮と称ふ、ふこころハ
今日再ひ遊行を、猶ふ祭ほ多てるり如し、神輿七基八月
讀の社、樂谷の社、三の宮八宗像の社、
衣手の社、四大神、御旅所、と称朱雀西ニ在、

當宗祭上酉

○河内国志紀郡當宗の社ハ仁和四年四月始て勧請ふ
公事根源午の日使ふ川社木當宗ハ程近き故ふ人の
使両社の祭のくめふ下向ま、宇多御門の御外祖父を當
宗氏ふるふまて仁和五年四月十四日、祭りとこと多行ふる
姓氏録當宗忌さハ後漢の獻帝より出、四世の孫、当陽公の後あり、

松前渡南部津輕ふの

商人産物、文昌の事ふ蝦夷松前へ渡ること、北海ふ多
春の間ハ寒氣強く波濤穏ふあらふ故ふ四月ふ、ものめて
出岸し、九月と限ふ帰国す、

天蓼和漢三才圖會

藤天蓼、接ふ
依てやうと夏ふ、とると秋ふ、
山中ふ、ひろ〜今人家ふてこと植、其蔓蒼黒く、拓及び
櫻桃の葉ふ似て皺あり、三四月ふ白花と開く、状梅花ふ

似て小し實に結ふ但し雌雄あり人これを蠟熟と取く酸味皆ふ合れて之を食ふ補常ふ言ひく食ふ、

祭 ふの部神祭の所ふ載る

五月

松本祭 朔日 淡海志 江州大津

松本村ふ神社あり祭所の神ふ野大明神也人皇二十七代仁德天皇の朝ふ難波の平野ふ接し奉るこゝふ本宮ハ往昔六七丁南の山孤谷ふあることゝ慶長中今の所ふ移る神輿一基あり今の傍ふ靖大明神と並祭る

蟲 ちくうせこ 團く扁き黑き虫豆ふこゝあり水上ふ浮旋して止まらず筑紫ふて カイモチカキ 江東の俗ゴヽイリといふ稻ふ付る虫也 獨樂 まわしゝの訛言ふ云ふ

脊純黑く腹ハ淺赤し關東ふて水スマシ又サウトメと云ふ是ふ然るふ得て水まそましハ水馬ふと思ふ草色ふ去る旬合ふ水馬の題ふ藻の花を休み所や水まはし、

ともさるあり是 まこもるる 蘇頌 水中ふ生ず菓蒲草の葉の如し川て馬ふ抹甚ず肥

蔬菜

件の取ちひくく

春の末白芽を生ず筍の如し即蔬菜也八月花と開く草の如し子と結ぶ粟ふ合て炊ふて食ふ

菽 植 廣韻 天豆ハ菽ふ小豆ハ菽ふ和漢三才圖会 天豆 大豆 夏至の十日以前種ふ下て謝ふ夏至の鳥卵ふ似ハ既ふ生出る形鳥卵の如くなれハ七月花とひらき九月莢と結び十月ときを収む

六月

蠟 和漢三才圖会 蠟蠟 一名 醯雞 列子ふ打壞の上ふ生ず雨ふ因て生じ陽を觀て死も雨推注ふ飛て磯ひくこゝを風ふ吹く春つゝとき八西ふ吹くこゝを八風吹んとするとき八旋て飛て磯ひくゞ如し一ツハ上リ一ツハ下て春つくゝ如きこゝとき八西ふ吹る云ふ形蠅ふ似て小く翅身皆灰色背窄其大さ一分ふ過ず

甜瓜 時珍曰甜瓜の系諸瓜ふ甜し故ふ稱り甘甜の称と得ふ○王禎曰二三月種て下し五六月花ひらき六七月瓜熟ス○美農國本菓郡真柔村ふ甜瓜の産出ス

七月

四月 瞿粟の 時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其穀の形瞿子の如し其米粟の如し乃ち穀ふ象て供物ともべし故ふ諸名あり秋種冬ふ生歌苗蔬ふ作して食ふ甚美し菓白苣の如く三四月薹を抽て青苞ふ結ぶ花ひらくこゝを八

苞脫も花四瓣大さ徠盞の如し蘂ハ花中ふあり鬚葉
とゝと畏ふ化開て三日即ち謝て蘂莖の頭ふあり長さ一
三寸大さ馬鬼鈴の如し上ふ蓋あり上に蕾あつ宛然と
して酒器の如し中ふ白米のこ極めて細し其花変態常
ふあらず白きこ有紅の者杏黄の者半紅の者
白の者故ふ麗春といふ又錦被花といふ
牡丹といふ

蕙 白及

和漢三才画会 蕙蘭 紫蕙黄蕙 紫蘭 紫莖 紫蘭 紫蕙 紫莖 と立て
巣と生ス秋蘭ふ似て濶く薄し色淡吉ふし
て縱理あり三四月莖の端ふ白花どひらく香ふし又黄紫の
二種あり云〻○按むるふ和俗蕙と称ふるもの白及の類ふて
葉大ふあり山中ふ生ずるもの白花黄花あり又盆ふ植て愛
せらるゝもの黄蕙星蕙あり此根菱の如く稜あり蜀本艸三白
及の属ふや白及三四月蕾と抽出て紫花と開く冬凋
む根菱ふ似て三角あり白而角頭小芽と生ス云〻和俗ハ
紫蘭と称るもの根菱ふ似ざるもの

兼三夏物

ふし黄蕙星蕙ハ蜀本草の説の如し

夏籠 夏行 安居

佛者四月十六日ゟ七月十六
日ふ至て九旬の間禁足安居

夏

既ふ夏と結夏といひ既ふ終ると解夏といふ八月十
六日ゟ十月十六日ふ至ると自恣といふ 釈氏要覽 南山
云偏ふ夏月約りにもつぱらふ無事遊行ハ出世の業
と修もつと妨ぐ二ふハ物の命と損ずるを慈ふ違くこと嘗
ふ深し三ふハ所為既ふ非故ふ世の謗を招く 五雜組
四月十五日ゟ天下の僧尼禪刹ふ就て格律もこゝと結
夏といふ又こゝと結制といふ蓋し長報の辰ふ方て外ふ
出てハ恐らくハ草木虫蟻と傷らん故ふ九十日安居業
足あり七月十五日ふ至て始て盡く散し去ることを解夏と
いふ西域記ふ十六日ふ作と夏ゝて結夏十六日と以て始
まるハ印度の法ゟ中国ハ八月の晦と以て一月ゝ手天竺
ハ八月の滿ると以て一月ゝも則中国の十六日乃ち印度の
朔日也○安居 秋氏要覽 南山抄云形心静振
と安しのい要期ゝふ任ずると居しの八云云

夏

夏書 夏經 夏花

夏行ハ安居也安居ハ土家
修行の暇と得て私ふ住と
故ふ安居の間他の化益と專らふ勤て三界萬霊ふ四向
等もるゝ一夏九旬ゝハ十日と旬ゝ九十日ゟ九旬

といへ在家と志ある輩ハ夏と倦し九旬の間飲酒魚肉と断ることと夏断といへ經文と讀誦することと夏經といへ、こゝとと書写することと夏書といへ先祖の聖霊有縁無縁の菩提の為ふする也云云、

五月 削

懸の甲

【寰纏輪】けづりしけハ柳と以てこれと作る元日祇園の前掛と標格として甲のかさしこれと是邪気と祓ふ神咒なりとぞ云云の部飾甲の糸と見合もべし、

競渡

【鳥車 水馬】

【月令廣義】楚傳ニ曰競渡ハ越王勾踐ふ起る【歳時記】五月五日の競渡ハ屈原を極くんとする也、【荆楚歳時記】屈原ニこの日と以て汨羅ふ死ス人舟と以てこれと極ハ今の競渡ハ是其遺俗也、南方競渡のもの其舟と沿めて輕利ふらしむるもと【飛鳥】とハ又水車水馬ハ将父老土人悉く水ふ臨てこれと見る蓋越人舟と以て車とし檝と以て馬とす故ふ鳥車水馬の名あり【和漢三才圖会】唐人来ず長寄ふ富居して此日ふ達ときハ數艘の小舟ふ乗旗幟と立て先と爭ハ排龍々々ハ奥きいハ速あるものと以て勝とす是競渡ハ蓋屈原の為ふ龍と逐ハ

の意ハ、

梟羹 梟炙

【漢史】五月五日梟の羹と作こ百官ふ賜ふ其悪鳥の故ふ五月五日これと食ふ古ハ梟の羹と作こ百官ふ賜ふ其悪梟の炙と重じ蓋其族類と減せんと欲ス

獸狩

部貍狩の条ふ出、

六月 解齋御粥

【江次第】六月十二月中ノ卯後暁【公事根源】神今食の次の日ノことけさいの御ハ四月ある御座の大床子ふて墨盤一脚とをて供ス

三月十一日後朔

あるきとらけふかる和布の御汁とそへこれ三口食て御箸とこれ云云神今食ての後齋ある八中こへのことふ、解齋の御ハ四月ある御座の大床子ふて墨盤一脚とをて供ス

毛蟲

【陳藏器】曰毛虫繭と作ふ形蠶の如し故

神齋ある八ハ、ものとあり、

小雀蠶と名く好て果樹の上ふあり大小とも小蠶の如し身面背上五色の斑毛あり毒あり刺螫老人と欲るもの口中ハり白汁と吐凝聚て硬く正小雀の卵の如し其実蠶と以て繭ハ中ふあり蛹と成ス蠶の繭ハ如し夏月羽化て出て蛾とスる、

削氷

【枕草紙】あてなるものハ子と葉の間ふ放ス蠶子の如し、削氷

ゆまつりふ入ておさいしきかまりふ入こゝ五、
○水室の水をけづりくごきたるをいふなり、

月 佛生會 八日 浴佛 灌佛 龍華会 花西堂 甘水 御の産湯 五香水

○九諸寺院灌佛会と修し諸品の花を以て小堂を飾る、是を花御堂といふ、其内に小さき釈迦の像を安置し甘草水の香水を灌ぐ是を甘茶と云 事文類聚佛運統記 周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺国、浄飯王の妃摩耶氏太子悉達多を生ず 浴佛功德經 唐浄慧菩薩佛ふ曰して言く世尊若佛在世及ひ滅渡未来世の中、諸の衆生、云何う佛を浴せん佛言く我汝の為ふ浴佛の法を説ん諸の供養の中、最殊勝なる衆の香湯を為り、浄器の中ふ置き、先方壇を作りて、妙牀座を敷き、上ふ佛を置き、諸の香湯を以て次第ふそそぎ浴し香水を用ひ畢て復浄水を以て其像を淋洗し人各洗像の水を少しづゝ取て自らの頭上ふ置く、初像上ふ水を淋ぐの時ふ此偈を誦して云、我今諸の如来を灌浴す浄智功德荘厳五濁の衆生垢を離れんことを願くハ如来の浄法身を證せん云云 ○龍華会 弥勒下生成仏經 時ふ菩提樹あり名て龍華と云慈氏 弥勒 慈氏 とりふ大悲尊下ふおいて正覚を成ト云云是ハ龍華樹とりふ木の下少て弥勒始て正覚とるを以給ひ此處ふ三度説法の会あり是を龍華の三会といふなり、四月八日ハ釈迦降誕の日なれバ釈尊を浴し奉り、当来弥勒ふ逢奉る結縁ともなれバ四月八日をもくふ龍華会とりふ

深見草 牡丹の異名 和名抄 和名布加美艸、 富貴艸

周茂叔愛蓮説 牡丹花富貴者也 書言故事 多く富貴の家彫欄丹檻の中ふあり故ふ花富貴ふる者とこりふ、

不如歸 ほとゝぎす 松物論 啼き苦むとき ハ樹ふ懸りて、謝豹思歸樂とよぶ、その音不如歸と云、

蕗 崔禹錫食經 蕗葵ふ似て 兼三夏 圓く廣く其莖嚼ふべし、

物風爐茶 茶湯聚傳抄 四月朔日ハ更衣しとゝろづ夏ゝまへそる日ゝ三月まて風爐裏の茶を服し爐とふさぎけふより風爐と立て茶を煎ふ數奇屋の窓障子もゝ簾ふくよろゝ涼しくなまて

客ともてなす物心じて瓜爐の茶ハ朝茶湯多し、蘭ハ
書とかるとき、瓜爐ハ奈良瓜爐と多く用ふるなり、

毛吹草 當の俗稲四月 **蚋** 和漢三才画会 蚋子 蚋蟆子
より九月まで用ふ 俗ふのハ布止 夏月山谷中ハ
あハ蚊ハ似て小く脚とまゝこ黒色書
多く出て人と螢腫痛むこと最烈し、 **蚊子木蚊**

毋草蚊母鳥 五雜組 嶺南ハ蚊子木あり葉
冬青の如し賞枇杷の如し熟
るときハ蚊ハ塞北ハ蚊母草あり葉の中ハ血虫ハり
化して蚊とあり江東ハ蚊母鳥あり蚊と吐こと二升三五

滑稽雜談 和俗蚊母鳥と呼て花ハ鳥
とハ今聞ハ都々都々し啼ものあり、 **海蘿干**

和漢三才画会 鹿角菜 和名抄太 李草ハ東南の海山 石厘
の間ハ三四寸鐵線の如く鹿角の狀の如し紫黄色土人采
て曝し貨海錯とし水と以て洗ひ醋ハ拌まぜれハ脹起
して新しきかれ如し味極て滑ふ美也若久しく浸も
ときハ化して膠の狀の如し女人以て **五月鳥車**
鬢と梳るハ粘あるとて乱まじ云云

けの部競渡の条ハ出、 **粉團を射** 天皇遺事 唐の宮中端午
金盤中ハ釘を纖妙愛をべし乃チ小角弓と以て是と
射る、粉團ハあるるものハ食ふことを得蓋粉團滑膩ゆし
て射ぐこし都中盛ハ此戲とあるも、 歳時雜書 端午ハ水
團と造る又白團と名く或ハ五色の人獸花果の狀と雜人
最精しきものハ滴粉團と名く或ハ麝
香と加ふ又乾團水ハ入ざるる者あるも、

藤の森祭

五日 神社啓蒙 山城の国紀伊郡深草山の南ハあり祭る
所舎人親王○延喜式ハ載る所の真幡寸の神社
二座是こ別雷神 真書神 後ハ三所の皇子を合せ祭る三所の皇
子とハ早良親王伊豫親王井上親王又祭る所三座舎人親
王早良親王伊豫親王 紀事 是日神輿三基遊行社家藤
野井氏甲冑を着し馬ハ乘て供奉を帰路れのく稚
荷の社樓門の西並ニ藤の杜の馬場ハ於て走馬を祈願
ある所の人あるこハ多くこと又おのく甲冑を着し馬ハ乘
て馳駈をること前ハ同じ一説ハ藤の杜ハ早良親王を祭ハ
弓矢神と称ハ今日供奉の人甲冑と着をるとこ是蒙古

征伐早良親王歸陳の魂いこ供奉甲冑を著そるて此神事ふ始る、

富士垢離

紀事 五月廿五日より六月二日ふ至て富士の行人毎日河辺ふ出て垢離とゝ富士權現と遥拜ゝて是富士垢離ふおゐてしとゝ云ふその間男女行人どゝのゝ病と祈福を索む行人をのゝ〻る処の紙符を願主ふさづゝく又祈願の人どゝ行人ふ交ゝて垢離と修ゝ酌長と先達と称ゝ其会ゝる処と富士小屋と称ゝ

藤撫

子 その部撫子の条ふ出、

六月

富士詣

紀事 六月朔日より廿日ふ至ゝて諸国の民人富士山ふ攀登るもの其方角ふより四道あり駿遠豆甲是ふより山ふ

始離ふ及びそ他邦より来るかれも近江の上湖と称て
山上ふ登るとき近江の人ふ准じて平安と得るとの八[縁起]
延暦二十四年託曰我と浅間大神と号しもと平城天皇大
銅元年杜と立て是と祭る水地大日如来八[神社啓蒙]
間の社八駿河國不盡郡ふ有り[二宮記]
權現と号し大山祇を木花開耶姫あり[三五]

宿草為螢

[月令]季夏腐草為螢[三五]熱元暑
濕の氣と得るを故ふ蠏ふ[三五]

舟遊暑を避ん

為ふ此遊びとなる江戸大坂の者妓女及雇人と
乗へ日午こう舟と迂曲ふ信ふ[三の舞]最急あり

風蘭

[香雅類書]一名挂蘭名花譜曰小中して蘭ふ似さう枝
幹短くして動し砂土と用ひそ所の蘭ふ取てられと貯へ
露ある処ふ懸て朝夕水と洒ぐと[三五]此物山石の傍ふ
生も取来て梭擱の皮と以てうれと包ことをもと樹丁及
び窯の丁ふ掛く凡と好て茂盛を故ふ風蘭と名く花
葉薗ふ似て軟韌ふ垂る五六月花と開く微香あり

振舞水

夏日市井の間ふ瓶とやうしてこれふ茶碗ふと添往還炎暑ふ苦しむ人とし
てこれと飲しむ是と振舞水の一ト向通、其角

月更衣

[公事根源]けふハ衣ぞへあれど宮中諸の
御装束掃部寮あらそ御殿のかさひ
ら表生絹ふ胡粉ふて繪とかく壁代くふ撮も御置ふ
どもあらしきと敷ふ御服八御直衣御そうしの
あやの御ひとへ御張袴内藏寮ふ奉る女房のきぬ
袷のきぬとも衣ぞへのむとへらと衣まぶしこ裏八上薄
薄裏ふ上蘇薄色常の如し、

氷と供

[延喜式]主水式云九御
氷と供もる八四月一日ふ起
て、九月三十日ふ盡云云氷と貢く處々同書云山城國
葛野郡、穴太の氷室愛宕郡小野の氷室栗栖野の氷
室土坂の氷室、堅木原の氷室、同郡石前の氷室大和國山の
辺の郡都介の氷室河内國讃良郡賀茂の氷室近江國
志賀郡、都花の氷室、丹波國桑田
郡池辺の氷室、此十ヶ所ふ有り云云

江州八幡祭

[神社啓蒙]法華ふ拳八幡宮八淡海国蒲生郡八幡村ふ
ひ祭る所の神石清水ふ同じ[社記]一条院の御宇勧請

長徳二年放生会と行はる【寺號】慶長年中関白秀次公、この法花ゥ峯ゥ城郭と構ふる時上の宮を遷し下の宮ゥ合せ祭る其後

御當家御陣所となる其時今の杉山ゥ移さる別當顧慮就寺往古聖德太子開基の寺院江州ゥ四十八ヶ所あり其四十八の終りゥ此寺と定給へ故ゥ願成就寺の名付く神社の傍ゥあり普門院と云ふ成就寺兼帯ゥ十二ヶ八坊舎五十五ヶ寺あり織田信長の兵火ゥ遭ひ悉く滅亡ス氏子七十二ヶ村外ゥ新郷ゥ舟木上田林の三ヶ村を加ふ例祭四月中の卯夜宮ゥ躍あり上の宮祭両日下の宮祭両日その中間一日と御旅祭と云ふ花表と擂門との間ゥ於て九十三間の炬火を立高さ六七間ぐらい七度半の使を合図ゥ炬火ゥ火を點じ村々の祭太鼓を一二回の炬火と點じ三社の児三人と舞殿ゥ座せしめその児どもの太鼓ゥ合せ舞殿の辺ゥ至て拍子躍あり エイヤサヤヤと拍子【紀事】八幡祭の神輿五基越智川を渡る、

五香水 ゥの部佛生会の条ニ出、高野花供 廿日【元亨釈書】弘仁年中紀州

ゥ遊びて勝地と相る、高野山ゥ登りて金剛峯寺と創む【紀伊国伊都郡高野の峯ゥおいて八定の所ゥ又曰釈観賢の歴三職】と云ふ表性灵集ゥ見え聖宝の上足ゥあり延喜二十一年醍醐帝の夢中ゥ弘法大師奏して曰我衣鉢まゝ朽ぬる願くハ泰くせんと宣ふ ゥありて釈法の徒尤き者ゥ勅して紫衣一襲と野山ゥ送る観賢懸ゥ中て山ゥ入り八定の窟と啓くゥ雲霧隔るゥ如くして儀容と着て観賢礼して曰少年よて道と修し梵行玷ゥ況て遺法と奉じ歳月と累ぬる ゥおいて之と默許すると須臾ゥして真儀漸く見ゥる霧歛て月の彰るゥ如し観賢頂礼して仰き瞻る ゥ髮甚ゥ長ず便ち剃り落して衣と換ゥ諸衆ゥ之と見るとあさまず後世疑謗致さんと宣て観賢遅議して石と重し固く封ス○今高野山宝亀院の住持代々此事と預る八葉色の御衣と奉る是と花供と云ハ金堂ゥて学侶方の僧衆師会と行ひ花を供まるの日と大師の御衣ゥ掛る日と同日のゆゑなり 駒牽【公事根源】見八四月ゥ侍るゥ八月も名ハ同じけれど心ハ異なり天皇武徳殿ゥ幸せ王卿以下床子ゥつく左右の御監御馬の奏

と仰る、馬の頭庭ふ渡り御馬ニ引渡セ、白馬の節会の如ク、近衛兵衛の射手南ふやり、四府騎射の丈と奏た右の大将ニと奏聞セ、近衛少将以下番長以上六人東遊ひと奏セ右近衛納曽利狛犬と奏セ、雅楽蘇芳菲駒形と奏セ、この駒牽ハ来月の騎射の馬、射手人ホと御覧ぜらるゝ、貞観の頃よりもゝらるふの月の時ハ二十七日、大の月の時ハ二十八日ふ

木下闇 茂林ニて暗きとゝふ万葉ニ行くゝ之五し 木の暁ところ、木晩の暮闇有

尓霍公鳥何処乎 柚金柑蜜柑ニて其頭假字の部

家登鳴渡良之

柑類の花

ふて見るべし、

鮠 和名抄 鮠和名甲雀禹錫食経 鮠魚性伏沈して石間ふ在りのく 遊覧志 石首魚

毎歳四月海洋より来る、数里と綿直して其声雷の如し海人竹筒ニ以て水底ニ探ニし其声ニ聞乃細ニ下し流ニ截てこ

戀し鳥 ほとゝきすの異名ゝ

ヨと取るふゝ

拾遺 伊勢の御うゝ

奉ニとゝるみ子のゝくゝるて又の年ほとゝきすと聞て

ふその山ゝえてきゝらんかゝぎすと戀しきゝ人のゝ

らゝ此哥より意し鳥と異名せしゝゝ

五月 **五絲絲** ちの部 長命縷の条ふ出、

今年竹 若竹 時珍曰土中の包筆各時を以て出旬日籜とおゝて竹ゝゝゝ云云是即今年竹若竹ゝり、六十年ふ一ゝひ花咲實と結ふ其竹則枯ゝを綺ゝゝ竹資ゝ結ふを籜ゝふゝを篠ゝふゝを篠ゝ、

苺の花 本草綱目 地長草 大明日華本艸曰大ゝゝを蕩ゝふゝ、此乃陰濕の地日ふ晒ゝて起る苔蘚ゝ石蕊時珍曰其狀花蕊の如し、○王柏 弘陶別録 石上ふ生ス松の如し、高さ五六寸花紫ゝり、○桑花 日華本艸 桑の樹の上ふ生する白鮮也、地錢花の如し、○本邦ふも赤屋上庭園石上樹上ふ多く苔と生す、五月淋雨降時毎ふ繁茂して花の狀の如きものを生ず、倭名これと苔の花ゝふ、

胡麻蒔 和漢三才圖会 胡麻三色ありとゝふ夏至半夏生の交ひふ種を下し、六月花と開く、七月實熟ス、最早晩の二種あり、

六月 **氷餅祝** 毛吹草 勝尾寺の氷餅

滑稽雜談 和俗今日一ヵ日至アテ、雁鱠雪水ヲ製ス、粉餅或ハ勝尾或ハ富士山ヨリ出る氷餅ヲ祝ひ食して、今日を呼て氷室の節句と云、

御射の御ト

十日

江次第 御射の御ト六月十二月十日、此日官奏ある分らあり 弘仁式 神祇官中臣ト部ヲ率て、六月十二月一日齋ヒ、十日ト、九日ト、畢て、十日ニ至ル、と奏す、

公事根源 神祇官の官人一日より本官ヲこのりて是をトふ上卿ハ、まわりて、内侍ヲつきて奏聞す、是ハ主上の玉躰ヲ御つゝしあらんことをうらなひ奏する義なり、白鳳四年ヲ、ものてゝ、ものこと、と、ト、ふ、九日ト、畢て、十日ニ至ル、

黄雀風

五雜組 六月中ノ東南の風あるを、是を黄雀風といふ、梁元帝詩云、季夏煩暑流金爍石、

極暑者

香薷

宗奭曰圖ヲ作

薷散

時珍曰香薷ハ夏月解表の藥、冬月の麻黄を用ふるが如し、氣虛の者尤多く服まべからず、今人香薷の元氣を傷ることを、有病無病ヲ他らを驟用て藥ヲ代て謂らく、よく暑を避くと云云、○五元集 香薷散犬角

心太

香薷ハ、其角アて香薷と種、暑月蔬菜ともに、葉ハ菌藻ヲ似ル、花紫ヲ、て、四ヲ連て、穂をなす、ところてんあり、との部ニ、るべし、

江

四月

えびす草

芍藥の異名あり 御傘 梶原性善が方ニ女方ホとゝ云ふ、えびを藥と名付ル云云 和名抄 芍藥 和名衣須久須利 えびす草ハ、えくもりの誤べし

烏帽子魚

豆相の海辺、鰹先寄らんとするとき、一物流れ来る、大さ二尺ばかり、形烏帽子ヲ似て、左右ヲ紐の如き物あり、その色瑠璃紺ヲして光澤あり、是を鰹の志ほしるしとゝ、漁者この物の漂流をまを期として海上ヲ櫓を搖へ、鰹の寄るを見る、是を鰹見とゝ、西三日をぎて、黙して大ヲ鰹を獲ることを、烏帽子魚と名ることゝ、

蚕簿

和漢三才圖会 蚕笛和名衣皆良 ヲ、あれ、蚕簿ハ蚕簿と架を柱ヲ、あり、蚕簿ハ

兼名苑云蚕と養ふ器〻其上ふ施〻薦と作らしめる者し、**枝蛙**あの部西蛙の条ふ見し、

五月

豌豆 和漢三才画会 花瓣蛾の如し形外白く内ふ淡紫あり、中心黒色其莢褐色、六月是と収め取る、

六月

江戸浅間祭 朔日○江戸浅間の社八浅草砂利場の後ふ居り、是と浅草の冨士と云又駒込あり、是及高田の馬場又鉄炮洲ホ共ふも同社あり、祭る所どづれも駿河ふおわ〻、今日麥藁ふて龍蛇と作り、是と篠ふつけて鬻くもれ多し、参詣の人是と買ひて土産とす、

江戸天王祭 相傳ふ元禄のもしめ大ふ流疫ひ、よりて官ふ請奉りて、神田明神の社地ふ勧請ある處の、祇園三社の神輿と出して街ふ渡御し奉るこゝより後毎年祇園会と修す、先大傳馬町御旅所、神輿一基五日出輿、八日還輿、小舩町御旅所、神輿一基十日出輿、十二日還輿、南傳馬町御旅所、神輿一基七日出輿、十四日還輿あり、いづれも神輿還幸の時ふのもよりの町〻と渡御、社人將軍東馬上ゆく、

供奉鉾三本氏子是ふ随ふ、神輿渡御の町〻八一日廃務也、或八門ふ竹を植る家あり是忌竹の意なるべし、其外浅草御蔵前、千住、品川、四ツ谷ホ共も此祭あり中ふも品川の神輿八海汀と渡御も天王祭と八牛頭天王の祭とのふ義、祇園会とゆゑもして、天王祭とふ八江戸の俗の方言あり、

江戸山王祭 十五日

○神社江戸永田馬場ふあり、祭る所近江日吉の神と同じ、別當勧理院僧正、神主樹下采女正、その外社家數多あり、乃官より神領六百石を附せらる、當社ハ〻八入間郡川越仙波とふ所ふ居り、その地仙臺仙人の住せし古跡ありしと、慈覚大師草創ありて、星野山無量寺と号し、天台の天地として山王と勧請あるこの後尊海僧正中興し、三十余院甍をならべ、こゝり人皇百三代後花園院長禄三年、太田道灌江戸の城と築くの後、文明年中、仙波村星野山の山王と勧請して、江戸の城護神とまもその地今の紅葉山ありとふ、御當家御在城とあ〻くまふあらして、城西の貝塚ふ移さる明暦回禄の後ふさらび溜池の上ふつきる是今の社地まゝ〻、江戸貴一の大社神殿巍〻〻〻として、石の鳥居五十三間の

石階松柏枝とつら為て上久くり、祭礼六月十五日官祭、神田明神と隔年に行る凡祭祀に預るの町、南は芝と限り、西は龍町、飯田町と限る、東は傳馬町濱町辺と限る、北は内神田を限りとす、神輿三基、祭礼の番組四十余番各花ごし山鉾の一本練物に出て、神輿渡御の町々は宵宮より桟敷を設へ、幕を張毛氈を鋪つらね、軒に多くの提灯を釣る、十五日の未明先榊渡る、太鼓是に添ふ、其次蔵の造り物ある引山その次諫鼓に鶏の引山ありて、其外の番組は例年の定なり、此祭に龍町より、朝鮮人来朝の形に出立ち、布を造りて大なる象の練物を出す、これを止らる、神幸の道本山と出て、永田馬場より御堀端と歴て、紙町御門に入上覧所を渡り、竹橋より神田橋、鎧倉河岸を過、今は竹橋と出る、本町壹町目に出、本石町三町目、小傳馬町、大傳馬町、旅籠町に渡る、傘鉾大吹貫幟屋臺、引山甲冑の法師に、あり、氏子に預る處の諸侯も、又警固の武士とくぐし、長柄鑓とをつらねて群行す、其場町薬師堂、山王別當の別院なり、の境内に、神餐を献じ畢りて、八ツ過日本橋筋を中橋へ、なり、夫より本山に還幸也、

炎天 極暑

の天と

て

四月

手安天神祭 午の日

○江州野洲郡江辺の庄に、あり、永原村、北村、三ヶ村の氏神、鎮座年月詳ならず、明和年中まで、に七百余年に、なりとい、又永保年中とも、い、四百年以前、延久五子年十月十六日、永原越前守再建、その後應永廿六亥年六月、永原越前守雅行修補、又明應七年四月十四日、同氏重秀、改め造る、この重秀も越前守に任じ、世八万石余領、京極佐々木の同流にて、永原に住、依て本居神とも、四月十一の日祭礼、神輿二基渡御あり、例祭正月十日より、十三日まで、連三の千句興行あり、巻頭は時の地頭の句を、定例とも、此所北村李時、出生の地あり、又平清盛の妾妓王も此地に出生、故に平家に奉行、判物の大繪図、氏子三ヶ村に傳来、そと、別當寶光坊の説、とも、祭式未詳、

繡毬花 和漢三才會

粉團木の高さ五七尺、葉は箱根湯桶に似、開く、皺文あり、四月花をひらく、初は淡青色、後正白、こうぶき花、攢簇て團さ二三寸、一種に粉團、とてあり、木の高さ四五尺、葉狹く長し、棣棠の葉に似て、粉團に似て、小く白し、太さ半

むかうと
もぎ

五月

天中節

提要抄 五月五日午の刻を天中の節とも、

師と畫

の部 艾虎の条こゝ見へし、

天南星

藥頌 綱經 天南星 八処々の平澤ふあつ、三月苗を生ず、荷挿ふ似て其莖高さ一尺以来、葉蒟蒻の如く、両岐相抱く、五月花を開く、蛇頭ふ似くり、黄色、七月實と結び、穂とゝもに、石榴の子ふ似くり、紅色○時珍曰一名虎掌、葉の形こゝとふ似くるふ因てあり、南星とい根圓く白く、形老人星の如くある故ふ南星と名く、云云 和名抄 虎掌 和名於保乃曽美

鐵線花

和漢三才圖会

鐵線花、按るふ苗宿根より生ず、一極ふ三葉、微ちゝ樂の秧ふ似てふく、莖細く韌甚勁し、故ふ鉄線といふ、俗称く蔓無く、其葉架ふ倚て繁衍四月花を開く、蔓の下ふ六葉あつて、蔓を抱く、赤一異てあり、其花白色六の瓣平ふ開て、蘂四く紫色最艶美其蘂綻ばゞ天蠶糸を紡て總とおもふ似て、其ゝとふ子あり○千葉鐵線ハ外六の瓣也して白色常の如し、内の瓣もまゝ白色、千葉短く細く頓ひてゝ、ひらく、青き蘂あり、外の瓣既ふ落ちゝバ内の蘂ゆらく、

六月

天滿御祓

廿五日 ○當社ハ摂津 大坂西成郡天満ふあり、祭る所の神天満天神 摂陽群談 社家説ふ曰、天満宮の權輿ハ人皇六十二代村上天皇の御宇、天暦年中この地い（る太多ノ松原）ふ於て一夜ふ松茂生すその梢ふ昊光赫々たること怪こて、帝都ふ告て奏聞を遂く、帝即日勅使を下しこゝ時ふ神託あつて云、難波の梅を尋ひ築紫よりこゝふ来る、と驚たこ覺てその由を奏を、依て菅霊を此地ふ鎮りる云云○例祭六月廿五日遷物車楽ふ、水陸ともふ渡て、神輿夷の御旅所ふ出、往還川舟ふて數万の提灯群集遊船多し

天貺節

書言故事 令要云、宋の真宗祥符四年、詔て六月六日を天貺の節とす、

四月

袷

文選 秋興賦 卿袷衣 袷衣無絮 ○九四月朔日ふ更衣こゝ此日より袷を用ひ端午ふ至て布袴と用ふ、

網鳥

と網を取て明年の夏鳴せんと云心云、

青簾

青葉の簾 蘆 藻塩草 是ハ時鳥と紐を

翡翠の簾 竹ふて、四月朔日新しき竹を

くるまりとゝ一説ふ加茂の葵を四月朔日翠笠ふ
うけらゝ故青葉の笠をいふゝ一説ふ夏山の翠あるを
いふゝ○青藍云元禄年間の句ふ「客ハ誰乳母の所ふ
青笠ぞこゝ」とゝたゞひの作例あまこゝ多ゝ天ゝ和の御笠ノ
とのゝいふゝいへる説いとゞめり、

扇と賜、扇の拜

かの部 孟夏旬と見る条ニ

見る

甘水

ふの部 仏生会の条ニ見べし

葵祭 葵蔓

かの部 加茂祭の条下

雨蛙

枝蛙 和漢三才画会 背青くして腹白し大なるもの寸半に過ぎず雨ふらんとするとき鳴故ふ雨蛙と名く 大和本草 土鴨雨蛙とふ最も小なり色青く木の枝ふすむ云是枝蛙あとなり、

青ぞし

枕草紙 五月五日のあやめ葺くしてふものを人のもて来ると青きうすゆうと艶あるまでりのふふ敷て、これまぜこしふふ久ぶそてまゐらせるとバ云云吟云青ざしハ青蓼也

蜀葵

草葵 タチ葵 些二名亦蜀葵とのふゝ○特珍曰朝しくる菓子なり、

春の初め子と種冬月まゝおのつゝら苗を生ず敷ある時茹ふべし五六尺ゆして花さく木槿ふ以て大きく深紅浅紅紫黒白色單葉や千葉の異ありなり、

兼三夏物

扇

五雜 俎 大明以前摺扇あ〜多く團扇と用ふ○扇車扇引扇すまひ以上増山の井ふ出ゝつゝとゝ云枕草紙ニのゝそ尽りゝ云河海云蝙蝠と見て扇を作ゝとあゝく依て夏の扇の名物ゝ

汗袗

袖の端あらぎゝ 昭潭志 立山縣の里婦縷績ふ長せゝとく竹と以て袗と為ゝ暑服ふ充ッ袗ハ小襦ゝ○按ぞるふ和俗ふいふ襦袢管襦袢のあぐひあるべし

汗巾

長サ一二尺の布の両端と縫ひ入れて用ふ

暑

山堂考索 陽事と用ふる時ハ則日進で北ふ入れ食進て長し陽勝る故ふ湿とあり暑と為る、

編笠

和漢三才画会 臺笠 今苧と編て丸と作る竹の骨と用ひぞ呼て編笠といふ以て暑を禦ぐべし、

洗

鱸

和俗夏月其肉と魚軒ふ作ゝ洗ひ筝ふ鼓酒ふ侵しゝ食ふとと洗ひ筝とのふ、

青

鶺 和漢三才畜会 倉鶺 和名美止乃比 言こゝろハ緑の下畧 蒼鶺、鶺ふ似て小く、色蒼黒し、以上和名抄 今蒼鶺と称る者 鶺ふ似て大く、頭翅皆蒼黒項冠も亦同色、頭上胸ふ至て黒毛斑々こ、翅の端正黒、背の外黒く内黄、腹白く、脚緑あり、毎に水辺と歩こて魚と食ふ、飛ぶときこハ高く挙て遠く翔る、この内最美、夏月ゑとと賞ず、

安居 けの部夏竜 ゑを、

青山椒 和漢三才畜会 本草に秦椒蜀椒の二種ありて、秦椒ハ其葉製生尖て刺あり、四月細花と生じ、五月實と結ふ生ハ青く熟ハ紅あり、蜀椒ハ釘の如き刺あり、葉硬くして滑あり、四月實と結ぶ花ハ小く、但枝の間ふ生ず、其實しまゞ紅熟せざるうちと青山椒と時珍曰、灰藿四月苗と生ず、蔬ふ可、

藜 灰藿の紅心あるものゝ莖葉稍大なるもの、嫩きときハ羹ふ作し、老るときハ杖ふ作る、

鮎 若鮎小鮎とも、

べしこゝろとせん藜の杖ふあるを、春ふ入て、たゞ鮎とむらゝバ夏

五月 菖蒲と

獻 和漢三才畜会 仁徳天皇三十九年辛亥五月始て記 菖蒲と献ず 続日本紀 聖武天皇天平十九年 青天皇南苑ふ御して騎射走馬と観ず是日太上天皇詔して曰、昔ハ五日の節、常ふ菖蒲と用ひて縵とまこのゝ此事やゝ久今ようして後、菖蒲掛ざる者ハ宮中ふ入ことなかれと、云云

菖蒲の鹽 公事根源 六府あやめの輿と南殿の階の東西ゝ、四日ハ朝餉の庭ふ是とゝゝ、主殿寮呼ゝふ菖蒲ふく、○菖蒲の御輿の料ハ、梅ゝ畑ゝ、供奉人今出川家ふ納む、即衛士ふ遣し衛士ゝとと作る、其法根菖蒲と連ねて棟梁ゝ、細木と以て柱ゝ、西ち小殿の形と作て、檜の葉並ニ菖蒲と以殿宇と菅、衛士禁裏ふ献ゝ、

菖蒲 時珍曰、菖蒲ハ蒲の類の昌盛ゝるものゝ故ふ菖蒲と名く、和漢三才畜会 菖蒲屋の檐ふふくものゝ或ハ件の日、菖蒲ふ浴し、或ハ石菖の根と以酒ふ漬し、ゝとと飲バ邪氣と懐ふと、云云

菖蒲人形 此人形ハ力士の形と模して作る、多くハ江戸ふて元禄のころまでハ市中と賣ありきゝふ、 夏懐集 端午の部

ふ「五月雨や傘よりくるる小人形」其角とあり、

菖蒲

今八十軒店尾張町其外便りよりまき街そ是を責と

ひく沼沢江池そこふ下ったちて引心を寄みそめり○或

引こと草末との露も五月雨ふまきる水野のあやめの

ひくあり

菖蒲の鬘

菖蒲と軟とそる

菖蒲

資任

菖蒲の案

延喜式曲菓寮式云五月五日菖蒲生菰黒木

の案四脚各六両黒蒔四竹を進る省輔以下

寮頭とも共執るく進み訖て退出て輔曲でそこれと奏すと

即退出て輔曲でそこれと奏すと

菖蒲の枕

緑谷遺稿

やのくそひと夜ぐりそこの枕ぐふむすひもこそ夢のこと

かと前中納言雅具後水尾院當時年中行事あやめの枕

ふつむ一對少人御枕をそあり、うすやうは極薄調進を御

枕は匂當の内侍ようのさすく其様あやめと九寸五六すど

かりふ切て五すむくふあとさきと紙ひ

ねりふて結ひて両方の小口ふさ〜をそむ云

菖蒲湯

同年中行事五月五日の条云げはさくふの御湯まゐる

ちべのこくぶの御枕一對とうすやうれつしあらら竜脳紙

ひねりを引ときそ御湯ふ入る大戴礼五月五日蔵と

菖蒲

多くを人沐浴とを云是菖蒲と以菊の菓ふ代るあり

菖蒲の占

三潮草女兒の戯とあやめを結ひ唱へ

かふと軒のあやめを結ひ唱へ

の糸」如此りひて一事と祈る願ふ所成るもの

菖蒲浴

ハ蜘蛛あ同て網を菖蒲のう〜ふ曳く云云

菖蒲浴衣

京師の俗端午ふ菖蒲浴衣同帷子と異ふるこ必

家々ふあること官家ふハ菖蒲重こ朝服あり花

田萌黄のう〜根菖蒲とふ〜麦白裏紅又濃衣とて表

紫裏薄藤又菖蒲重紅梅と用ふ〜ちし〜あれど五月五

日着ふる処の常の浴衣帷子と菖蒲浴衣

菖蒲酒

菖蒲帷子とり〜のこて當季の色と用ふ非ず

荆楚歳時記端午ふ菖蒲の山の洞中ふ生る一寸九節

の者と以て或ハ鏤り或ハ屠りて酒ふ浸め以瘟疫と辟

く本草石菖蒲一切の悪と除く端午の日菖蒲と

切て酒ふ漬てこと飲む或ハ雄黄と少しづつ加へ

棟と佩

棟葺

證類本草五月五日浴人棟の葉と取

てこと佩ふハ悪氣と逐ふ○時

珍曰楷ぞろふ羅願尓雅翼ふ云楝の果を以て物を練ぶ故ふこれと楝と名く其子小鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴と名く形と象るゝ 増山の井 今も片田舎ゆゑ端午にあくちの葉と菖ふ多く所侍り今せんだんの木といふものを是ふ

有無日 廿五日 公事根源 これハ村上天皇の御宇忌ゝ宮中ふあるべしの日と也 田ふ農務日にいらるゝ事ども政おこなはるゝと侍らむ又急事なるゝ

楝の花 蘇頌曰楝木の高き丈餘巢密ゆゑ槐の如く長し三四月開花花紅紫色芳香庭ニ満つし 花彙 石茱萸その樹高大數抱ふ及ぶ葉厚く光り夏月花者枝ふ満つ色淡紫觀るふ堪くう一朶數萼數百群ともに頗る芬芳あり長き實と結ぶ桃葉珊瑚の如し一穂數十顆枝の間ふ垂糸す生ハ青く熟ハ黄色味甘し種田さ實の者味苦し 川練子是ふ日本古来罪人と梟首ふ此木と用ふ故ふ他材ふ用ふ事ふ俗誤て旃檀と云ふ旃檀ハ檀香ゝ又樗の字と用ふ 枕草紙 木のさまハ人ふ似たるゝ

うかの つぼ 五月五日

紫陽花 四絶花 韻語陽秋 唐の白賢手ふ山花あく色紫氣香〳〵穠麗愛ぶべし人其名を知る者ふし白樂天ふあるとを過て標となる其名と紫陽とゝ 和漢三才會 其莖叢生も莖葉綉毬の葉ふ似て五月花をひらく云 此花もまくてまゝとの花ふ似て淡碧色一名四葩の花 夫木 あぢさゐのそれのあのもをけぢりハ俊頼 園圃ふ好事の者多く栽苗冬を經て長生す高四五尺莖細く柔ふして蔓延する如し葉苦菜ふ似て光沢ゆし 花彙 花苦菅 政 荒本草云人家 青色也て淡碧と帯ぶ初生莖の梢と抱葉毎ふ抽でゝ葉と穿形の四五月葉の間ふ紫碧花と開き初て綻る時野菊のごとし 朝ふい

朝菊

あざゝ 池沢の中ふ生ぜ巣も花も萍蓬草ふ似て別ふあざゝハ莖河骨ふ似て長く水中ふ横ゝとりてよりもく葉ハ水面ふうゝび水上ふ上らず花の形色ハうゝふ似たり五六月水面ふ黄花と開く荇菜と 和漢三才會 中古栗とぞらも近世澱粉ふ製ふ誤 **栗蒔** あさゝと訓

夏 あ

ざるかのと粟とも穂大やうにて毛長く粒粗きかのを粟とも穂小ふして毛短く粒細きかのを粟とも菊ふ黍ふ竪て種類凡て數十青赤黄白黑の諸色あり早中晩あり三月種るかれと上時とも五月熟もし四月種るものを中時とも七月熟す五月種るもの

青梅 性しさハ葉ごろ梅のごろと下時とも八月熟す

杏子 杏ハ葉円くして尖あり、杏とも茎あり酢ご帶るものと梅木とも青くして黄と帶るかのと奈杏とも大く栗の如く黄ゆて橘の如きこ金杏とも

本草綱目 杏ハ葉円くして尖あり、二月紅花ごとひらく沙をるものを沙

荒布 和名ならの、俗あらめといふ、

和漢三才図会 本草綱目ふ海藻ふ似たりと按ずるふ昆布ふ似て狹く黑色長きもの四五尺縱の皺文あり柔ふ數て株あり、堅實ふして乾けハ小刀の櫂ごとなる其菓煮食ふべし

鯵 大和本草 東南の海ふ生るもの形肥大さり夏秋肉多く味美あり冬春美あるも又室鰺島鰺あり味劣る

六月

芦の神輿 一つの部津島祭の条下ふくし、

熟田祭

神社尾張国年魚市郡、江嵜、松姫島千竈の郷ふあり、正殿五座第一天照大神、第二素盞嗚尊、第三日本武尊、第四宮簀媛命、日本武皇妃、第五建稲種命、宮簀媛の兄、大宮司の祖神、右五座西とり次て是どうそふ、○上用殿ハ神鮒草薙の宝劔ふ入、又熱田七社ハ大宮ハ劔宮、高蔵宮、大福田宮、日割宮、氷上宮、源大夫宮是ハ此外摂社末社、一百余座あり、當社ハ人皇十二代景行天皇の御宇鎮座、其後天智の御時、故有て皇都ふ移奉つりしが十九年ど經て、天武天皇朱鳥元年ふくしい當國ふ還座ちまつり、其砌ハ例祭勅使下向有て官幣ど奉られ、あり、抑當社の神事年中數度あり、まつ正月十日辰刻踏哥の神事、大福田の社ごり始て政所、大宮ハ劔、又大福田ごそ終る、此社ハ倉稲魂ど祀る、故ふ五穀豊登ご祈る神事あり、舞人十二人、高市子一人、笛一人、陪一人、各櫻山吹を挿頭ごも、同十四日ハ歩射の式十五日ハ歩射の的廿二日ハ両宮の歩射会、三月初巳午未の日祈年祭、○同月初末の日午刻、御田神社の供御、此日烏喰の神事ごり、俗ふ烏祭ごいふ、是ハ神事ごもしまらざる前ふ大宮祭支殿の前ふて、祝座の長外ふ一人平餅ごとて烏ど呼ぶ、此餅ど烏のくそざるうちハ神事ど

えしめ給ふ〇五月五日八神輿鎮皇樓門上へ神輦古童子
〇六月九日山鉾祭礼あり熱田八ケ村よりこれを行ふ車三輛山一輛〇
同月晦日夏越の祓あり、鈴の社前の川岸ふおいてこれを修ス又
〇七月七日、大宮の大掃除、十月初寅卯辰の日新嘗祭、十月
廿九日両宮外院煤掃ひあり、此外諸社
の供御ハ月々数度これ有今要を拾て略記ス

愛宕の千日詣

廿四日 神社啓蒙 丹波国桑田郡、水雄の北ふあり、祭る神
二座 伊弉並尊 火産霊神 神祇拾遺 愛宕権現
端の御前、軻遇槌命、奥の御前 伊舎那美尊 紀事 六月廿
四日愛宕詣、是平日の千度ふ当るとい、俗これを千日詣と
い、寺僧六坊あてこの日番詣の人ふ酒食を饗ぜ、こと
坊著ときふ火札を買て帰路檜の枝を求め、粽を付ること
肩ふ一ヶ帰る、檜の枝ハ竈の上ふ挿むゆゑくすする
ときハ其家火災を免るといふ、九六坊国毎ふ檀越あり、貴
賤を擇ず毎年札を贈り、贄を贈るこの使を勤るもの
中衆といふ、この山嵯峨の西ふあり、延喜式ふ載る所、丹波の
桑田郡ふ属ス、今ハ山城の国なり、水殿祭るところ、愛宕権
現垂跡本地勝軍地蔵菩薩是則慶俊法師再考勧請ス

る所なり、当社くしめハ城北の鷹ふ奉
ふらし、光仁天皇元年今の地ふうつす

荒和祓

部夏

越の祓の条 年中行事 夏引の麻の
下ろ、ゆ、し、

麻の葉流

祓草

大ぬさ、ちりを、てかゝの
つるさのみをきまらゝも 大蔵卿〇麻の葉と切て幣とす
るゆゑふ、ちゝ、まる川ふ流ス、ちり、祓草といふも麻のこと、
麻の葉ふてきて

暑日

字彙訓文 暑ハ煮あり、熱して物
とする故ふ名く、と煮がごとゝ 〇暑き日と史
ハ六月の季あり、暑と

青山風

夏木立の梢の緑と吹あら
でゝりハ三夏と兼ぬ そゝいふふ也、一説六月上旬中
の空ふ、一点の雲あゝく、青ゝ、る天氣ふ、東風のゝ、ゝ、て、あ
たると青東風といふ、無類の天氣ふ、是と青嵐といふ、

赤草

麗文曰赤草一名山酸漿、高さ七八寸ばかり、一茎一葉、
吾の如くふして清く小さし、夏日其茎葉真紅ふ、
其苗山沢ふあり、故ふ山酸漿と名く、立花
と好ある人、夏日これを愛して花瓶ふ挿む、

青田

和詩 六月青稲
多千畦碧泉乱と作る
意ふゝく風景ふ、

藍苅

和漢三才画会 四月苗
と植て九七十日ばかり

にいまゝ穂ともなくこゝろ時、晴且ふ露ふ乗して抜採り、曝し乾もこゝ云抜もるふ抜採るふ紙稀ゆして苅る者多

麻、同苧 櫻麻 和漢三才圖会 苧麻大麻ともむ皮を剥て絲ゝもて通して苧と称ふ苧

麻と以て真苧ゝもて、羽州最上の産と佳し、奈良晒

織るわの是ふりこゝ云 陸機草木疏 紵ハ宿根土中ふ在て、春ふ至て自生もて、栽種ることと須ひ、荊楊の間歳ふ三ゝひ苅る諸国これと種て歳ゝふゝこゝひ苅る便其皮を剥取、竹と以て其表と刮る、厚き所、おのづゝ脱て裏の筋の如きわのと得て布と緝ゝ、○蘇頌曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして面青く背白く短毛あり、夏秋の間細き穂青き花と著く、○櫻麻、櫻花のさくこゝろ裁る故の名とも、又麻の花の櫻ふ似る故と、おのづゝ

主日米苗椒 もゝ〜〜〜〇麻苗と夏ゝ〜二番川と秋とも、

青鬼灯 青しとのひて夏季とも、時珍ゝ青色瓜といふる是ゝ、江戸ふてこゝと本田瓜とゝふ九漬瓜ふ似ゝ長大ちゝ、

阿古陀瓜 阿古陀ハ宛も南瓜ふ似て今人好まゞ此瓜京師小多し味美ゝらゞ、其蔓長く葉蜀葵ニ似て花黄ゝ、

麻 和漢三才図会 南都産

地酒 諸国名物記 豊後国の製ゝ云 茅酒云 毛吹豆 豊後国麻地草云又朝生酒とも書、

或ハ土ゝうゝとも云酒方の書ニ云麻地酒ハ豊後国ゝう出、其造法糯米粳米等分ふ合製して夏ニ月寒水と用て夏と釀し、土中ふ埋め草芽の類と以て夏と覆ふゝう、冬春と経て夏月土用ふ至て則土中ゝうゝとと出ちゝ既ふ熟せゝうて二ゝうの名あゝ、夏月の飲ゝ〜賞翫ゝ、

洗飯 すの部水飯 紀事六月の条ニ出、

雪 早すゝ時八民間請雨の法と修ゝ是と雨乞と云ゝ民人鉦とゝち太鼓と鳴ゝらゝて踊躍或ハ笠と戴き蓑と著雨中の粧とて是と祝し諸神と祈ゝ云、

さ

四月下帯 御湯殿記 五月五日より女房上下帷子といゝくふ深て着し、所帯あゝ是ハ洞中の御事ゝ凡俗ふも地白帷子下帯と用ふ又四月ゝゝも用ふ、

秋隣、秋近し、秋と待 義たゝし

山王祭 申の日、但ニッゝれバ

二の迫江国日枝の神社八滋賀郡坂本ふ有、祭神大己貴尊
申、こ所謂上のヒ社ハ大宮大国主命（十一面観音）二の宮麻多羅神
及ひ金比羅神（千手）天台山壱龍寺の鎮守ふ准ず（薬師如来聖真
子ハ幡大菩薩（阿弥陀）八王子灌頂大法王子（千手観音）日吉補陀洛
山と表す、客人の宮、白山明神の尊（去来諾）の大神、山王の
行化と助け北陸と出てこの山ふ来現あるゝ故ふ客人の宮と
いふ十一面十禅子ハ地蔵の應化ゝ大師此山と開きゝ成就の後上
定心院と創む、叡山東の堂ふあり十禅師と置きまゝふ九人を
えらひ得て一人を欽く安慮と得て数ふ満ゝ十禅師のオ
器と歓抃ゝて忽然ゝゝてこゝえまゝ故ふ社とその所ふ建て
祭供まゝこゝと十禅師といふ普賢中の七社、牛御子ハ大威徳大
行事ハ毘沙門早尾ハ不動氣比ハ聖観音下の王子ハ虚空蔵
王子の宮の珠聖女ハ如意輪あり下の七社小禅師ハ弥勒龍樹
恵王子ハ愛染新行事ハ吉祥天岩滝ハ弁天山末ハ八利支天
叡の宮ハ不動竈殿ハ大日以上廿一社あり、○三月十八日山王祭
の神とその所ふ於て伐取て四月三日ふ至て西教寺の側
の松の木ふ寄せけて又山王の社前ふ置夜ふ入て諸人こゝと
とゝ人大津の四の宮ふ立ツ祭の日神幸の時大津より大宮

の拝殿ふ返し入奉る○申の日江州東坂本の山王祭ゝ午
の刻過て田楽法師、獅子舞、比叡辻の人並ニ衆徒前驅して
神輿と迎へ七社の神輿山と下る時前後とゆゝそひ競ひ入
す、こゝて舟ふのせ〜む、山門の僧徒桟敷と構へ翠簾とゝと
て是とゝる、こゝと横桟鋪といふ田楽法師ふこの前ふ汾て
藝とふをこの日京の山王町より供物と日吉の社ふ献ず前日
天台の當座主の御室ふ至てこゝと加持し翌日東坂ふ至て至
りて供ず又江州膳所の地人御供と献ず祭の日縛船二艘明
上ふ浮め音楽を奏ゝ件の供物を献備ず是と御供船と
いふその船ふ乗るもの、多くハ猿皮と着て猿の假面と被、
猿ハ元来日吉の使令ゝこゝとの中六社の神輿へハ仮りふ供
ものゝ為ふ〜ゝて後湖水ふ徹つ大宮一社の神供ハ神輿の前ふ
置ゝゝその後神輿船と陸地ふ寄せ神馬相いゝへ得て輿
中の神騎ゝまゝふと本社ふ入ゝゝといふ七社の空輿ハ坂本の
地人こゝと昇て神輿屋へ入ゝ今日山門ふ属ゝゝ所の供
人其ゝ盛威とゝゝひ神幸と警固ゝ俗謡ふ山王祭ふ歌る
ものゝあれど寒の語ハ今日のゝゝこゝこゝ人と害まゝふ及
ふの語ゝ祭ゝの前夜いまゝ八王子の神輿と祭ら及急

ふ山坂と下りて、七社の神輿各本社七ヶ所の拜殿ふ居う、
抑山王祭ハ七ヶ年詰てそ〳〵ハ盡く見つくしがく〳〵とのへそ、
古老傳へていふ九月中の申の日、八王子三宮の西神輿と八
王子の山上拜殿ふ舁まろかと、四月末の日ふ至て件の二社
と神輿ふ迎へ奉ると、午の神事とのハ八王子拜殿ハ元来
山峠ふ造て出して階下遥ふ低し、神輿半ハ拜殿内り、半ハ
拜殿の欄干と越て外ふ出し、神輿の北の方の棒ふ柱とうて
相圓と待て柱と接とれハ神輿さろしまふ落つ、その下ふ神輿
舁數十人並居て中ふて請取直ちふ山坂と下る、誠ふ生死とニ
の一時ふ究むこと八瀬の土人預て役もう所ありこと也と神
輿落ら八下し終りて、両社と二の宮の拜殿ふ安置せ、二の
宮の神輿と拜殿ふ迂し奉ると八、近年未の日の晩とある、
十禪師の神輿も又同〳〵、未の日二の宮、十禪師、四社の神輿
と大政所ふうし奉る、同時警固の式あり、大宮、聖真子宮
の宮八大宮の拜殿ふうつし奉る、此間ふけ黒畧を公人各白素絹
祭の刺ぬき五條袈裟と以頭とつくこ、太刀と佩、その余数十
輩甲冑と著〳〵、鎗長刀と持てその所と警固し、神前〳〵武
器と立つらねて、終夜警固の勢ひとあり、て各下山ま、此日京

祇國の社より御供と捧け来りて酉の刻軾備さこれと未の
御供といふ、暮ふ及て宵宮落〳〵とあり、次所四社の神
輿と石垣の際へ出し石壇の下より甚ふて神輿の先の方ハ棒
端と持ち置て、こまも又合圓と持て四社一同ふ落さんと設け
おくこ、神事の役人その所々ふ来集りて時刻ふ至ま、獅子舞
大政所ふ来りて二の社三の宮と次第に舞て退く、次ふ田楽法師
装束ふ菅笠と被て、鼓こ施し、神輿と舞をこの時公人頭取
狂言さし花さて志めのう仕れといふ、田楽、笠こ鉾こ立烏帽子
と著こ、ちうこう舞ふ、この舞の扇と挙ると相圓ふ神輿と落も
四社の神輿泉中ふてうけとり、先とひらこひて走る収納所の前、
氣の宮のそ前後こ、ふ相擬ひ是こ、り次第の如く神輿こ並へ
大宮の拜殿へ迂幸七社合せ奉る、當日申の日山門の大衆桟
敷への義ありて、公人甲冑ふて衆徒と警固も桟敷の前
ふふいこ獅子舞田楽あり、是ハ實宮ふ勅使神参向當日まで
御滞留勅使への饗應の遺意こといふ、八皇七工代後三條院延
久四年四月廿三日始て祭の官幣と立らるこのよし廿三社注式ふ
出、或ハ六十四代、圓融院貞元二年四月廿六日、始て上卿弁外記
史諸司と遣いこ、とといふ、○九神馬の催し、一二番の鐘

を憑として、参詣の輩石の鳥居へ来て集る、三器の公人人数
とつらなり、末の剛だうふ四の宮より榊と渡す、磯成束帯
濱成文官唐装束にて各馬上七度半の使至て榊と渡さ、
五月同七長け　社家春日祭といふてあり、社家の拍掌を待
て、大宮前の廉と動くもと合圖として、神輿各先ニつらな
ることく、舁出す、前後の勝負石の鳥居まで、ありて神
輿ハ飛ぶが如くハッ柳ふいとまこと、おいて神輿と船お乗
せ奉る由又先後とつらなるこの神輿船ハ湖辺ニ浦より
毎年ニ度ニ出る是より辛嵩の社ゆて神供の義ハ七
七社神輿の駕輿ハ例年絜齋精進して、ことを勤む今日の
勝負の手柄と褒美して禄と賜ふ、谷々勝手より
これと出る、日次紀事ふ七社唐寿より、神馬ハ陸地還幸と
いふ誤なり、日吉鎮座記条儀式卯月の祭礼ハ琴の御館大
樫木と坎ハ神幸の祝詞と奏し唐寿ゆて先盟の如く恒世り
餅粟の御供料と奉る、神輿と出し祭ることハ根武天皇延暦
十年ニ三ニ又御角祭始るとハ延元年中供水以後の例ニ式七社
の神輿ハ御供と献ると各ニ勝献供の式畢て神輿舁る輩
ハ唐寿ハ上ゆ陸地と本社へ帰る西ハ高野矢脊修学寺佛

格寺、田中、山中の人東ハ大津志賀、河野坂本、苗鹿雄琴、仰木、
乳母、真野ホの土人也神輿舟ハ若宮の濱へ着岸ゆより上ゲ濱、
といふ所の土人神輿と舁き炬火挑灯ゆて本社へ還御あり望
酉の日御の神事といふ者大坂より来て、神楽ニ奏し終て
後神輿と
納るあり、

榊取

かの部神祭

の条ふ注す、

三枝祭

七月晦日
　　　

愛宕山とゐ霊故あるゑこの日一基の神輿ふ起りたる金屋
八愛宕山より下も此金屋下ると翔とりて神幸と催ス一
基ハ野山大明神と申て野宮より迂幸と云云いづこも土
人本居神ともこの祭ふ土人婦と女女の如く藝とかゝ
也句樹ふ於て舞しむ近 櫻の實 和漢三才画会清
年引山或ハ金鉾と出も 明の前後花とひ
らき實と結ふ大小大豆むくり生ハ青く熟ふ赤黒し仁
あり小兒好でこれと食ふ味ひ甘美ゆく魚毒と解ス俗ふ
此王と櫻坊こいふ、

五月 さつき

鏡

異聞集 唐の天宝中揚洲より水心鏡と進る背ふ盤
龍あり五月揚子江心ふ於てこれと鑄る背龍頗る異
なり後旱もこれと祈ハ則雨ふる 捜神記 金錫の性ハ
一ゆり五月丙子日午時鑄ると陽燧と七月壬子の日子
時鑄ると陰燧とも〇時珍高蓋録を引て云ク陽燧一名陽
符火と日ふとる陰燧一名陰符水と月ふとる蓋銅と以て
これと造るこれと火水の鏡といふ 五雜俎 唐より以前こ
ゑ揚州より鏡と貢も五月九日と以揚子江心の水と取く

くもこと鑄る凡鏡ハ他ふし
水清冽ゆゑハ則佳ちなこ、

左近の真手番 の日

公事根源 五月三日ハ左近の荒手番四日ハ右近の真手番
五日ハ左近の真手番六日ハ右近の真手番くびうしハ左右
近の馬場ゑそ騎射のこゆしゆゑ射手ちゑハ大將の申さ
ゑむるこゑ云云此日随身褐の尻と折て着る故八さうの
日といふゆゑ荒手番も同じさまゆゑら真手番正月ちゑハ
五月五日とひさうの日といふゆゑ引折の略ス 河海抄
左近の馬場ハ一条西洞院 寂勝講 公事根源 先ゑ
右近の馬場ハ一条大宮在 て日とさゝゆる
四ケの大寺 東大 興福 延暦 園城 寂勝王經と清涼殿ゑそ講ぜらる
證義講師聴衆ゑもあり寂勝ハ寂誉ゑの聞えあるこゑをゑてゑ
元亨釈書 永延皇帝一条寛弘六年六月十九 名德と宮中
ふ延て寂勝王經と講論ゑるこ五日立て式ゑるこ先代或、
行ひ或ハ止む今よ

五月雨 梅雨 入梅

和訓義解 黴雨 蒸暑花ハ
さつき雨降るの暑〇梅雨 埤雅 四五月の中梅黄み
落んとする時水潤土辱して柱礎ゑの汚蒸鬱ゑそ

雨ふるごとに梅雨といふ故に三月雨ふることを迎梅といひ五月雨ふることを送梅といふ○入梅 四時纂要 閏人立夏の後庚日に逢へば入梅なり芒種の後壬日に逢へば出梅なり雨どうまと新蒲ふうろし○黴雨 紀事 立春後百三十五日大概黴雨なり諸物黴腐る此節陸地處々に水湧出る俗に津井穴といふ○墜栗花穴 紀事 摂州天田郡丹生山田の庄原の村サオ天の祠のほとり毎年水湧て期と怒らば是則中將姫の嫌白瀑前を祭るの故墜栗花左衛門といふかの世々に家もと云云

榊の花

和漢三才画会 坂樹日本紀 賢木式 龍眼木漢語抄 和名佐加岐 正字未詳 按るに本朝神社必用の木ふい字屋の木密と用ふるごとし葉小さく色深青七しして香あり四時凋まず小白花とひらき實と結ぶ生ハ青く熟すれば紅なり日本紀に八百萬の神たち天の香久山の坂樹を取て天の窟戸の事を祈ぎ以来神の縁木なり云云

柘榴の花

潛確類書 石榴種甚多し千葉深紅やうて實と結ぶ

たの部田植の条下見るべし

早苗、早少女

とも名く孰樂のもとと天榴と名く甚ごとく花とひらく赤葉のもと一種白花とひらく白榴といふ黄花とひらく黄榴といふ 博物志 漢の張騫西域に使を通ふ林安石國の榴の種を得て歸る故に安石榴といふ

さるとりの花

養蒙 ひろとり 山野ふ多く生ず葉ハ柳に似て刺あり筑紫の俗かめいそ

五月躑躅

花史 杜鵑又石巖花と名く此花杜鵑の鳴くとき英と知らくらとりと、故に名く、和漢三才画会 山躑躅 山石榴 杜鵑花 和名阿伊豆豆之 今云さつき、本草綱目に云處々山谷にあり高きこと四五尺低きは一二尺春苗を生じ葉の色淺緑枝に対して花繁し上技數蕚二月始めて花とひらき蓮華躑躅の如くして石榴の花の如し紅紫五出千葉なるあり品類三百余種に至る四月もしくは五月に盛なり俗に五月と称す摂州須磨一の谷うり二の谷攤現山に至て凡三四里だうり遠州秋葉山の禁下乾川の両辺もまた三四里だうり躑躅杜鵑花甚だ多し夏月に入ハ満山錦のごとし

鷺撫子

部撫子の条に見るべし

松茸 和漢三才商会 松茸八九月の交に盛んに出るものと俗に早松茸と名く、其味香美可ちらぞ

蠁子 和漢三才圖会 倭名抄云蠁子和名佐之酒醋の上に浮ぶ小虫なり、按ずるに醤醋腐肉の中に初め蛆を生じ羽化して小蠅となる、身黑く翅黄色大さ一分に過ぎず、眼鏡と以て視るに蝇と異なることなし、然るに蝇の子なるべし、そして一類二種卵生化生異なれども、李流愁森歌云葉破苔異来林滴臓光透長庭沙色恨無長鈔一千仮割断頑雲看晴碧 藏玉 こゝろ上との暗問と

五月闇 このごろ〜ちとけん 顕昭

六月 西園寺殿妙

立日講 十六日 紀事 六月十六日十七日西園寺家妙音講を修せらる今日種々の珍果と家の舞天人供養堂上並に衆人相集りて管絃と催す又西園寺家の外琵琶と弾ずるの家又此式あり、近世敬あり、十六日此を修す 休源抄 妙音院相國師長公妙音天と四天の北室町の東に造らるゝ、毎月十八日妙音講を行ふ

座頭の涼 十九日 紀事 六月十九日盲人納涼会を是音天八弁才天に、在京の検校及勾當上首一人清聚菴に会して心經と轉讀し、頭人撿校饗應と設け、六波の中蓍者四人と撰ぶて平家と談ぜ、暑氣甚しく座席狹し故に撿校の外勾當上首其以下並遠方の人来会するに及ぶ、其外八組二月十六日の式に同じ、

座摩社御祓 廿二日 社説 摂州西成郡の総社、坐ず太神宮八十五代神功皇后三韓より歸陳しまつる時神武天皇の古例に倣ふとして、卿船難波の岸浮見石の邊に寄せ、神璽安鎮の為齋殿たまふの地なり、神功皇后十年庚子、難波入江の岸、田蓑の島に鎮座、浮見石八分の御旅所の鎮坐石といふ祭る所、生井の神、福井の神、綱長井の神、石の三柱井の神に竈の神、名波比祇の神、阿須波の神二座と加へて五座 元神名帳 例祭六月廿二日、夏越の大祓あり、神輿御旅所に渡御あり、座の旧跡八軒屋の南石町にあり、今猶鎮座石と称ず、俗こゝを神功皇后の憩息石といふ、此辺とゝべて渡辺大江の岸とのべ、今の天神橋一名渡辺橋といふ、大江の岸にあり、故に名く、南八

城内ふ屬ス、北ハ兎餓野、南北と田蓑の島こいくいやゝ江口の辺まそ、當社の境内ふして、末社あまこ、天正年中圓江の側ふ遷ーゆく云 延喜式 坐ー の社○祭礼當日氏子の市民種々の遠り物と出ふ、社司、西横川の川上ふ床と構へ、氏子の形代と流ー禊と修ス 小蠅声神 神代卷 然るに彼地多ふ蛍火光く神、及び蠅声邪神あり、復草木咸能言語あり云 奥伐秋 さくらし井 いの部井戸磐の条下ふ出

いそと譬ハ夏のそくのちろとみごとるまうふ何ーき神のいのうまりこと、とらへあどし

そ、六月まらへ、まるまり、 三伏 陳陽書 夏至ヨリ三の庚と初伏ーまと、四の庚と中伏ーまと立秋の後、初の庚と末伏ーまと、是と三伏ーまらし、

鯖鈎 時珍曰青魚亦鯖ふ作る色と以て名くるる、大なる。

四月多し數丈浪の為ふ漂ふ所と鈎せを紐せ、ーて亦獲べし、 鷺草 和漢三才新會 能登の海上ふ奥州處々ふ鷺草あり、春苗と生ず、麥の嫩苗の如し、高さ尺ばかり、六月莖と抽んで花と開く、正白色形鷺の如し、故ふ名く、連鷺草

といふる一種あり、高さ五六寸葉野大ー別年書の嫩葉ふ似一花白色鷺千有餘群飛ふ似さり云 櫻森 あの部麻の条ふるべし、 豇豆 和漢三才新會 十八豇豆長大なる者本草ふ相混じて其莢長きものの二尺ふ至ると、ふ者是あり、夏至の前ふ種と下ふ蔓長く籬ふ延其莢尺余ふして、その子九十八ばかりあり故ふ俗呼で十八豇豆といふ、六七月莢の嫩さるのと煮て食ふ味甘美亦白の二種有

四月

擬階の奏 七日 公事根源 四月七日ヨリ八月の列見の時の成選の短冊と二省ともてまゐると、大臣奏聞する儀あり、列見延引の時は、短冊を、このごろ、ふつふ入て、ふよて、迎ふ、ふてとゝめれば、短冊を、退出ス、ーるとあり、 頭書 擬階の奏擬ハ議也、誰々を加階させらるとあ、こ議ーる奏ふ

桐花 時珍曰桐ハ花筒とふて、故ふ、ふと桐ーく、其葉四大ゆーて尖ーて長ーく角あ、光り滑ゆーて毳あり最生長ーー易し、花を先ふ、葉と後ふ、三月花とひらく、掌牛子のごとし、白色花心微紅ふて、其

木輕虚皮の色粗白し故ふ白桐と名く、○梧桐一名青如狼狸、○宗奭曰梧桐四月嫩葉小花を開く葉花いと小し、[大和本草]梧桐又青桐といふ古人詩歌ふ詠ぜしハ是あり、世ふ白桐多く梧桐ハ稀ゝ、[和名抄]壔桐者三月花紫ゝ琴瑟ふ作るふ堪ふるか計是あり、

金柑の花 時珍曰其樹橘ふ似て甚ゞ高大ふらず、五月白花をひらく、

枳穀の花 時珍曰木橘の如くふして小く、高ゝ五七尺葉橙の如く刺多し、春白花を生ず、

鴨足草 一名ぬきのすけ、ゆの部ゝ見し、

木芍藥 丹の異名ゝ、[賈躭花譜]天宝中禁中夜のそゝ木芍藥と重ふ四本を得ゝ、紅紫浅紅通白興慶池の東沉香亭ふ移し植ゝ、○時珍曰牡丹ハ其花芍藥ふ似て宿幹木ふ似ゝ、

羊蹄花 羊蹄根時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘、牛の舌の形ふ似ゝ、夏ふ入て莖と起花と開く實を結ふ夏至節枯る、羊蹄ハ根を以て名ゝ、根長蘆菔ふ似て莖赤し、[和訓義解]俗志のねゝ又さしくとり、夏ふ至て小黄花をひらく、其根大黄ふ似ゝ、○按

大黄とのふ者是あり、莖花ともふ黄赤の二種あり、

剖 其實枝ゝ振ア動其その音きしくとゝ、

葦鳥 蘆原雀 蘆鸞 蘆原雀 [和漢三才圖会]蘆虎 蘆鳥 蘆原雀 蘆鸞 俗称 按ずるふ 蒡剖

狀倭の鶯ふ似て大さ雀の如し青灰の斑色長き尾田沢芦葦の中ふ在て好んで葦中の虫と食ふ其鳴声喧く亮ゝ故ふ此名あり、

兼三夏物 **切麥** ひの部冷麥の条ふ出ず、

木布 紀事夏日奈良瀑布八講布、高宮布、木布の類ゝ喜ゝる、云云麻布、葛布、藤布ふのいまゞ瀑さるゝと生布とゝ木布とハ生布ふ同し、

五月 **儀方を書** [五雜組]五月五日すゝうの紙ふ儀方の字と書ゝ家の四方ふ粘つゝ、其年蚊蠅と退く、

競駈 くの部藥騎日の条ふ出ず

射 年中行事歌合五月五日豊楽院ゝ、昔八騎射と御覧じけるあり、是と馬ふとりふ天子群臣みちなのめのうらゝと冠ア引て節會の儀式ありしく続命縷ゝまのひけるゝふ花いと奥めるゝ事をそなへれ

祇園の神輿洗

晦日 紀事 五月晦日祇園の社火災と被ることを恐れいふ夜ふかこ神輿洗あり凡其式神輿三基所謂素盞烏命、大政所と号す、西ハ稲田姫命將井と号す、東、龍王女今御前と号、大政所今御前の神輿、二基ハ神輿屋を出し直ふ拜殿ふ入る、少將井の神輿一基ハ、神輿屋より南門を出て石の鳥居より松林をまぎ祇園町より白病の地藏堂の前を過ぎて、鴨川の辺ふ曳て、いろ〳〵河水ふ神輿を灌ぐ事を洗ふ事と神輿洗と、いへ今この義をいへども、曰きふ洗ふ事を称ふ、そもそもこれ後再び祇園町より西樓門ふ入り、三基の神輿と共ふ拜殿ふ安置す、この供奉四条芝居の役者、竿の先ふ提灯を張外面ふ各姓名を書し、高く是を擧く、祇園の町々家毎ふ高く提灯を張る、又六月十四日祭礼終りて後神輿三輿社頭ふ在す、同〳〵十八日の夜、三基の神輿ハ直ふ神輿屋ふ入る、少將井の神輿ハ今夜の式の如し、凡神輿三基黄衣の法師三人、各常ふ金銀花ふの部忍冬の条ことを預りて主宰す、

胡瓜

時珍曰胡瓜張騫西域ふ使して種を得、故ふ胡瓜と名く、按ずるふ、拾遺録ニ云、隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黄瓜とす、正月二月種を下し、三月苗を生ず、蔓を引て葉を瓜のごとく、四五月黄瓜をひらき瓜を結ぶ、

玉簪

和漢三才圖会 此者葉円く濶くして末稍の擂干の形ふ似たり、故ふ俗呼てぎぼうしと、五月花を開く、本草 時珍曰玉簪一名白鶴仙、共に花の象を以て名と命ず、人家栽て花草と為、二月苗を生して叢を為す、高さ尺ばかり、柔なる莖白珍の如し、其葉の大さ掌の如し、團〳〵として尖あり、葉上の紋車前の葉の如し、書白色、頗橋蕊六七月莖を抽んで莖の上ふ細葉あり、中ふ花蕊十数枚を出す、長さ二三寸、本小ふ末大ありいまだ開ざる時、白玉の搔頭簪の形の如し、開く時微綻ぶ、四出、中ふ黄なる蕊を吐き頗香し、

粔籹

和漢三才圖会 稷ふ〳〵ハ餅ふして華ふ食ふ、今ハ唯磬末とし團子餅として賤民用ふ、

六月

祇園會

神社啓蒙 二十二社註式云、人皇六十四代円融院天七日、禄元年六月十四日、御霊会を始め今歳ふこれを十四日、

行ふ 紀事 先七日の朝、巳の刻、大鉾六本各四条通りと東洞院の西ゟ出ゞ堀と渡るとゝゟ六本の鉾各称号あるゝ其中長刀鉾鬮ととるゟ及ぶとこ毎年魁首ゝゝこの鉾四条通ゟ東の方の先ゟなりゟふゝて、此鉾行ざる時、次の鉾過るとあとたず、函谷鉾と身二ともゝ洲濱鉾或ハ放下鉾と称ものゝ西の方の終ゟ西の方の終ゟふゝ故ふこの三本鬮ととゝゝゟ及ぶもゝの間ゟ鶏鉾菊水鉾月鉾三本船鉾一本並

大神山 飛天神山 古牛山 太子山 山伏山 孟宗山 琴弾山

白楽天山 郭巨山 芦苅山 蟷螂山 笠鉾山 二本 花盗人山

木賊苅山 岩戸山 舟鉾 以上十七本 九鉾一本後山三本連行もぎのゟ六角堂ゟおゝ取ところの鬮の次第のごと

相傳ゟ長刀鉾の長刀ハ三条宗近ゟ作ゟゝ民間瘧と患ゝゝゟものゝゝとゝゝくゝくゝときハ病愈ゝゝゟ九鉾毎ゟ長さ十余丈余下ゟ車輪二双を施し左右ゟ大縄をつけて数十人ゝゝを引ゝその年役ゟ従ゟ小児その上ゟ乗り首ゟ宝冠をいゝゝき腰ゟ羯鼓を繋き躍ゝゝゝ

大師寺務の翌年もゞめて行はる、今猶祇園宮殿の傍に、大師の尊像を置、**北野九度詣**

九日 [神社考] 北野の聖廟は天慶三年七月十六日右京七条坊の婢文子に託して右京の馬場に斐へと欲き其女甚く賤しく宮構そなはらざりしかとも家の側に祠を天暦元年六月九日始て北野に移す、[滑稽見雑談] 富士に至て毎歳今日九度詣と称して、南門の外弁慶拉の邊武八東向観音の堂前より、神前まで往返九度して神拜をなせり、是聖廟此地に遷座の日なるよし

木耳取 時珍曰木耳朽木の上に生ず九度八九日の義を用ふるか、

枝葉まゝ濕熱の氣に生る所木耳木蛾といふ○按るに此物多く梅雨の前後に生ず六月に至て木耳堅く備る此時取

麒麟草 漢名未詳高き尺余にして、莖葉景天に似て小く、其葉浅緑にして鋸齒あり、莖の端に花を生ず花ゆまこと景天に似て色黄なり、夏より秋に至て其花猶あり、景天の別種なり

金瓜 長州豊原郡田辺村小路村より参州の産其色黄金の如し

銀瓜 参州の産其色白銀の如し

ゆ

四月

雪見草 卯の花の異名なり [藏玉] 見草名を雪見草とつけ始めたり、

鳥足草 [本草綱目] 螺髻虎耳草 蛙蟲の處に生ず人

亦石山の上に栽高さ五六寸細き毛あり一莖一葉荷蓋の狀の如し葉の大さ銭の狀の如し初生小葵の葉及虎の耳の形に似たり夏に

兼三夏物 **内衣** 和名鈔溫室三云藥

花をひらく淡紅色

浴の法七物其七ツを内衣とのふ和名由加多比良論語註

明衣は布を以て沐浴の衣とす○今は夏日平服をも所

の木布あり以てゆかたと云

ゆかたはゆうかたびらの畧

五月

百合 時珍曰百合の根衆瓣と以て合成す或は云百合病を治す故に名く其葉短く潤く微竹の葉に似たり白花四垂の者百合花

百合 畏百合 袂百合 黒百合 博多百合 車百合 透百合

鹿の子百合 ホの數品あり各其頭字の部に入べし

夏袴 夏袴の部に入べし

六月

夕祓 夏の条に出

白雨

月令 此月土潤溽暑大雨時行 漢字和訓 五色線ニ云夏の雨こと錦雨こいハ 御今 白雨と書こと八天満の森也 法橋山谷ノ詩ふありと申しれしかも九執筆の時書始し文字と 雜驗註 東西ハ夏天の暴雨と

夕顔

和漢三才圖会 彼岸の中ふ種と下し立夏ノ前後ふ種と移し五六月正白花と咲らく日午ハ凋と暮ふ盛と故ふ夕顔と称ス實と結ぶ早晩の二種あり○夕顔や秋いろくのふくべ哉 翁

四月

冥途の鳥

三魂と縛めて闇の樹下ふ至るふ二の鳥棲掌ス一と無常鳥と名づく二と抜目鳥と名づく我汝ノ舊里ふ化して鷓鴣鳥とあり怪語と示して別都頓宜壽と鳴ん我汝ノ舊里ふ化して烏鳥とあり怪語と示して阿知薩迦とあらん 倭名抄 鷓鴣和名保度々木須

蕪

三夏物

めふ見ぬ鳥

こも蝶蟬とい〻 證歌考

飯

鮓

毛吹草 和州南都飯鮓○世俗まこと夏月ことと賞ス〻其製多しとい〻も京の六條南都の制ふ限る

四月

水屋の能

四日、五日 紀事 南都 水屋川の南ふ水屋の社あり祭る所の神二座素盞烏尊稚田姫あり云云此祭ハ伏見院の御宇疫病流行ふよりて始めて行ふ〻いふ〻ハ神楽ふあり〻ふ今ハ申楽四番あり地人能藝を施ス〻四月四日昔ふあり

御形の日

うの部賀茂祭の条ふ見るべし

三月過鳥

ほとゝぎすの異名 貞恒抄 四月五月六月ぞうあるハ〻つきすゝぎとこの〻○さみだれこの雲間と鳴てもてゆくおもひ出の〻ふ

都草

大和本草 細草〻四月黄花と〻ふ大伴黒主

花

本草綱目 樹の高さ丈餘其葉両頭小大り緑色〻ふ〻て面光る四月小花とひらく色白〻して甚ご香し 大和本草 其花と花橘と古哥ふよりて

蜜柑

兼三夏物

短夜

明安〜月令廣義 夏至の節晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分○古今 夏の夜の手うとまさはほとゝぎすもなく一声ふ明るものゝ貴之

水鯖 和漢三才圖会

○寐入らぬふ飯焚く家と明安き、冬松、

惠曾魚 正字未詳、按るふ鰯ふ類して、灰色ふ黄と帶、頭畧蝗蛇の如し、鱗硬く鬣短し下ふ碧の線丈二三條あり、大サ五六寸より天半ふ至る。 系切齒 水鯖水鱧

水鱧 和漢三才

此節と賞とひらきて潮ふひゝ上夜と越て生捕〜用ひ又鄙ふ漬ると其儘用ると畿内ふそ切流〜清流〜ふこゝと水鯖といふ、

鼠会 海鰻 慈鰻鱧 狗魚 和名波無、俗ニ波毛、唐音の略ゝ、俗ふ鱧の字と用ふるい甚ゞ非ふり。 系切齒 五月の項八潮ふ自然と多〜此時磯辺へよるゝと網ふて取るゝこと水鱧といふこゝゞ、又一説ふ鯖鱧の両種と大坂より大和へ送るふ桶の水と湛へ魚と漬る大和川と舟ふてらのるる大和の土人鯖と生ふ賞し、鯛ふうゝを勝ふうゝを彼水ふ浸し大和へ送る

蚯蚓出

月令孟夏月 螻蟈鳴蚯蚓出 本草綱目

土龍 地龍子 歌女ふの諸名あり○時珍曰術家ニ云蚓雲と起ゝゞ〜文蜒晴と知る故ふ土龍、地龍子の名あり、其鳴と長吟、故ニ哥女と云、

海松

崔禹錫食經 水松狀松の如くゆゝて葉ふ〜、 土佐日記 おなつのれるふ八子の日うのまねらぐらゝ松とぐふ紅のまゝ〜ものを、 源氏葵の巻 えるつゝふきゞ千ひろの底のゝるふきのゆゝゆくまるハゝるものゝゝそさんむ、源氏

五月

すまのし

水馬虫ゝとす。

通俗志 糸切歯 年浪草 ホゝぶまゝ〜ハ

づ

わくゝせ見 ふい蚊虫の事

ゝゝと青藍按るふ今の關東ゝそい蚊虫とゝぶすゝし

ゝゝゝゝ、わくゝゝとの説ふゝゝゝゝゝゝゝ、猶まの部蚊虫の

糸、すの部水馬虫の糸、たゝひふのゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

字彙 鳥穴ふあると窠といひ、水ふあると巣ゝとゝ、本

水鳥の巣 浮巣

朝食鑑 菰の集解ふ云菰の葉、蒲草ふ類して蔓茂ゝ、夏月水鳥此中ふ宿しゝ以て乳をゝ

六月

御手洗詣 十九日よ

て晦日まで、山城国愛宕郡、糺或ハ只洲ふ作る、下鴨
糺の納涼　の社こゝと糺の宮とのゝ蓋地名よりて是を称ス社の東ふ御手洗川ありこの水清冷ゆて溢れ流る是後と修る七瀬の一ゝ諸人此水に簡て暑と避く、紀事下鴨の社司川合の社の前住吉の東の川辺ふおいて六月祓と修ス十九日より晦日ふ至てそ諸人糸詰し納涼の遊びとなして林間ふ假ふ茶店と設け、酒食及び和多加の鮎、鯉のこゝ鱧の蒲焼真桑瓜、林檎ホの果と賣或ハ竹串と以小團子数ゝ貫き焼てこれと賣る是と御手洗團子とゝ、

御祓

神代巻諸の神ゝち罪と素盞烏尊ふ帰て掛之ふ千坐の置戸と以て遂ふ促徴髪と抜ちむるふ至て以て其罪と贖ハ云ゝ亦曰其手足の爪と抜てこれと贖ゝ已ふして竟ふ逐降ゝ云云故ふ夏祓とゝ号ゝ

御祓川

御祓とゝる川古ちりゝ瀬あり、拾芥抄川合、耳敏川、東の瀧、松ヶ崎、石影、西の瀧、大井川、

道饗祭

晦日　公事根源是ハ疫神の祭り毎年ふ必行ふべきゝ近ごろハ絶て侍るふ鬼魅の他方ふ京路ふ入ざらん為ふ路上ふ供物とそなへて祭るゝ鎮火道饗の祭と四角四境の祭と申ゝ、

水うけ合

通俗志ふこゝとゝ云ふ是ゝ車賤の者、夏日炎暑ふ堪ず水練のまねびわて大勢集て其真ふ乗じ左右ふ別つ分て互ふ水とあびせうけて勝負と争ふとゝ、

茗荷筍

蘓頌曰襄荷春初て葉を生し甘蕉ふ似ゝ根姜芽ふ似ゝ其葉冬枯る根蒲とゝる花ふ花ゝ其性陰と好む木の下ふ在て生るもの尤美ゝ、

水芙蓉

貞享式此名ハ新撰万葉集ゝ

和漢とゝふ秋の部ふ入ゝ共ゝ水芙蓉と云ふ時ハ漢ふハ蓮の一名ゝ手ゝ僅ふハ和らげて水芙蓉と讃ゝ共ゝ芙蓉ふ水と結びゝ云ふ散るゝ云ふ詞とゝ云ハ決ゝ夏ふ用ふべきゝ秋の芙蓉ハ蓮ふ咲て渭てちらぬ物ゝ云ふハ云云

水芙蓉

拾遺集ゝ朋芙蓉の花のゝ云ゝ

ちるゝ云言とゝ云て夏の句とゝ云ゝ、

水芙蓉

盛句とゝ云ゝ

芙蓉

こくうせき木名蓉又鳥芙蓉とゝ水鏡とゝ云ふ葉ハ蓴ふ似て夏黄花とゝ白花のゝ有ゝ

水中ふ生立て潔し、人家近き池ふも生ぜず、依て見れる人稀ゝ、ころぎさと水菱こなほそうる輩まうけり、浮蕾ハ秋ふり、碧花ふり混ぞべらる、

四月

白重

桃花紫葉 白重表裏

白堂平絹更衣の時上下ふこまと着、

薔薇 時珍曰 營實薔薇 此草蔓柔ふ靡き墻ふ依て授ゝ生ず故ふ墻薔と名く、其莖棘刺多く、其子簇って生じ、營星の如しふ故ふこまと營實と名く、又曰春嫩き蘂と抽んて、既ふ長ずるときハ叢と成す、蔓ふ似て莖硬く刺多し、小き葉尖て薄く細き齒あり、四五月花さく、四出、黄心白色、粉紅の二色あり、實と結び簇て成る、生ハ青く熟すれバ紅ふり、人家ふ栽玩ぶもの、莖細葉大ふ延長ずること數丈、花ゆ又厚く大ふ白黄紅紫の數色、百葉、八出、六出のものあり、大和本草 野薔薇花白く單ゝ、

野ふ多し、

新樹 この部若葉の条ふ出す、

茂草 元帝纂要 夏草と茂草とのひ木を蔚林茂林といふ、

椶櫚の花 時珍曰三月末端莖中ふ於て、數の黄苞と出ス苞中に鯉子市人列とるふ乃花と孕めるの狀魚腰の孕子ら如し是と椶魚亦椶筍とも、漸く長じ、苞と出すときハ花穗と成も、黄白色實と結び累々として大さ豆のごとし、

芍藥 蘇頌曰芍藥春芽と生じ、義とふ子、莖の上ふ三枝五葉、牡丹ふ似て狹く長し、二月夏のえじめ花とひらく、紅白紫の數種あり、子と結ふ牡丹の子ふ似て小し、秋時根と採る、○時珍曰芍藥、婥約の如し、婥約ハ美好き貌、血草花の容婥約ふ故ふ名とも、○董子曰芍藥一名將離、別んとする時ふ是を贈る、○花の宰相、えびす藥、えびす草、貝好草、亦の異名あり、其頭假字の部ふわゝらうて註しくるゝ、

胡蝶花 和漢三才圖會 鳥翁是今云胡蝶花ふり、四月花とひらく、狀鳥尾の花ふ似て小し、淡白色黄の紋あり、實を結ぶず、一種小著義あり、ふこと長六七寸石菖の葉の輩のごとし、花もまた小し、浅紫暑菖蒲の花ふ似て小く美し、愛ずべし、

白及 けの部蕙の条ふ註を、

羊蹄根 きの部羊蹄花の条ふ註す、

四手孔

田長 ほとゝぎすの異名あり、或書にいふ此鳥農業を催さんとする四五月のころ来る田を作らざる則作る時過ぎては熟せずと啼 五五田長の名是によるか

○越谷吾山いハく諸鳥皆三指只杜鵑のみ四指あり、その樹上に宿するときハ二指前に向ひ二指後にむかふ四指の田長ハ是をもて名づく或ハ死出とあるものハ非 古今

いとゞくの田をつくれとうほとゝぎすもそこの田長を朝れくふ 藤原敏行

蜀魂 ほとゝぎすの異名

蜀王本紀 望帝其臣鱉靈が妻と淫し乃ち位を禪りて亡去ぬ時に子規鳴く故に蜀人杜鵑の啼を見て望帝と悲む

謝豹 五雜組 蟲を以て毒を覆へ蓋る狀のごとし此虫杜鵑の声を聞ば則死す故に杜鵑を又謝豹といふ

賤鳥 ほとゝぎすの異名あり、

○名ものゝ山里にあり

鹿の袋角 和漢三才圖会 薬草俗にいふ袋角 蓐草

草の生る良俗に以て蓐草の字とす鹿の角初て生ず未開ざる蓐に相似たり故に然る長さ二三寸尖ら

ず堅うして本草云鼻中に嗅べからずと白虫あり、と見て視れども見えず人の鼻に入て額を出くふ藥も及ず

兼三夏物

新茶 古茶 紀事 此月茶を製して諸方の人壺を携へ新茶を領納し然後に壺を山岑清冷の地に寄て盛暑に用る暑湿を避く洛外愛宕山宜しとす、九月茶を製するに前後の次第あり故に摘茶の時焙炉の時擇茶の時とい〻〇古茶とは新茶に對するの名新古ともに夏

紙帳 紙をもて作るる故帳あり、季とも、貪しき者是をもて蚊を禦ぐ

紙帳賣 用捨箱 飛鳥川云むかし夏むくるまゝに紙帳うり冬ふるまゝに古くなる紙衾ありといふ物と商へるが今ハさくあり 五五 此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆記に見へ元文寛保の頃まで八此商人来りしとぞ〇 同の國

鹽烏賊 南越志 其性烏賊と嗜み自ら水上に浮ぶ烏賊鳥是と見て死せりとなすと咏む乃春

鮎 毛吹草 越中の松皮鮎俗 鮎の鮨といふ龍に似る故に

取て水ふ入るゝと食ふ因て烏賊と名づくいふところハ
烏と賊害へバ〻 [ひくうせい] 夏季ふ用ふるハ遠土山中
ゑぞの海濱ふ遠き田舍のことあり江戸大坂ハ鮫花ふ
ハ生烏賊春ハう四五月ふ至て最中ありて塩烏賊と用
ふること [本朝食鑑] 早きものハ三四月熟し、
晩きものハ五六月熟ス是新麥の候
ふ〻し

新麥

[和名抄] 蕓 和名加奈波 [潛確類書] 水中ふ生
す葉鳥葵ふ似て水上ふ浮ぶ花黄白子
紫色三月より八月ふ至て莖細く釵の股の如し黄赤色
短長水ふ隨て深浅あり名づけて蕓菜ことハ菜ふ接と
ハ味甘く寒あり十月漸く
粗硬し十一月蒲泥中にあり、

紫蘇

時珍曰蘇ハ蘇
ふ從ふ音酥舒
暢あり人種の性舒暢うして氣と行て血と
和ス〻ことと蘇と云ハ紫と云ハ白蘇と名ク、

蟭螟

の
蟭ハ
蟭螟ハ蚊の
巢とくふ虫ふりといふ [傳燈録] 仰山洪恩禪師ふ問ふ如
何ふ〻て見性と得ん師の云ことハ蟭螟虫の蚊の睫う
ありて巢と
作るがごとし、

五月

續命縷、朱索、條

達 [たつ] ちの部長命縷の條下ミるべ〻、

菖蒲刀

黒川道祐曰端午ふ
用ふる處の太刀或ハ
菖蒲刀といふ其形の相似ることを以て萬物ふ准へてこれ
と称兒輩腰間ふ横ふへ端午石戰の戯の後ふ多くこの
刀を以て相戰ふこれと菖蒲切ふとるふ菖蒲ふ
勝負と和音相近し一戰勝負の義寓ることふ

神水

[金門記] 重五の日午の時西あるる時急ふ一竿の竹と破
まバ竹節の間ふ必神水あり歴と取て顔の目と以て塗
れバ心腹の積聚と治ス [紀昏撮要]

新宮祭

今日西ふふときハ來年大ふ熟ス
三井寺の山中ふ於てこれと執ス〻祭ス所神新羅明神
[元亨釈書] 新羅明神ハ天安二年円珍命智證船と乗
て唐より帰る洋中怒ふ老翁船舷ふ現て曰我ハ是新羅國
の神〻誓て師の教法と護持し慈氏の下生ふ至ル語て
ミえぎ〻〇三井寺山下の土人ハ之と新宮祭といふ〇大
津所々祭多きこ故ふこれと關祭と誤ることなかつる者ハ
祭と称ス〻ものハ貴船明神の祭ふ貴船の祭關明
神の祭ともふ達坂山ふありし其説迂ふ異〻猶考ふへし、

賑給 公事根源 こゝにいはゆゝきの民に米塩ふぐこと給ふ、京中の僧理に髮を分て捨井遣使承てこれを引米塩の勘文ふと申ことの侍るこゝ大臣陳ふつきて是をさぐし、欽明天皇の御宇こゝろ〻ゆゝ貧窮の者給ふこと禮記月令にも侍るふ也、西宮記 東の手 諸寺北の手八左近の馬場西の手八右兵衛の馬場

鳥毛と革 はの部 羽接 鳥の条に註ス、

麥門冬の花 大和本草 葉厚く五月ふ莖立て頭ふ穂の如く下長く連てさる紫花をひらきて實まる秋熟ス、

毛の花 大和本草 繡線菊ふ木ふ小木ふ最生ス、臘月早く萠生ス四月花をひらく、ゆつまり開きて盛ス、真紅あり淡紅あり、愛ス

越瓜 時珍曰 越瓜地をべし葉ハもゝ〻けふ似さり漢名未詳以名くるあり俗ふ稍瓜と名つく南人菜花と呼ぶ三月種を下し苗を生じ地ふ就て蔓を引青葉黃花夏秋の間ふ實を結ぶ、

新茄和 世人茄子の料和豆の料和といふ其形狀料ふ似さる故名〻ゆゝさもんと五音相通あり、

白ずえ くの部黑ずえの条ふ註セ、

六月

勝曼茶 朔日 元亨釋書 推古天皇十四年秋七月太子聖德御小對して勝曼經を講ス時釈迦世尊此經を說ふ故ふ吾ふ〻此經を講ず講已て蓮花を雨ふ大サ三尺及義疏を制ス世ふ傳ふ○當寺勝曼院の号ハ此道場ふ於て又此經を講じ〻るもの〻故ハ寺号ハ摂州四天王寺の西門西北百歩ばかりふ本尊愛染明王毎年六月朔日開帳ス

食 江次第 六月十日神今食其式 行幸あるときハ中和院ふて行ひ行幸ふ〻きこゝろ〻ハ神祇官ふ於て行ふ 公事根源 神今食年ふ両度ふ行ふ、

志渡寺祭 十五日ふ貴州十七日迄 駿河郡補陀洛山清光院志度寺 眞言宗 緣記 本尊十一面觀世音是補陀洛界觀音の御直作ふ〻ゆゝ本尊ふ御衣木ハ継躰天皇十一年近江國高島郡三尾崎山白蓮華谷より流出湖水ふ漂ふこと七十年崇峻天皇御宇湖

水より又宇治川に流出し山城國淀の津に止る。三ケ月夫より海中に流出、漂壽そらこと數十年、推古天皇三十三年、當浦の高嶋と云小島の磯辺に流寄る。日蘭上人、法しい人者、彼木に瑞光ありしを見て引ろげ、日月と經て観音大士童子と化現し、十一面の尊像と刻まる暮に子の刻に開眼等ましと終に五寸說に云、この堂は藤原不比等淡海公當浦の海人と契と結び給ひ不背の珠と龍宮城より取返しまつる海人の死骸と葬りし所に故に志渡寺といへり、天武天皇十一年辛巳その暮に精舍を建立し、死渡道場と名つく抑志渡祭は彦前大臣天平九年丁丑四月十七日薨ぜ彦前公當浦に下り給ふ時、庶民に慈悲をなすに王の故に庶民この恩沢を報ぜん為、六月十五日より十七日まで三日夜の間、海人の墓に於て水祭をなす、此日諸人交易して市をなすなり、祭とは、彦前大臣の薨去、四月なれども農業の障ある故に六月に祭る、今日國主警固の

源暑 月令 季夏土潤ひ溽して暑し、注云溽は濕なり、上の氣潤ひ故に蒸鬱

義あり

として濕暑となる

清水 說文 岩間に出る泉を清と云、清徹る水、石間にほとばしる

御傘清水 八雑に結ぶとなり、夏之堰 貞享式 清水八ひもぐといへる詞とて、古抄に夏こゝろあせもとて水の清涼と称せり、其詞に及ばさらん、堰結ふの詞に及ぶ

清水とこうと夏季とせり、例の蕉門の新撰に

白梵天 和州田村の梵天祭 種南都にあり、

醤油造 名漢三才

届会 醤油倭名比之保末邪の俗油の字と加ふ、醤油は本草に載る豆油なり

ひ

四月

翡翠の簾 あの部青簾の條注、

平野祭 此祭今絶たり、祭る神五座なり、北野天神の西にまつる、貞観元年十月九日始て祭祀あり、寛弘元年四月十日臨時の祭あり、

廣瀬祭、龍田祭 四日○廣瀬の社、大和國廣瀬郡河合村にあり、○龍田の社は同國平群郡龍田にあり、

源 祭の日は廢絶あり、年に二度行らる、使は前日より大

名 えの部に併せ出す、

公事根

息風神の祭とい人是あり、[増山の井]廣賴い大忌の神、龍田、風神ふう風水の難を除き豊年の祈ふ公ふう祭らるる

日吉祭 山王祭ふうさの部ここをし、

美人草 [名花譜]花四瓣色艶麗葉

ふ類して小ふり [古文前集]曾子固ゝ虞美人草の詩の題注ふ云項王亡滅して虞姫自刎ぬ其墓の上の草と人呼て美人草ここと同く詩ふ云青血化為原ニ草ハ〇一種虞美人草ここ人者あり異種ニ

兼三夏物

單物 [秋名]衣の裏ふ

日傘 夏日日を禦く傘ハ白紙或ハ青紙ニ以ここと張荷の油ニ用ひ今ここと日傘ここ人

冷麥 [青箱雜記]湯餅温麵くゝ麵と以食ここと煎ここと皆湯餅ここ人 [貞享式]冷麥冷汁この二品八京家の式目ハ多くハ秋の季ニしあせる八察るふ冷の字の惑ふ也夏八涼ニ好ミ秋八冷ニ悪ミ天地自然の道理ニして此等八夏ニ成ぬべし

冷汁 煮冷

夏月羹ニ調和して其器ニ小冷水ふ浸し氷の[illegible]ふ煮冷冷汁ここ人

干鱧 和漢[才語会]風海鱔、海鱧、海鱧、海鱧

蚊屋の物手ふどやらも人の名ら
いのこと入ふしんと申侍るハ此謎を支考ふとゝろれう
ゝこ文ひてのこ

五月

辟宜繒 ちの部長命縷の条ゝゝ見ゝ

鬪百草 劉公嘉話 唐の中宗の朝安樂公主端午ふ百草と鬪ハし其物の麝ことを欲し
驍驥しことを取らもし又他の珍ふ得られんことを恐
其餘ことを勿弁〇歐陽公鬪草詩云共鬪今朝勝
盆餐百草香

ひとつもと七日 千来の条ふ注も

未央 園史 金然桃その莖幹三尺叢生して其葉柳ふ
似て梅雨ふる時黄花ひらく桃ふ似て葉長くし
て金糸

姫百合 特珍曰山丹其葉長くして狹く尖
ゝ如し

柳 特珍曰其一名
さゝる者山丹ふり四月花と
開く根少ふして瓣少ふし

菱の花 時珍曰菱一名
蔆其葉支散
故ふ字支ふ從ふその角稜峭し故ふ名蔆しふ三
月蔓を生して延ひ葉水上ふ浮ふ扁平して尖あり光面鏡
の如し葉の下の莖ふ股ありて股の上一莖一葉兩ゝ相
差ひて蝶の翅の如し五月ふ白花ひらく日ふ旨きふ食
合一宵就て月ふ

移蒔 時珍曰移ハ乃挺さゝの
隨つて轉移て

と 称山東河南ふ亦五月ふ
種

枇杷 廣志 枇杷ハ冬ふ華ひらく實黄ふして雞子の如
書ふ云其本隱密婆娑ふして愛ふ足し四時濶ふ葉
驢耳の形ふして毛あり盛冬白花とひらき三四月ふ至て
實ふ成ふ毬と作して黄梅の如し

六月

氷室

皮肉甚ふ薄く味甘く核小栗の如し

日本紀 仁德天皇六十二年五月額田の大中彦皇子鬪鷄
ふ獵ふ時ふ皇子山上より望て野中ふ贈主ふ物あり其
形盧の如し仍て使者ふ遣ハして視ふ氷室ふ入て出
窟ふり因て鬪鷄稲置大山主と呼んでそこを問ふ曰野
中ふあるハ何の窟ぞ答へて曰氷室ふり中累皇子の氷を
將来てそ御所ふ献ふ天皇ことゝ歡ハ宴ふり以後毎ハ
季冬ふ當て必氷を藏め春分の始ふ至て氷を散ふ

氷室御調 公事根源 水司四月一日

ある、九月の月蠶まゆ

で、是をとりてまつる、

氷のおもの　氷水

氷のおもの

と、熱月をさとし、御膳にも氷を用るとの、氷水とハ源氏物語にもこれとり、註に云氷水ハ雨の風もぬるひくあつきひる中ふいうるわざとも、雨の風もぬるひうふ手とひゝてゝ、○室の氷室よりとる事とひゝ云、

枕草紙

氷室の雪

氷室の雪とハ氷室よりとる雪とのこと、

氷室の櫻

青藍接るふ氷室作る山のいと寒きまゝ春夏も暑熱をうけて漸く咲そめる櫻とのこと、

千載集　小野の氷室山のふ殘雪の櫻ふりかけ時「下さゆる氷室の山のかすみ」

氷室守

六月

紀行　芭蕉翁　六月九日湯殿山ふ登らるる条ふ云、勝のけてゝ、やをらふ降と三尺もうゝ積りて、ふらるるあり、降つむ雪の下に埋まれて、氷室守、蓑太

一夜酒

公事根源　一夜酒とハ、ふつく氷室守、蓑太

春と忘まぬ花のゝ、ふ、ふ、と櫻ふ、ふ、ふ、

公事根源　一夜酒とハ、ふつく氷室守、蓑太

ふる竹葉のゝ、ふ、ふ、ふ

と名く樹身光滑高さ丈餘花瓣紫鍛瓣蕊赤き莖葉拒對し四五月始て花さく明謝花實して六七月に至るべし三才圖会紫薇俗に百日紅と名く其皮と樹とハ自ら動搖恰蓮花と名く大和本草紫薇花と以て百日紅と云又猿滑と号ス

鼓子花 時珍曰其花雜色あるもの狀軍中の鼓子の如し故に旋花鼓子の名あり和漢三才圖会此花蔓生花の丸やうして紅色日平に盛んやうして且暮に萎む故に俗に牽牛花と以朝顏と称ス

未草 本草に時珍曰昊公路北戶錄云睡蓮あり蓮草の花ひ此と昼顏と名く其葉荷の如くして大なり其花葉に布て數重夏の昼に當て花とひらく夜ハ萎て水に入晝赤ると出す

○和俗ひつじ草と称ス上の説のごとく未の時ひつじ花萎む故ともいひし江湖に多し

射干 時珍曰垂盧數種あり名狀一ならず其實一類各色あり並に正二月と以て種と下し苗と生ず蔓と引て延縁し其葉各瓜の葉に似て稍圓やうして柔毛あり嫩きとき食ふべし故に詩云

蠡花 時珍曰蠡數種あり大小長短各數種色あり大なるの者ハ蠡瓢と呼べし小なるの者ハ蠡盞と呼べし

蔓 和漢三才圖会蔓草の類ハ多し

瓜 和漢三才圖会姫瓜ハ俗に糸瓜と云ハ蔓瓜五六月小く瓜を生ず大さ二寸ばかり圓くして淺青色味苦く食ふべからず熟して稍く黄微甘くして食ふ堪ず雅州府志

姫 傳墨と以て鬢髮眉目口鼻と畫き水と以て其莖に結ひ提壺に入て玩具とす續猿蓑集

姫瓜や神に入てもかもうるも至曉

將酒造 時珍曰大豆の將酒名に云將醬ハ將に醬のごとく食物の毒を制すと劉熙の釋名に云將の暴惡と平らぶ如し

引飯 飯の奈出

四月

冷水賣

江戸の街頭ゝ手桶一荷と
おろしゝ火暑ゝ冷水とうる

盂夏旬

扇と賜
扇の絆

年中行事歌合 夏冬奉あらくまる

始ゝ臣下ゝ御酒とらしゝ或ときゝ
ゝ旬とハまらぎの或ゝ旬ゝ五ゝ旬ゝ
の義ゝり内裏あらゝ造らるゝ初ゝ南殿ゝ行せ
るゝゝ新所の旬と申ゝ此四月の旬ゝ侍扇と
りて上達部ゝたまゝひきて諸取作法あり有也

杜本祭

上の申 ○河内國安宿郡國分村祭る神二座齋大人神經津主の命ゝして香取
大明神是ゝ公事根源杜本祭四月上申日ゝ神社河内
國ゝあり年の日使ゝ仁和五年四月ゝ祭初る河内志杜本の
神社いゝ人古市郡駒ゝ谷村ゝ式ゝ安宿郡ゝ屬ゝと
あれゝ一向その所ゝ手ゝ駒ゝ谷村と國分村と須つぎ
の故ゝ或人云国分村火の谷と申ゝ所ゝ當時杜本の宮と
唱へ来るゝ古代ゝ杜本千軒ゝて坊舍千軒ゝて勅使奈尚
ゝ下しゝ申傳るゝその近辺土中ゝ古毛と折々堀出
もゝゝ社頭と申ゝ所ゝ大木の樟ゝあり其の木
ゝ藤のつらはゝ春ゝ花咲ゝ常ゝ為ゝ木立ゝ神木
と申傳るのゝ四五丁以前山田の日槍とゝ以て山
の持ゝ善九郎と云者件の樟と伐りゝ木斧ゝ
柄ゝり残ゝ俄ゝ山一面ゝ焼出件の斧ゝ善九郎ゝ家のうち
へ飛来る程ゝ善九郎ゝ妻病死ゝ大の谷明神の影向ゝ
ゝ村中騒動ゝ小祠と建て神楽
と奏し神慮ゝ慰め奉るゝ此ゝ出ゝ杜本の宮の
事ゝ年數ゝ所善九郎方ゝ古ゝ書物の證ゝ
件の善九郎ゝ子孫ゝ九歳の孫一人
残ゝ親族ゝ寄書物穿鑿ゝ出し
ゝ木ゝ伐ゝ
と異名と呼来ゝ道主國分村の枝郷ゝ所ゝ
信仰ゝ奉ゝ小社の上ゝ震ひ九月九日御酒燈明
と捧げて祭る ○延喜式杜本祭夏四月冬十二月並上
の申の日ゝと祭る
今考ゝ
う記ゝ
ほゝ

諸蔓

かの部加茂
祭の条ゝ出

文字摺花

大和本草 莖の長さ尺ばかりにして葉八百合のごとくして狹し四五月の花をひらく紅白色花連なりてふさ一莖に十餘つらなりひらく紫蘇の

五月 ことゆひ草 或人云紫ことゆひ草

ごとし園に植て賞翫す

證類本考 藻苅、藻舟、藻の花 時珍曰藻は水草の文あるかゆ潔淨澡浴するごとし故ふるとゝ藻この八三種あり葉の長さ二三寸、兩々相對す、即馬藻と葉細くして絲及ひ臭の鰓の狀の如くふしてゝ節々ふ連つて生ず、即水藻あり俗ふ鰓草と名づく

和漢三才圖會 時藻 水藻 和毛毛三日毛波海人船ふ乘つて出て、繩を以て腰ふ繫ぎ、水ふ沒してこれを苅取て田ふ投、稻を養ふ、

餅梅

名義未詳、梅子ハ梅雨の時熟す、其肉黃熟して更ふ滓なく、後多きゆえ疑らくは是を餅梅といふ、和俗果穀の類の粘るものを呼で餅とす此をいふ、

搽瓜 越瓜 胡瓜 ふ切劈横ふ割て塩を攀てゝ水と去て、醋ふ和して食ふことを搽瓜といふ、

廿四日 千團子

○一本ふ千誕子ふ作る、江州三井寺の鬼子母神へ今日諸人參詣すこの神一千の子ありと以て孕るゝ餅一千と供ふる、故ふ千團子といふ、

石蘚 一名いしのね 團子といふ、

いの部 ゐ

五月 赤靈符

抱朴子曰或人兵をさるの道を問ふ答曰五月五日を以て赤靈符を作り心前ふ著、兩翼家長くして腋の下にあり或ハ以爲口るゝ腸を以て鳴者と云、

蟬 初蟬 格物 空蟬 論蟬

種類多し、枚舉すべふ遑あらず、畧之○空蟬をこの

蟬とゝいひ又もぬけがらとゝいふ古言のとゝふ多し、

石竹 ふの部撫子の条ニ詳す、

梅檀の花 棟しなの部

五月 六月

時珍曰石菖水石の間ふ生ず葉ふ劍脊あり瘦根密節高サ尺余の

るゝ花ハ石菖蒲と人家砂ふ以て こと栽こと一年春ふ至て剪洗ふ愈剪バ愈細ふなる、高サ四五寸葉韮の如く根匙の柄の如し、粗き者亦石菖蒲と其しきこと 錢蒲ハ根の長サ二三分葉の長さ寸ばかりこと錢蒲といふ是なり按ずるふ、羅仙神隱書ふ云石菖蒲一盆と凡上る置夜の間書と視る時、煙と收て目と害をなの患なし、

施米（せまい）

公事根源 施米東山西山北山をどいふ所の山寺ふ付るたつきたのき注師どらふ米塩と施さうる事ふ五月賑給六月施米いふ所貧窮孤獨の者ふ米とたまふふうう誠ふありがたきことふ

蟬の諸声（せみ）

多く鳴くるといふこ 玉吟 鳴立てとも声もかくれも木隠三の雨ふりもぎきせこのもの鳴ちも 後拾原院

蟬時雨（せみしぐれ）

蟬の多く鳴立るといふ、樹むらふ蟬の鳴声の多くうしまりきと時雨ふまがごらへこいふあらぐ

蟬の脱（せみのぬけがら）

脱ハ虫の皮と解とのふく是と蟬退 枯蟬といふ、

せごし 鱠（ふなずし）の条二注也、

鱠 部沖

四月

住吉卯の祭（すみよしのまつり）

初卯 紀事 四月

卯の日摂州住吉祭相傳ふ卯の日此地ふ垂跡まうとこの神奥基瑞籬の外ふ三の門ふ至つて辻車も神主及ふ宜各卯杖と持ることうすれ草といふ、

菅の宮祭（すがのみやまつり） 中午

○祭の日竹馬煎餅を鬻く者多し、

神社啓蒙 小津の神社近江國野州郡ふ在、祭所の神三座所謂大宮二宮三宮是ふ有り、○神躰ハ宇賀魂ふ此と世小菅の宮

祭と称也、

菅笠擔（すがのかさにな） 詣の条ふ主也、

篠の子（ささのこ）

和漢三才圖会 篠ハ小竹、叢生して草の如し、俗ふ笹の字を用ふ凡篠ふ數種あり、馬篠 兒篠 焼兼篠 五枚篠 此等の筍皆篠の子ふあり、又一種 長間竹 俗ふ奈伊竹といふ 長間筍 篠筍 諸州ともふあり味ひ苦く多くして甘く微ふあり、多く食ふふ耐也、

兼三夏物（かねのみつなつもの）

涼し（すずし） 風土記 仲夏長風扇暑注云此節東南の風常ふあり俗ふ黄、

和漢三才圖会 鮎と醸る法塩

雀長風と名づく、

鮎（あゆ） 少し糝して壓也こと二三日ふして熟る○宇治丸、蛇鮎、ちこ〳〵鮎、釣鮎、鮎、早鮎、一夜鮎、飯鮎、月夜ホの鮎ありて其頭字の部ふとくて註し、

雀鮎（すずめあゆ） 毛吹草 摂州福島の雀鮎是江鮒といふ臭ふあり、その大さ雀ほどありて臭の腹ふ飯を多く入るるふ膨ふて雀の形ふよく似るふ依て名とす、

馬歯莧（ばしけん） 倭名抄 馬莧 和名字萬比留○特珍日馬歯莧其葉比並して馬の歯の如し園野ふこと生ス六七月細花とひやきふく光る實と結ふ、

[会] 其性剛強ーて倒懸の間ふ懸るふ日と經て猶活を景天草の強ごとし、[大和本草] 此草と軒ふ入れハ馬宝西ふ入ら

[紀事] 云云、

五月

住吉の御田植 廿八日

[摂陽群談] 摂州住吉神田と植る以て神事と行ふ[傳] 神功皇后三韓と征しときの凱歸陣のとき長門國より稙女とめて五穀農業のことと世ふ廣くもたらしぬ[紀事] 其の季乳字の遊女ふ早とと女とつとむといへり[紀事]

[追加] 泉州堺乳守の妓女のうち、約束するところの季公羊季明けさる女三人来りてこまと植、今日神殿と植てのち妓院の暇と出すといふ云云 住吉の御田ハ古き由ふもとて紅藻の千早ふ似ると著し赤き袴ふ市女笠といくく是古代の姿の殘まるとし今ハたゞ植る真似とあるのみなり、

水馬虫 漢名水黽 わく名也

其身細長く五六分むりの黑き虫く長さ四足ありて身ハ水ふつゞけ水上と駈るとし馬のごとし依て水馬と名つ、幾内西土ふて塩賣江東の兒童シヲコシホとい玩紫ふて アメカタといふ其臭地黄煎の臭と関東ケンポウ

ホウ〇其色黑赤ふて鰹節ふ似ると故ふ鰹虫とい一説ふ此虫味甘く餳ふ似ると故ふ餳賣〇今江戸の方言ふ

アメンボウ

忍冬花 忍冬ふ部ると

[部] 黄紅の數種あり上ふ向ひてひらく、花瓣鮮明ふして美と奥州ると出つ、

透百合 和漢三才 面会白

末摘花 藍の条ふ

注 [八閩通志] 食貨ふ部云木子其品一ならず、白李赤李黄と名づく實清く脆し五六月熟す、臙脂李ハ皮肉共ふ紅あり味甘く夏熟す、琥珀李ハ皮紅ふて肉黄と味微渋し秋熟す、

木子

六月

住吉の御祓 同火替 摂州住吉の社僧御祓を修すると晦日

[紀事] 六月小ふ[ハ]二十九日と用ひ大あれハ晦日と用ふ當日毎年神輿と早の輩住吉の松原ふ宿し朝ふ浸て垢離とふ[ハ]今朝神輿一基と宮前ふ寄せ社僧祝詞と誦して神とうつし志うして後社司六七十員騎馬ふて奉供す既ふて神輿堺の御旅所ふいくる是とり先社僧六七輩素絹と著し茶磨笠といくく騎馬ふて神ふ先ゞて堺ふいくる即神と旅所ふ迄ーて又祝詞と誦す

夜ふ入、神輿住吉ふ還幸堺の市民手毎ふ炬を点してこれをとむ人迎送相連りて白晝の如しこれと火替といふこの日大和國神妙寺山の土をとりて神輿ふそそれと堺の宿院神事、あるひハ名越の後ようこい荒和の後とこれ〳〵

菅貫ちの部茅の輪 **納涼**夕橋もぐみ もぐみあぶ

山家俳集

あき石ふのりろり野波 五元集

千人の手を欄干や橋もぐみ 其角

涼臺 開元遺事長安の富人暑伏の中おとふ林亭の内ふ於て畫柱と植錦を以て結ひ涼棚とも座具と設け名妓と召て同〳〵座せしめ逅ふ相避暑會と

すゞしき玉 秘蔵抄そらもまていさごとてらも、

朗詠 燕脂招涼之珠富沙月之宮

自得○すゞしき玉ハ燕の招涼珠といふ

菅苅 漢三才

嚴会菅本綱ふ載ル蓋荊三稜の属ひゝて根異あり齋と蚊帳釣草との異なし按るに小菅の葉ハ茅ふ似滑澤ゝして莖ふ白粉あり云云○今云菅ハ葉ふ劍脊あり硬く韌て莖の本白し別ふ一種と抽んで穂と出て六月

葉と苅て乾せハ白色、笠ふ縫ひて美あり、

蟶 時珍曰其狀蜉蝣の如し大さ身短く節促て足長く毛あり樹根及び糞土の中ふ生ずるもの外黄内黑旧ち草屋の上ふ生ずるもの外白内黯皆湿熱の氣薫蒸て化生す夏より秋ふ入、蛾て蟬となる、

水飯 洗飯 源氏物語 常夏巻ニ

すゞしくもあるかな

云、干飯あゝの類水つけ○或御説ふ云飯とあつ〳〵して、

つちひて食ふ物、

追加

いい

五月天仙菓 月令博物筌新州の山中ふあり花ふくゝて実を結ふ枇杷ふ似てふきゝふ児好んで喰ふ、

樊噲草 大和本草 和呂 是亦俗の名つけし處あり葉蕗の葉ふ似てまゝあり黄ふ花さく、

茶筅草 麥の事と茶筅草とふ穂の形を見立いふ名、

夏 す追いはちろをた

は

四月

ろ

四月

五月朝

露草 糸切歯 下學集ニ錢朝露草ト出ス、一名銀錢花、その花の形揩ニ似テ小く、色白く青くして、底ニ黒紅のきわひあり、葉ハ三出五出ふして西瓜の葉ニ似て、高さ二尺ばかり、朝ニ開き夕ニ萎む、草石蚕 異名ト甘露子、土輔、滴露、地瓜子といへり、五月根ト掘蒸して喰ふ味一百合の如く根老蚕の如し、故ニ名づく

3 四月 盧陀草 月令博物 筌及び四季部類未詳と四月の部ニ出ス、是ハ今ノルウダ、唯ルウダといふハ秋のもじめ花さき秋の季ニ入る 天和本草 ノルウダ近来紅夷より来る、是紅夷ハ多き、葉ハ細くして茎の本ニ木のごとし、三四月黄花をひらく、四出して一片の間おのく一蓋と出て花の心ニ實あり、岩梨の実ニ似たり、夏実のるその年子とまけハ来年花咲実なるその葉茎根おのく枯ぬ、この草常のルウダの性ニ似て、性猶そくもとくり、常のルウダより悪良甚し、

2 四月 車前草の花 秋の部ニ注ス

1 四月

ね 橙の花 喜祝ニ用ふると以て正月の部ニ載せ、その條ニ注ス

四月 鼠もちの花 藪椿と

る 五月 刀豆の花 秋の部ニ注ス

む 六月 葎茂る 和漢三才 晶全本綱ニ葎 故墟道の旁ニ生ず二月苗を生ず茎ニ細き刺あり、葉節ニ對して生ず、一葉五尖微蔓麻ニ似て細き齒あり、八九月細き紫花を開く、子と結ぶ 続虚栗 甲斐山中山賤のおとこの閑る葎ハ色美

う 五月 茵蔯蒿の花 秋のうの部茵蔯蒿の条下ニ注ス

く 四月 草下毛 大和本草 木ニも下毛あり、花ハ相似たり、初夏細き紅花と発く、一朶ニ群て開くこと、敗將菌の如し○ 苦豆草 此詞の部ニ出せる下毛ハ木下毛なり、 四季部類 ようそう、青藍接もるニ苦草ハ苦草の誤 くきハ小ふきくの欠畫せるなり、そ愛ニ贅しく

初学の惑ひと解く但し苔蘚ハはの部ハ注しもるもの、こゝ以見る也、

蛇狀子

本草綱目 蛇床子、古說ヤブコウジ、即竊衣、不雅竊衣、注云芹ハ似て食ハべし、子の大さ麥の如し、

五月

金龜子

大和本草

両々相合しもあり人の衣ハ着く、北戶錄曰甲蟲也、五六月草蔓ハ生ず南人收て以粉ハ養ハ本草蟲名蟲の附錄ハのせらり婦人白粉の器中ハ入ハ雄ハ綠色光あり雌ハ灰色光ナシ形狀ハ飛蟻ハ似て長し翼あり額ハ両角あり長し六足あり俗玉虫と云ハ、

六月

あ

四月 青木の花

花紫黑色ハ美ハ葉ハ桃の葉ハて大あり實と結ぶ其ハ青く熟もるも紅あり故ハ漢名桃葉珊瑚と云ハ、

五月

あつめ汁

五日 とら豆燒豆腐干鱈ちゝぎさゝく の物と汁ハ燒て食ふ云とあつめ汁云、

六月 蘆茂

ちけい あひて江の水細き芦間ハ紹巴、

ま

兼三

夏物曝

きの部木布の条下ハ注もて、

ゆ

六月 水化粉

水の珍ハ麥とあのゝもて水飛して製し暑中砂糖ハ和し冷水ハ浸し飲

し

五月 神曲製

本草 主治、水穀宿食癥結積滯を化ス、麥麴 時珍曰、葉氏水雲錄云五月五日或ハ六月六日、或ハ三伏の日、白麪百斤菁蒿の葉十三斤赤小豆の末杏仁泥各三斤蒼耳の葉の汁、野蒿の葉の汁、各三斤汁を用ひて麪豆杏仁を和して餅ハ作り、麻の葉或ハ楮ハ葉ハ包し置醬黃を造る法の如し黃ハる衣の生ぜるを待て晒し乾ハ

蕺菜の花

花四葉ハして白ク葉の臭れを取ハ、甚ハ除きのゝ、篤信翁曰駿州甲州のお中の茂して後ハ除きのゝ、甚ハ繁村民ハ、たゝこの根と堀ハ、飯の上ハおきむしして食ハ甘いハ、

ひ

六月 日向葵

大和本草一名西番云向日葵也漢名之巢大ハ莖高し六月ハ花ハ頂上ハ只一花のみ日ハつきてめぐる花ハ枯ハ最下品し

只日ふつきくゝ由ゝると賞まるのゝ

猪薬 日の道ゝ葵傾くゝ五月西苗蕉、

四月 錦

葵天 大和本草 冬葵ふ似て別ゝ冬葵ハ葉ふ岐あ五ふ

其花紅紫白数色あり、錦葵ハ葉四ふして岐ふ錦葵ふ

実をうゝて翌年莖高らぎ花さゝ三年ゝかるて

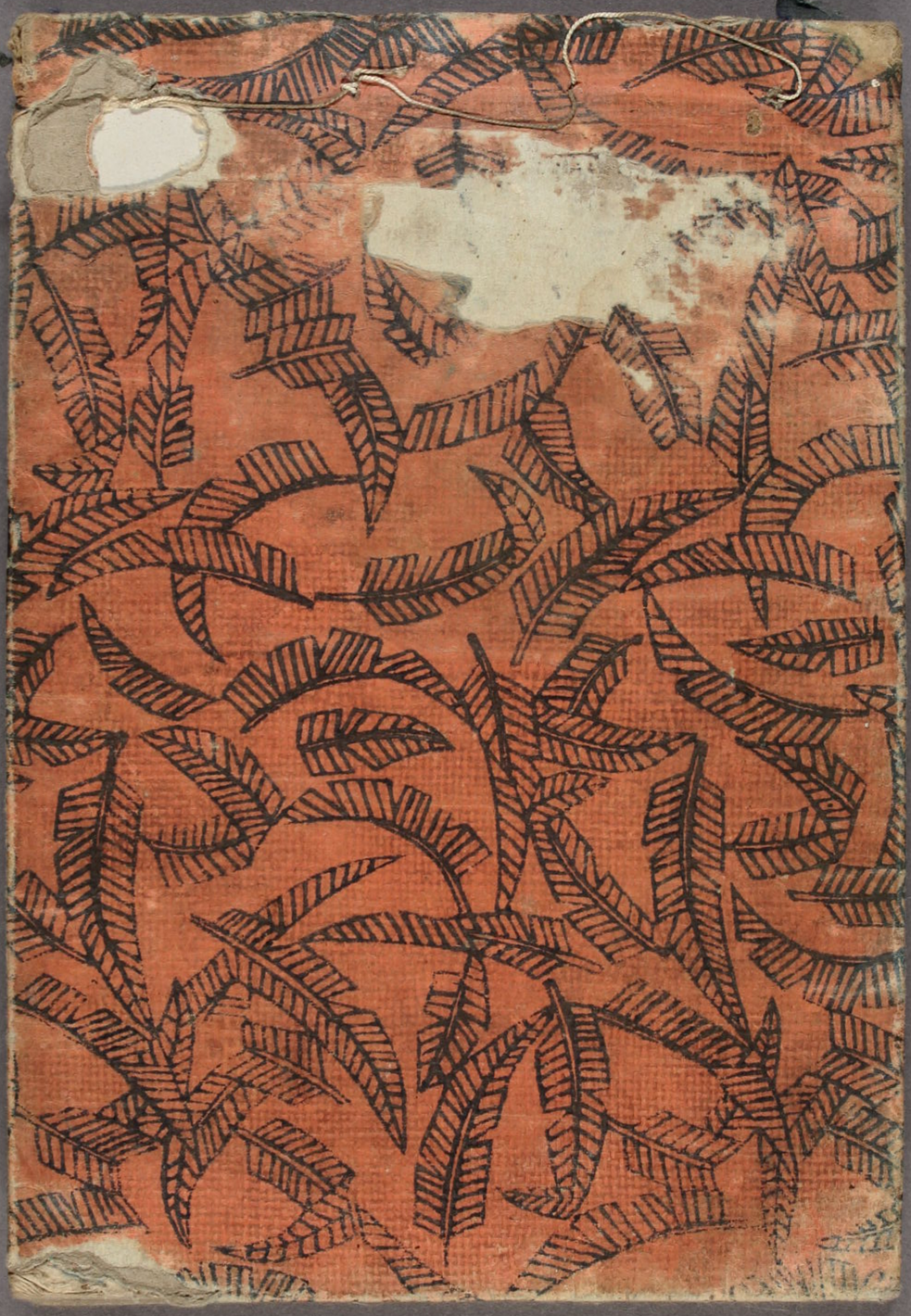
莖高く枝多 花鏡 木の高さ二三尺莖

くして悪ゝ、千日紅 淡紫色、枝葉婆沙多ふ夏

深紫色と開ゝ花千瓣細碎、円整ふして毬のゝ

枝の末ふ生ず、冬ふ至て巣蓑ひとゝ

婦女採て鬢ふ簪

ず、最能久ふ耐ふ、

増補歳時記草夏之部終